ISSN 0914-6962

宮島の歴史と民俗

HISTORY AND FOLKLORE OF MIYAJIMA

NO. 7

1988

宮島町立宮島歴史民俗資料館

MIYAJIMA MUNICIPAL HISTORY AND FOLKLORE MUSEUM

目　次

○はじめに…… 1

○厳島における諸社堂の建築傾向について……佃　雅文…… 2

○資料館の活動…… 13

1．入館者数…… 13

2．年度別予算一覧…… 15

3．資料収集…… 16

4．調査・研究等…… 17

5．展示普及等…… 17

6．歴史民俗資料館協議会…… 18

7．購入図書・受贈交換図書…… 18

○町史のあゆみ…… 24

○資料紹介―「滑稽道中宮島みやげ」……高橋修三…… 29

はじめに

今年15歳の元服を迎えた当資料館、開設9年を経た町史編纂室共に、全国の関係者の温いお支えによってそれぞれの歩みを続けております。

特に全国の資料館・博物館等から御送付いただく年報・紀要・資料目録・研究報告さらには特別展にかかわる図録等々は、居ながらにして各般の情況を認識することができ、この世界の横の連携のすばらしさに感服すると同時に、全国関係者の御厚情に対して改めて感謝の意を表したいと存じます。

さて「宮島の歴史と民俗」No.7の刊行にあたり、当資料館にかかわって申せば、当館長年の念願であった収蔵庫が独立した土地に建設される運びとなりました。また歴史民俗資料館としての基本的な活動の十全を期し、その使命を今及び将来に向けて十分に果たすために、何を考え、何を行っていかなければならないかについて、その基本的な構想—「宮島歴史民俗資料館整備計画」—を作成中であります。

その際私どもが課題としている事柄を1～2挙げれば、

- ○ 江戸時代から伝わる保存民家及び町民から寄せられた厖大な歴史民俗資料を大人はもちろん、これから大人となる若い人々にどう紹介し、問いかけていくのか。
- ○ 生涯学習時代における社会教育施設として、どのような学習の場となるべきか。
- ○ 宮島町が、丸ごと特別史跡・特別名勝に指定されており、観光客・見学者が日本全国、世界の各地から来島されるが、これらの人々の観光・見学内容を当資料館が総括的に説明・紹介する役割を担うためにはどうあるべきか。

等であります。

いずれこの計画を精査した上で、館を「中身」「うつわ」共に改善し皆様方の御覧に供したいと考えております。

お手元にお届けしましたNo.7に掲載しましたものは、これらの課題、特に「中身」の改善を進めていく上で不可欠な、資料の調査整理の過程で生み出されたものであります。

どうかこの上とも、いっそうのご指導ご鞭撻をお願いいたします。

宮島歴史民俗資料館

館長　藤岡武人

厳島における諸社堂の建築傾向について

宮島町史編さん室
佃　雅文

1．はじめに

「木は二度生きる」。奈良法隆寺の修復工事を長年にわたって勤め、最後の宮大工といわれる西岡常一氏の言葉である。その意味は、樹齢2000年の山の立木は第二の生き場所である堂や宮で、2000年あるいはそれ以上の年月にわたってその建物を支え続けるということである。氏の祖父の代からそう信じていた事が法隆寺を支えるヒノキ材で新たに確かめられたという。(西岡常一・小原二郎『法隆寺を支えた木』1978　日本放送出版協会)

これほど年数を経た神社や寺院が数多く見られる奈良や京都ほどではない厳島にも、厳島神社をはじめとして大鳥居、五重塔、千畳閣（豊国神社）など国宝や重要文化財に指定された建物がある。

現在、こうした建物は1950年（昭和25）に制定された文化財保護法に基づいて修理保存、維持管理が行なわれている。1989年（平成元）千畳閣（豊国神社）の屋根葺き替え工事が完成したことはまだ記憶に新しい。この工事のなかで、軒丸瓦に金箔が貼られていた事が発見され復元された。

ところで、こうした法律に基づいた建物の修理保存や維持管理は、1880年（明治13）の古社寺保存の内規制定に遡る。そして1897年（明治30）古社寺保存法が公布されるにいたり、厳島神社の明治、大正、昭和の大修理もこれに基づいて着手されたといえる。ただ、こうした法律の制定をうける以前から建物の保存修理などの維持管理はおこなわれてきたはずである。やがてこれらが法律の制定をもとめる動きに結びついていったものと想像できる。その過程を今明らかにする事は大切ではあるが容易な事ではない。

1945年（昭和20）９月、敗戦直後に西日本を襲った枕崎台風は、厳島神社奥の紅葉谷川の土石流を招き、その土砂は神社の西側を埋め尽くした。当時の混乱した政治情勢の中で破壊された建物を復興するため、様々な人々の叡智と努力がそこに結集されたことは言うまでもない。

こうした叡智と努力があってこそ全島が特別史跡、特別名勝であり、厳島神社をはじめとする建物が国宝であり、重要文化財であるといえる。

そこで、明治以前においてこうした建物の修理保存、維持管理がどのような形で行なわれていたのか辿ってみたいと思う。

2．幕末の厳島神社

幕末の志士清河八郎は、1855年（安政２）３月郷里の山形県東田川郡立川町清川を発して、母を伴ない伊勢参宮の旅にでた。この旅の様子は、『西遊草―清河八郎旅中記』として今読むことができる（1969　平凡社)。

それによれば、伊勢に詣でたのち讃岐の金毘羅を訪れ、さらに脚をのばして、安芸の厳島まで船

でやってきた。厳島への到着は、旧暦5月19日の夕方であった。清河にとっては3度めの訪問であったようだ。はじめて厳島を訪れた母親の感動に誘われて、酒の酔いも快く感じられる八郎であったが、厳島の様子を細かく描写している。まず、廻廊にかけられた奉納の額の数の多さを記すが、本社の中にある大きな額が煤に汚れているのを残念がっている。廻廊にかけられた額は、どれも奇麗だったようで、酒井抱一、谷文晁、長沢蘆雪、宗紫石の名をあげている。また、廻廊の柱に加藤清正や後藤又兵衛の落書きがあったそうだが、法華宗の愚者に削りとられてしまっている。この落書きについては、今たしかめるすべはない。このことが清河にかなりの衝撃を与えたらしく、「愚人はその人を尊ぶためとは言いながらかえってその人の遺物を損じてしまう」とまで言わせている。

大鳥居については、6、7年前の大風で鳥居の額が吹き落とされその修理がまだできていない。建て替えするための材が見つからないままであったが、熊野で楠があり、今年の冬までには完成するという話であったと記している。

この大風は、『厳島神社昭和修理総合報告書』(1958)によると1850年(嘉永3)8月7日のことだったらしい。この大鳥居が再建されたのは、1875年(明治8)7月17日である。まさに大鳥居のない宮島が25年間続いたといってもいいであろう。

こうして厳島神社をはじめとする建物やその周りの景色との調和をみた清河は、「我が国の三絶景の一というのももっともである」と述べている。しかし、神社の建物の個々は毛利元就の再建以来現在はほとんど手をつけていないので、本社末社ともに破損し、いたましい姿である。広島藩主の世話もまれで風雨のしのぎをするばかりであるとも述べている。この文意は、当時の不安な政治情勢の中で英雄の出現を期待する清河の心情の吐露とともに理解すべき箇所であろう。ただ、それを差し引いてみても、当時の厳島における建物の現状を反映しているものと考えたい。

神社や寺院の建築に際しては、その時々の政治状況や意図が深くかかわってくるのは言うまでもないことである。ここでは、そこまで立ち入れないかもしれないが、清河の言うまれな世話がどのように行われたのかを残された棟札写からみていくことにする。

3．厳島の棟札写

(1) 作成の契機

棟札とは建物の棟上げに際して、工事の由緒、建築の年月、建築者または工匠の名などを記して棟木に打ち付ける札をいい、頭の部は、おおくは山形をしていると説明されている。(『広辞苑』)この棟札を写し取ったものが棟札写である。

厳島の建物の棟札写のうち、古代中世のものはすでに『広島県史　古代中世資料編』で紹介されているので、ここでは江戸時代のものに限ってみていくことにする。

棟札写がつくられる契機は、いろいろあるようである。ひとつは、その写を工事の関係者に記念として配るという目的もあったようだ。1875年(明治8)の大鳥居再建の棟札写など宮島以外の地で多く残されている場合がある。

もうひとつは、記録にとどめるという理由である。1778年の「厳島社堂并弥山社堂棟札写」の冒

うち39件、約17%が宮島以外に所在する建物である。これらは、廿日市市にある地御前神社、速田大明神(現速谷神社)、宮内天王社と佐伯郡大野町の大頭神社である。いずれも厳島と関係の深い神社である。

所在地別の割合でみると、厳島神社内が約29%で全体の3割を占めている。そのつぎに弥山・奥院の諸社堂が約20%で、厳島神社の周辺および東町と浦々の3つの地域がほぼ同数の約13%ずつを占めている。一方西町は8%と少なくなっている。

(2) 工事の内容

棟札写に記載された工事の内容は、第1表のように18種類ある。これを建立、再興、葺替、その他の4つで区分しその割合を示したのが第2図である。こうした区分でみるとあまり大差はないが、葺替の割合が40%近くを占めていることがわかる。

さらにこの4つの工事の内容区分が時代の変遷のなかでどのようになっているかをみたのが第3図である。

建立は、16世紀までと18世紀後半に7%程度みられる。再興は、18世紀後半に約23%、その前後が3〜4%である。葺替は17世紀まではわずかだが、18世紀しかも後半に28%まで集中している。19世紀後半の約4%も注目される。

こうしてみると17世紀までの棟札写からは建立の区分にはいるものが比較的多くみられ、再興、葺替の区分は18世紀以降に多くみられるという傾向にあるといえる。

(3) 集中する時期

所在地の地域別に棟札写を記載された年月に基いて50年単位で区分してみたのが第4図である。

6つの地域ともに見られるのは、18世紀後半にあらわれる山である。ただしこれは、残っている資料の状況を多分に反映していることはいうまでもない。

まず厳島神社（Ⅰ）からみてみよう。

17世紀前半を除いて各時代を通じてなんらかの工事がおこなわれている。19世紀後半にも工事の件数がみられる。ただし19世紀後半は、資料の都合上1860年代までとなっている。また1599年までの数は、1376年（永和2）からの総計である。

周辺地域（Ⅱ）では、17世紀前半と18世紀前半、19世紀後半に件数がみられる。（Ⅰ）とのちがいは、17世紀前半に件数がみられることである。

西町(Ⅲ)では、17世紀と18世紀に件数があるが、総数の約8%15件しか棟札写にあらわれてこない。

東町（Ⅳ）は、数は少ないが17、18世紀までは件数がみられる。一方19世紀になるとまったくなくなっている。

周辺の浦々（Ⅴ）をみると18世紀とくに後半に件数が集中しているが、その他の時期にはまったくないといってもよい。

弥山（Ⅵ）では、18世紀後半から19世紀前半に集中している。17世紀と19世紀の後半にもあるが数は少ない。ただし、（Ⅰ）と同じく16世紀までに工事の集中がみられる。

頭には、つぎのような書状の写が加えられている。

宮島社堂棟札之儀唯今迄／区々に有之ニ付都而重立御修覆／再建等有之節者以来別紙／之通り相記候、勿論弥山一山之内者座主并多聞坊相記可／被置候、下地形合為御心得別／紙入披見被置候、已上

極月廿一日　　伊藤郷助

大願寺手代

大蔵坊

こうした宮島奉行からの通達をうけて、大願寺はつぎのように述べている。

一．別紙之通申来候ニ付此度より相／改弥山一山茂当寺より棟札相／納申様相成候、則弥山棟札之／写数ニ控置、尤奉行所青木／保之進殿時分より仕掛有之候社／堂之分者奉行青木保之進と／書記置全弥山棟札改て／当寺より相納申候様に相成候事／者伊藤郷助殿奉行所之時也／当寺無住に付金剛院院代／相勤居申候処、此節者忌中故大蔵坊当寺院代相勤／申候、已上

安永七戊戌年六月吉日控

厳島社本願　大願寺

これまで、それぞれにあった棟札写をまとめて大願寺から納めさせ、弥山の棟札も大願寺でとりまとめるよう指示したものである。主な修覆や再建に際しての記載の形式を、別紙としているが、この別紙がそれにつづく棟札写にあたるのかどうかは不明である。

(2)　厳島の棟札写

ここでは、宮島の大願寺に所蔵されている棟札写について取り上げることにする。大願寺には現在棟札写が約40点ばかりある。この内比較的まとまっているのが、1714年（正徳４）「厳島社堂所々棟札写」と1778年（安永７）「厳島社堂并弥山社堂棟札写」である。前者には、「文政二年二月改　諸社堂鳥居総棟札控」の表紙が補われ、大願寺手代の名が記されている。

棟札およびその写を取り上げる場合、棟札の形態そのものの検討を行う必要がある。しかし、ここでは形態論は今後の課題として、建物の種類、建築年月、工事の内容を中心に時代的な変遷と宮島内での所在地の分布についてその傾向を示すことにした。そのため、願主、願意、工事関係の役人や職人などの検討は充分とはいえないことをことわっておく。

４．棟札写にあらわれた建物と分布

(1)　総数

上記大願寺の棟札写を整理し、重複分をのぞくと件数は、224件になる。建物の所在地で区分したのが第１図である。宮島を便宜的に６つの地域に区分してあらわしてみた。１つは厳島神社と石垣でかこまれた地域、１つはその周辺に位置する建物、つぎに塔岡を境に東町と西町、それから杉之浦、包カ浦などの浦々、６つめは弥山である。所在地の確定が困難な建物は不明でまとめた。島外に所在するものも宮島以外にまとめた。

以上から、厳島神社ではほぼ全般にわたって工事の手が加えられ、周辺地域もほぼそれに準じている。ただし時期が厳島神社より遅れる傾向も考えられる。一方東西の町に所在する社堂では、18世紀までは何らかの工事の結果が棟札写として残されているが、19世紀からはみられなくなっている。浦々の社堂では、18世紀にしかも再興や葺替などに集中してみられることから、この時期に整備の手が加えられたことがわかる。弥山の場合、前述した宮島奉行の通達が資料の残り具合に影響しているとも考えられるが、18世紀後半にかけて再興や葺替の内容で弥山全体にわたる整備事業が行われたのではないだろうか。こうした傾向が棟札写からみられるといってもいいだろう。

(4) 分布図

棟札写にあらわれる建物の所在地を、現在の市街地付近にかぎって示したのが第5図である。時代をおって工事の手の加わった範囲の広がりが窺知できる。これでみると18世紀前半から工事の手も厳島神社中心からその周辺や東町、西町へと広がっていく気配をしめしている。後半になるとその密集度も増し今伊勢社から長浜道へと広がっていることがわかる。

それ以後になると、その広がりが再び厳島神社中心に収縮していくという傾向がみられる。ただし、これは棟札写として残されたもののみからの傾向であるので、棟札写を残さない工事の実情を反映しているわけではない。

5．残された課題

(1) 願主について

こうした建物に再興や葺替などの修理整備工事がなされる契機はなにかがあらたな疑問として生じてくる。これらの棟札写のなかで願主という明確な形式をとっているものはわずかである。

1624年（元和10）薬師堂の建立にみられる北之町薬師講衆中、1645年（正保2）厳島神社の社役鐘を寄進した筑前博多の人、1687年（貞享4）に弥山の通堂を再興した賀茂郡西条村の人、1751年（寛延4）紅葉谷の四宮両大権現社を再興した宮島の人の4例がみられる。そのほかは、広島藩主浅野氏の名が記載されている。18世紀後半のものは写し方も簡略化されているものが多い。これらのものすべてが藩主が願主であるのか、名目的なものかは決めがたく、今後の課題である。

(2) 願意

何をもって願意とするかも検討を要するが、藩主の「武運長久国家安穏子孫繁栄祈所」という書き方が多く出てくる。上記の4例についてみると講衆の寿福であり、二世の安楽、施主の息災延寿子孫繁栄であったりする。いわば個人的な願いといえる。

また「風雨順時五穀成就」の天候や穀物に関連する願意が記されているのは、厳島では住吉大明神社の一例である。こうした願意がどの社堂にみられるのかも今後検討したい問題である。

(3) 工事関係者について

工事の関係者として、職名では大工、小工、屋根葺、鍛冶、檜皮師、瓦大工、扶持人大工、棟梁、棟梁並、見習などが出てくる。地域を厳島、広島と明記してあるものもあるが職人名だけのものも多い。社堂あるいは工事の内容によってかかわる職人の地域的なちがいはみられるのか。職人たち

の系譜は。その技術的な問題は。など様々に考えられる。

また、役人についても宮島の役人だけが名を連ねている場合と藩の年寄クラス以下郡奉行、作事奉行などがかかわっている場合についての検討も必要であろう。

さらに、社本願大願寺、柵守、座主の関り方も考えてみなくてはいけない。

6．まとめにかえて

このようにまだ検討しなければならない問題をおおく残しながらまとめをすることはまだ早いといえる。しかし、あえて言えば、厳島の諸社堂は法律的にその維持管理が保証される以前においても、「少々」ではあるが再興や葺替などの手が加えられ修理整備がなされて多くの社堂が残されてきた。その契機は願意からみると多分に個人的なものもあり、またその時々の政治情勢に左右されていたともいえる。そうした違いにより廃れたものはありながらも結果的にはいくつかの諸社堂が残されてきた。それがまた明治初期の神仏分離政策や古社寺保存法という網を通るうちに取捨選択されて現在みられるような社堂の姿になっていったといえる。

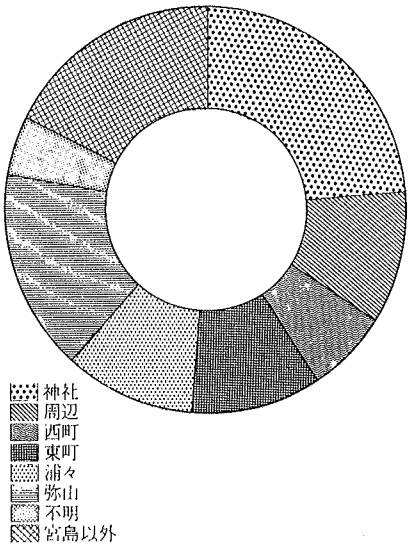
こうした政策や法律が多くのものを今日に伝えてくれたことは否定できないが、逆に消してしまったものもあることに着目したい。

最後に資料の利用についてご承諾をいただいた大願寺の故平山真栄氏、現住職平山真明氏にお礼を申し上げます。また編さん室岡崎環氏からは分析にあたってご協力を得ました。記して謝意を表します。

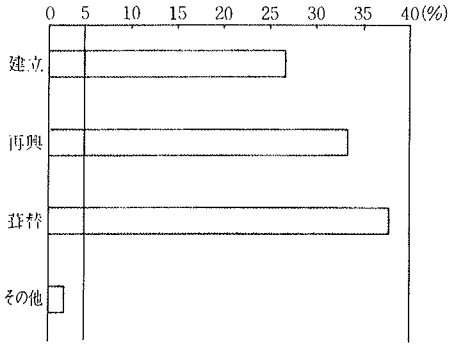
第1表　工事の内容区分

建立	建立　造立　造営　新造　新建　上棟　棟上
再興	再興　再建　再造　造替　修覆　敷替　懸替
葺替	上葺　葺替
その他	寄進　鋳造

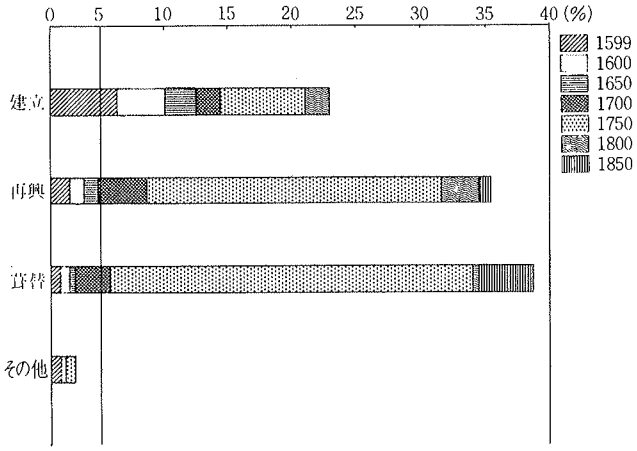
第1図　地域毎に占める建物の割合



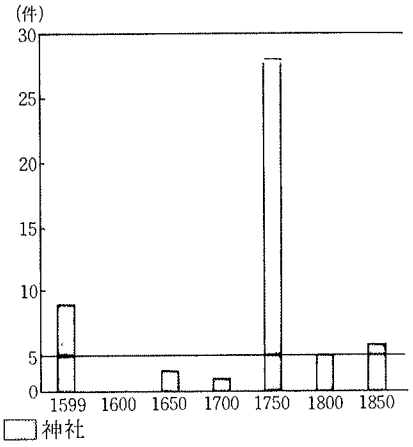
第２図　工事内容の割合



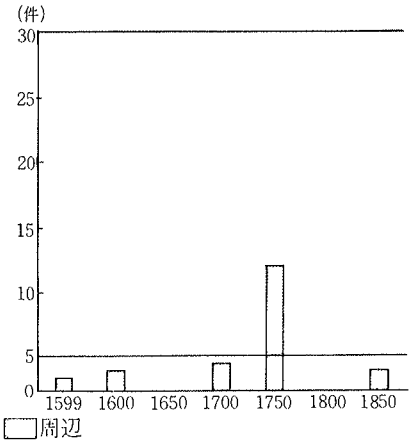
第３図　年代毎の工事内容の占める割合



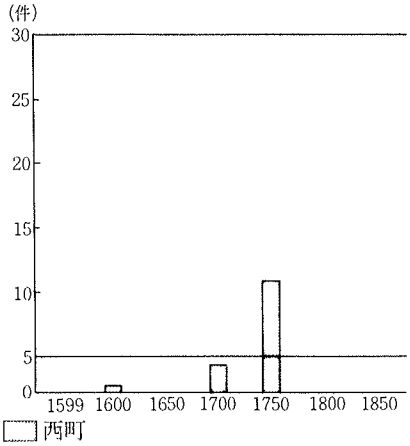
第４図－Ⅰ



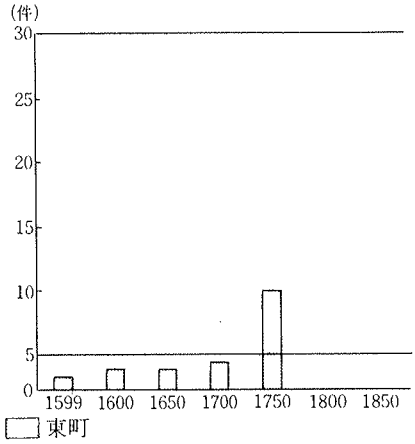
第４図－Ⅱ



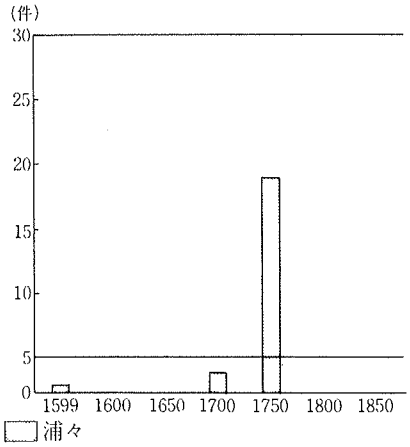
第４図－Ⅲ



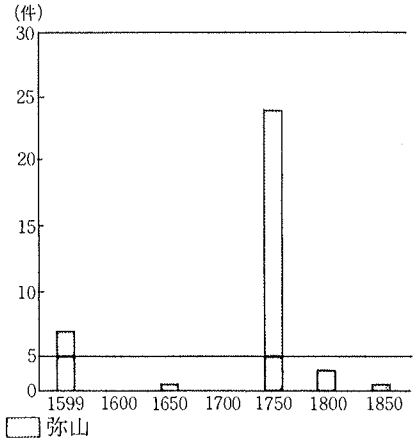
第４図－Ⅳ



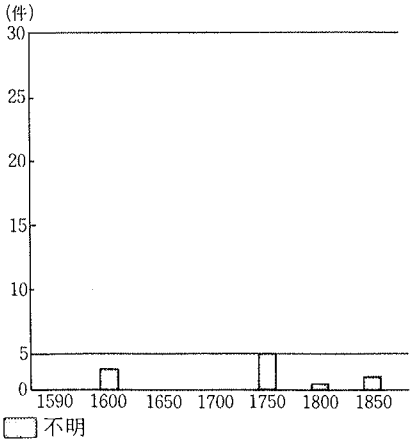
第４図－Ⅴ



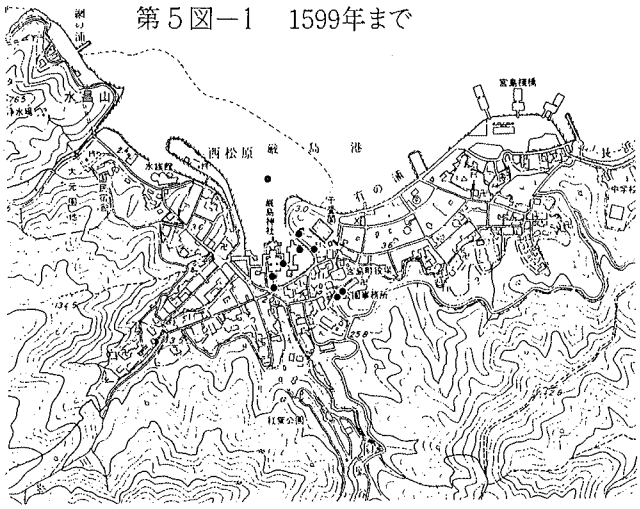
第４図－Ⅵ



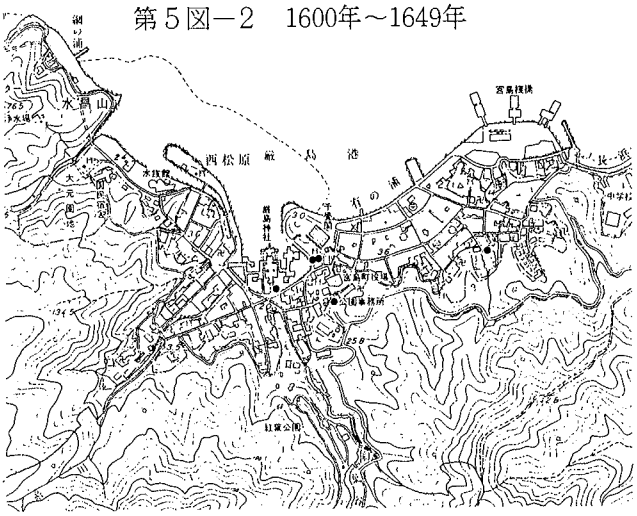
第４図－Ⅶ



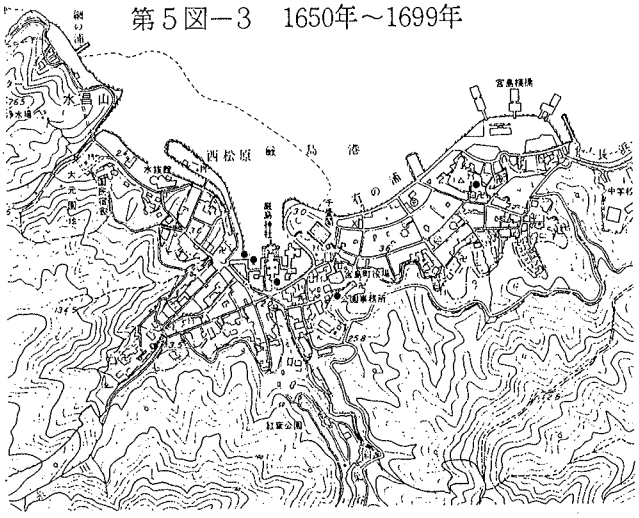
第５図－1　1599年まで



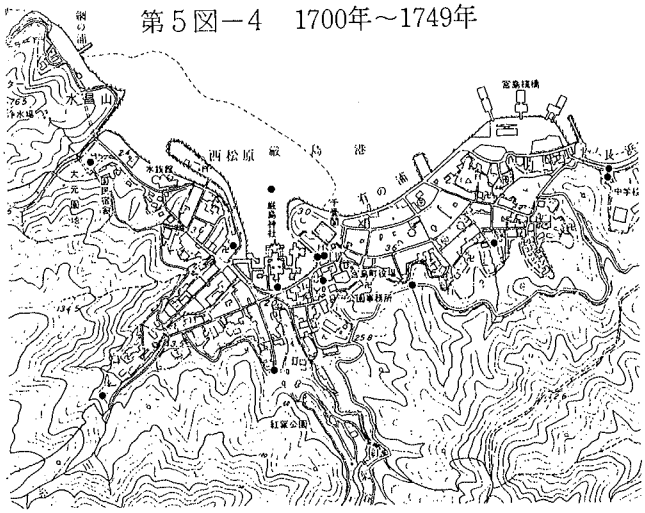
第５図－2　1600年～1649年



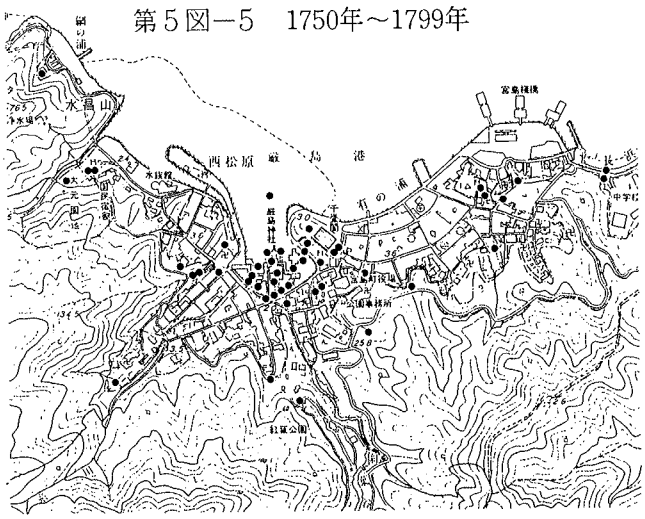
第５図－3　1650年～1699年



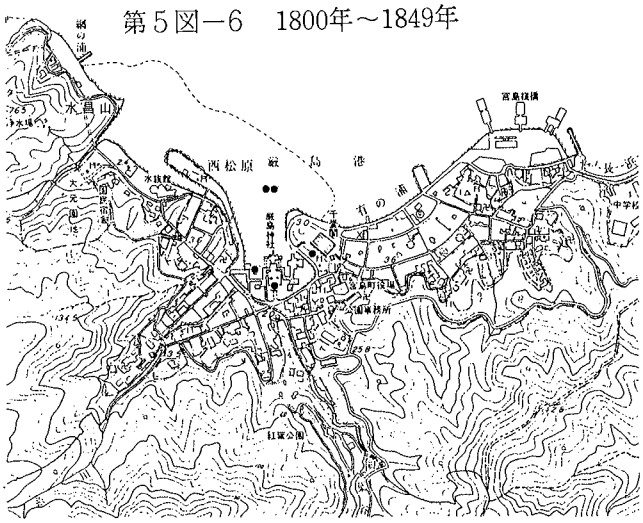
第５図－４　1700年～1749年



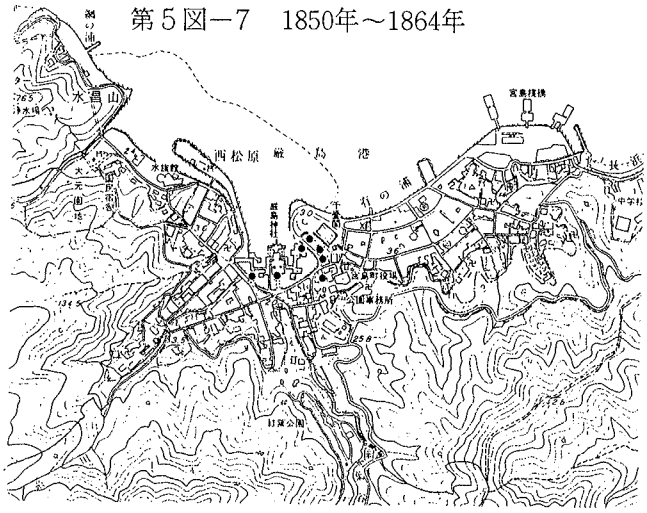
第５図－５　1750年～1799年



第５図－６　1800年～1849年



第５図－７　1850年～1864年



資料館の活動

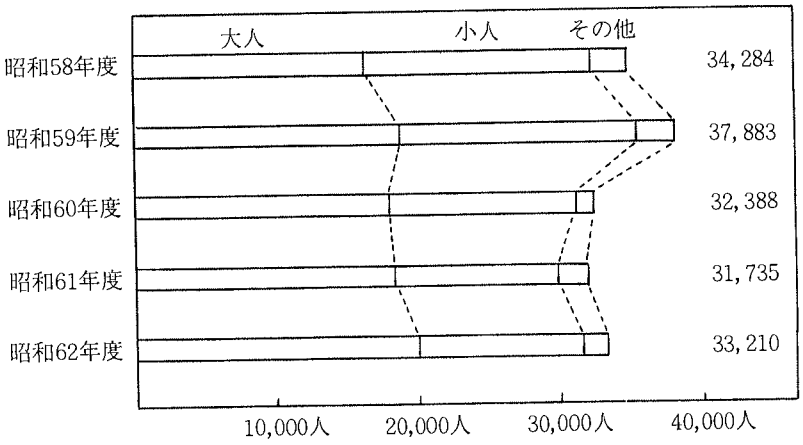
1．入館者数（昭和62年度）

開館以来の累計　410,028

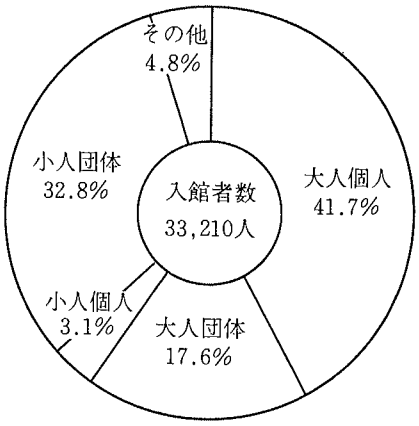
月	大人		計	小人		計	その他	合計
	個人	団体		個人	団体			
4	1,345	76	1,421	148	1,144	1,292	115	2,828
5	1,202	1,539	2,741	108	3,201	3,309	311	6,361
6	570	539	1,109	17	1,544	1,571	158	2,838
7	597	626	1,223	36	182	218	106	1,547
8	1,401	2,010	3,411	187	798	985	127	4,523
9	1,134	256	1,390	33	260	293	62	1,745
10	1,729	301	2,030	54	2,095	2,149	224	4,403
11	2,019	364	2,383	86	1,002	1,088	93	3,564
12	343	0	343	14	230	244	32	619
1	1,020	34	1,054	135	0	135	60	1,249
2	878	117	995	19	371	390	148	1,533
3	1,596	2	1,598	215	40	255	147	2,000
計	13,834	5,864	19,698	1,052	10,877	11,929	1,583	33,210

※小人は小・中学生、その他は無料入館者。休館日は12月26日～31日。

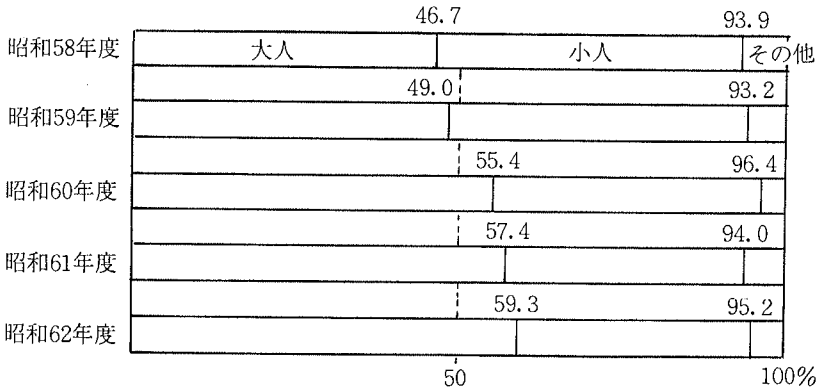
入館者数の推移（昭和58年度から昭和62年度まで）



入館者の構成(昭和62年度)



入館者構成の推移 (昭和58年度から昭和62年度まで)



2．年度別予算一覧

節　　年度	昭和58年度	昭和59年度	昭和60年度	昭和61年度	昭和62年度	備考
	千	千	千	千	千	
報酬	1,509	1,557	1,578	1,548	1,580	資料館協議会委員、館長報酬
賃金	160		137	96	98	
報償費	40	40	35	25	25	展示資料借上謝礼など
旅費	219	255	150	166	140	
需用費	4,025	4,229	4,030	4,329	4,446	消耗品費、光熱水費、印刷製本費など
役務費	105	288	286	150	482	通信運搬費
委託料	3,417	3,311	5,360	4,461	4,130	事務補助、管理保守、庭園手入委託料など
使用料・賃借料	277	277	349	337	349	複写機使用料など
工事請負費	7,701	1,426	25,672	85		補修工事費など
原材料費	63	151	62	40		資料作成、修繕用材料
備品購入費	5,000	17,926	5,466	2,500	2,055	図書・展示資料等購入費
負担金補助・交付金	541	566	572	439	429	学会協会負担金、補助金など
計	22,787	30,026	43,697	14,176	13,734	

3．資料収集

(1)寄贈資料

資料名	寄贈者名	数量
ひな人形	松岡邦充	2点
ふるい	吉村嘉宏	1点
えもん袋	〃	1点
はさみ箱	〃	1点
茶入れ	〃	2点
竹ざる	〃	3点
インバ	〃	1点
簞笥	〃	1点
そろばん	〃	1点
火箸	〃	1点
火消し壺	〃	1点
自在鉤	〃	1点
五徳	〃	1点
砥石	〃	50点
分水管	三宅定和	1点
煙草入れ	博多章	1点
弁当箱	山村靖子	1点
厳島案内記	穴田利光	1点
ろうけつ染	三田嘉一	4点
桶	堀尾武美	1点
とうかご	〃	1点
絵馬	下田実	200点
絵葉書	平本周子	10点
絵葉書	厳島神社	93点
裁縫箱	江上シナ	1点
宮島彫丸盆	下田春江	2点
竿秤	福田忠	2点
天秤棒	〃	1点
分銅	〃	1点
銭箱	〃	1点

(2)寄託資料

資料名	寄託者名	数量
くさらし	吉村嘉宏	1点
狂言袴	〃	1点
大鳥居古材	〃	2点
メダル	〃	1点
裃	東川チヨノ	1点
長袴	〃	1点
風呂敷	〃	1点
衣装入れ	〃	1点
聖観音像	平野勝	1点
地蔵菩薩像	〃	1点
宮島踊写真	芸能保存会	50点

(3)購入資料

資料名	備考
宮島舟遊図	歌川国貞画
宮島之図	岡眠山画
厳島奉納集	
日本三十六勝景	
日本名所図会	

4．調査・研究等

昭和62年5月15日	資料調査（延命寺）
5月20日	資料調査（光明院）
5月23日～24日	日本展示学会（福岡市）
5月28日	資料調査（広島市、市立中央図書館）
6月3日～4日	資料調査（松山市、愛媛県立図書館）
6月25日	県歴史民俗資料館等連絡協議会（佐伯町）
7月22日	県民謡緊急調査員会議（広島市）
7月23日	資料調査（三原市、喜楽園）
8月11日	資料調査（三次市、県立歴史民俗資料館）
10月24日～25日	部落問題研究者全国集会（京都市）
11月13日	資料調査（広島市、市立中央図書館）
11月19日	資料調査（広島市、県立図書館）

5．展　示　・　普　及　等

昭和62年4月1日	見学案内（宮島句会）
4月10日	資料の貸出（たのも船、県立歴史民俗資料館）
4月16日	資料調査（米子高専永井猛氏、町史編纂調査員）
4月19日	資料提供（大阪大学生）
5月21日	資料提供（大竹市教委）
7月25日	資料の撮影、貸出(宮島ホテル関係資料･絵葉書、広島市文化課、広島市公文書館)
7月30日	資料の撮影（山仕事用具他、上智大学生）
7月31日	資料調査（食事用具、文化女子短大生）
9月10日	資料の撮影（平清盛像・厳島勝景図他、広島市広報課）
9月11日	講演「宮島の歴史」(広島県統計西部ブロック研究会)
10月12日～13日	資料調査（米子高専永井氏）
10月27日～29日	資料調査（町史編纂調査員）
11月26日	資料調査（同　上）
12月1日	資料調査（岡山県立美術館準備室守安収氏）
12月3日～5日	資料調査（米子高専永井氏）
12月8日	講演「宮島歴史民俗資料館の芸能関係資料」(公民館郷土学習講座)

昭和63年１月11日	資料調査（町史編纂調査員）
１月20日	資料提供（広島大学生）
２月16日	資料の貸出（ろくろ製作用具、広島市郷土資料館）
３月４日	取材協力（アップルハウス社）
３月８日	資料の撮影（誓真像・厳島図会他、広島テレビ）
３月24日	資料の撮影（平清盛像・厳島合戦絵巻他、広島ホームテレビ）

＊４月～７月まで、宮島句会に「宮島の文学」に関する資料を提供（吉村嘉宏氏の御協力による）

６．歴史民俗資料館協議会

昭和62年度資料館協議会委員

委員名（順序不同）　◎は委員長、○は副委員長

後藤陽一	広島修道大学教授	片山勉	宮島町議会議長
定宗一宏	広島文化女子短大教授	松岡邦充	宮島町議会副議長
上野則夫	広島県教育委員会文化課長	宮郷安輝	
野坂元良	厳島神社宮司	○藤岡国男	
◎岩村益文		平野勝	
小西延穂		吉村嘉宏	
木上晴登			

昭和62年度資料館協議会

昭和62年10月14日

協議内容

１．昭和61年度の資料館運営

２．昭和62年度の資料館運営

３．資料館の「経営」について

４．常設展示について

７．購入図書・受贈交換図書

購　入　図　書

編著者名	書　名	出　版
北垣聡一郎	石垣普請	法政大学出版局
播磨定男	中国地方の板碑	山陽新聞社

遠藤諦之助	古文書修補六十年	汲古書院
	歌舞伎評判記集成　第１巻～第10巻、別巻	岩波書店
	近代部落史資料集成　第３巻	三一書房
真下三郎	広島県の盆踊	渓水社
	編年差別史資料集成　第８巻～第10巻	三一書房
	町並み保存のネットワーク	第一法規
	全国博物館総覧	ぎょうせい
	広島県の食事	農山漁村文化協会
	国史大辞典　第８巻	吉川弘文館
	国立歴史民俗博物館研究報告　第１集～第15集	第一法規
	近代庶民生活誌　第６巻～第７巻	三一書房
	中国地方地学事典	中国新聞社
野村慶一	宮島の四季	ぎょうせい
	文化経済学事始め	学陽書房
梅棹忠夫	メディアとしての博物館	平凡社
〃	博物館長の十年	〃
	加計町史　上巻、下巻、資料編上巻、下巻	加計町
	新修大津市史　第10巻	大津市
	瀬戸内海地域史研究　第１輯	文献出版
	歌舞伎評判記集成　第２期　第１巻～第２巻	岩波書店
	民間信仰調査整理ハンドブック　上、下	雄山閣
	海と民具	〃
	千代田町史　古代中世資料編	千代田町
大阪市立博物館	社寺参詣曼荼羅	平凡社
下垣内和人	芸備俳諧資料　2	渓水社

逐次刊行物

歴史学研究	563～574	
	日本歴史	467～478
	地方史研究	193～196
	広島県文化財ニュース	112～115
	博物館研究	第22巻４号～第23巻３号
	月刊文化財	283～294
	文化財の虫菌害	第13号

受贈図書

〔読谷村立歴史民俗資料館〕
資料館だより　No. 19
〔大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館〕
USA SITE MUSEUM NEWS No. 14～No. 15
歴史民俗資料館年報　1985年度
歴史民俗資料館年報　1986年度
大分県の諸職
〔佐賀県立九州陶磁文化館〕
セラミック九州　No. 15～16
九州陶磁文化館年報　No. 6
〔長崎市立博物館〕
長崎市立博物館々報　No. 27
〔長崎県立美術博物館〕
長崎県立美術博物館年報　昭和61年度
〔飯塚市歴史資料館〕
北部九州装飾古墳と埴輪
〔福岡市歴史資料館〕
福岡市歴史資料館年報　No. 15
〔福岡市教育委員会〕
59年度収集収蔵品目録
櫛田神社収蔵品目録
〔北九州市立歴史博物館〕
博物館だより　9
北九州市立歴史博物館年報　10
北九州市立歴史博物館年報　11
日本の貨幣
北九州の指定文化財展
広寿山の文化財展
〔北九州市立考古博物館〕
北九州の横穴墓展
〔松山市立子規記念博物館〕
子規博だより　Vol. 6-4～Vol. 7-3
松山市立子規記念博物館年報　5
拓川と羯南
〔土佐山田町〕
59年度山田町商工会振興ビジョン
土佐打刃物読本
〔香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館〕
資料館だより　第24号
〔徳島県博物館〕
徳島県博物館報　No. 57～No. 58
徳島県博物館紀要　第15集
徳島県博物館紀要　第18集
歴史資料目録　第18集
手塚家資料目録　第17号
要覧　昭和62年度
〔山口県立山口博物館〕
館報　10号
山口博物館研究報告　第13号
〔広島県企画振興部〕
土地分類基本調査　福山・魚島
〔広島県埋蔵文化財センター〕
ひろしまの遺跡　第28号
〔広島県立図書館〕
広島県内公共図書館郷土資料目録　第32号～第33号
広島県行政資料目録　昭和61年版
〔広島市郷土資料館〕
ひろしま郷土資料館だより　第6号～第9号
太田川の舟運
広島市における麻苧の製造と民俗
〔広島市教育委員会〕
草津八幡神社大般若波羅密多経調査報告
寺社什物調査報告

三ッ城跡発掘調査報告
広島市の文化財
〔広島市公文書館〕
広島市公文書館紀要　第10号
五日市町外役場文書目録
〔広島平和記念資料館〕
30年のあゆみ
〔広島県民文化センター〕
けんみん文化　1987年4月号～1988年3月号
〔広島民俗学会〕
広島民俗　第26号～第27号
〔瀬戸内海汽船〕
RIPPLES　No. 4
〔地方文化研究所〕
月刊ちぶんけん　No. 29
〔大聖院〕
霊峰　第274号～第286号
〔府中町歴史民俗資料館〕
府中町歴史民俗資料館報　創刊号
府中町歴史民俗資料館報　昭和61年度
収蔵資料目録　第1集
〔広島県立歴史民俗資料館〕
年報　昭和59年度
年報　昭和60年度
甦れ広島県の遺跡
〔尾道市立美術館〕
女性の美
安井賞展
棟方志功展
〔尾道市教育委員会〕
天満原遺跡　1985
尾道遺跡　1984
尾道遺跡　1985
〔向島町教育委員会〕
向島の人生儀礼
〔広島県草戸千軒町遺跡調査研究所〕
広島県歴史資料所在調査報告書
草戸千軒町遺跡　1985
草戸千軒　No. 154～No. 165
福山城西之丸跡発掘調査概報
〔福山市立福山城博物館〕
工芸の美　武器・武具展
〔新市町歴史民俗資料館〕
よみがえる中世の町　草戸千軒
はこぶ・あるく
〔農村文化資料館〕
いとぐるま　第3号
〔神辺町立歴史民俗資料館〕
資料目録　VI
〔宮島町教育委員会〕
佐伯郡・大竹市の文化財
〔岡山県立博物館〕
博物館だより　No. 28～No. 29
研究報告　8
〔神戸市立博物館〕
博物館だより　No. 19～No. 22
神戸市立博物館年報　No. 4
神戸市立博物館研究紀要　No. 4
〔奈良県立民俗博物館〕
民俗博物館だより　Vol. XIII No. 3～Vol. XIV No. 1
〔国立民族学博物館〕
国立民族学博物館国内資料調査委員調査報告集　8
調査報告集資料一覧
〔大阪市立博物館〕
大阪市立博物館報　No. 26
〔京都市考古資料館〕
京都市域の群集墳

京都市考古資料館年報　昭和60・61年度

〔京都府立山城郷土資料館〕

山城郷土資料館だより　第6号～第7号

山城郷土資料館報　第5号

山村のくらし　I

八幡正法寺の絵画と書跡

発掘成果速報　昭和61年度

〔京都市歴史資料館〕

京都市歴史資料館紀要　第4号

〔京都国立博物館〕

京都国立博物館年報　昭和60年度

〔京都府立丹後郷土資料館〕

丹後郷土資料館だより　第15号

丹後郷土資料館報　第8号

伊根浦の歴史と民俗

近代丹後の黎明

〔石川県立歴史博物館〕

石川れきはく　第3号～第6号

冷泉家の歴史と文化

北国を駆けた戦国の武将たち

〔福井県立若狭歴史民俗資料館〕

年報　1987

鳥浜貝塚　1987

岩の鼻遺跡

御意見有用　1985

〔福井県立博物館〕

ふくいミュージアム　No. 11～No. 12

福井県立博物館紀要　第2号

〔松本市立博物館〕

あなたと博物館　No. 27～No. 30

〔平家谷伝承研究会〕

平家谷通信　第11号～第13号

〔名古屋立博物館〕

名古屋市博物館だより　55号～61号

〔沼津市歴史民俗資料館〕

資料館だより　72～77

沼津市博物館紀要　11

沼津市歴史民俗資料館資料集　5

絵図と街並みの移り変わり

〔平塚市博物館〕

平塚市博物館年報　No. 10

平塚市博物館年報　No. 11

平塚市博物館研究報告　No. 10

大山の信仰と歴史

〔神奈川大学日本常民文化研究所〕

民具マンスリー　第20巻1号～第20巻12号

要覧　1987

歴史と民俗　2

仕事着―西日本編

〔日本のあかり博物館〕

博物館ノート　No. 16

〔紙の博物館〕

百万塔　No. 67

〔家具の博物館〕

博物館だより　No. 12～No. 13

〔大田区立郷土博物館〕

博物館ノート　No. 34～No. 39

郷土博物館だより　第17号

注口土器

信仰と絵画

〔サントリー美術館〕

サントリー美術館ニュース　第90号～第96号

〔ペンタックスギャラリー〕

Pentax Gallery News　No. 69～No. 71

〔郵政省逓信博物館〕

資料図録　No. 36

資料図録　No. 37

静岡県駅逓御用留　その1

〔お茶の水女子大学学芸員課程〕

博物館実習報告　No. 3

〔丹青総合研究所〕

ミュージアム・データ　No. 2～No. 4

〔弘済出版社〕

旅の手帖　1987・6

〔埼玉県立博物館〕

博物館だより　58号～60号

さいたまのはくぶつかん　第7号

展示総合案内

紀要　13

秩父　繭そして信仰

山西省文物展

遊びとおもちゃ

〔埼玉県立歴史資料館〕

館報　第8号

研究紀要　第9号

埼玉の古代窯業調査報告書

〔千葉県立総南博物館〕

総南博物館　第34号～第36号

〔群馬県立歴史博物館〕

博物館だより　No. 26～No. 29

上州の正月

〔福島県歴史資料館〕

研究紀要　第9号

歴史資料館収蔵資料目録　第16集

〔会津民俗館〕

会津民俗館だより　第15号～第16号

〔秋田県立博物館〕

博物館ニュース　No. 63～No. 68

昭和61年度館報

秋田県立博物館研究報告　第12号

〔宮城県立東北歴史資料館〕

東北歴史資料館年報　61年度

東北歴史資料館研究紀要　第12巻

染と型紙

〔鹽竈神社博物館〕

日本刀の美と世界の刀

〔岩手県立農業博物館〕

農業博物館だより　No. 42～No. 43

〔根室市教育委員会〕

根室市の自然と文化財

町史のあゆみ

1．日誌から

昭和63年１月５日　広島女子大　谷富夫氏来島（民俗編調査、～11日）。

12日　郷土学習講座『道芝記の世界』第61回（佃）

18日　野上彰子氏来島（民俗編調査、～23日）。

22日　資料調査。

加計町史編さん室に行き、同室で整理中の香草・井上家所蔵資料「厳島八景」を撮影・収集する。

25日　竹中順子氏来島（民俗編調査、～30日）。

26日　広島県警察学校生徒の来島研修（岡崎）。

28日　国立歴史民俗博物館調査員会議（～30日、岡崎）。

２月１日　郷土学習講座『道芝記の世界』第62回（佃）。

４日　広島県博物館準備室　松崎哲氏来室（企画展調査）。

広島市郷土資料館　横田禎昭氏来室。

８日　千代田町史編さん室　六郷寛氏来室（芸備日々新聞掲載記事調査）。

10日　室浜砲台跡の現地調査（図面照合・写真撮影等）。

16日　鷹ノ巣砲台跡の現地調査（図面照合・写真撮影等）。

23日　宮島の国有林施業案につき広島営林署を訪ねる。

24日　防衛研究所　原剛氏来島（砲台跡地の現地調査）。

３月２日　資料調査。

宮島町吉田家にて所蔵史料目録を作成し、撮影・収集する。

７日　郷土学習講座『道芝記の世界』第63回（佃）。

10日　鷹ノ巣砲台跡の現地調査。

11日　県博物館準備室　松崎氏来室（企画展資料収集）。

18日　町史編さん小委員会を、広島県立社会教育センターで開催する。

23日　山下欣二氏、『自然と人間』編「水生生物」の原稿提出。

24日　山口県和木町　松並氏来室（厳島合戦の戦跡調査）。

29日　編さん委員　頼祺一氏来室。

４月４日　郷土学習講座『道芝記の世界』第64回（佃）。

６日　広島工業大学　佐藤重夫氏来室（民家調査）。

７日　県博物館準備室　福井万千氏・松崎氏来室（御島廻り調査）。

14日　編さん委員長　後藤陽一氏来室。

御島廻り写真撮影。

27日　総務課長ほか来室（町制100周年記念事業について打合せ）。

5月9日　郷土学習講座『道芝記の世界』第65回（佃）。

19日　広島県立農業短期大学　水田国康氏来島（自然と人間編調査）。

23日　職員同和研修。

26日　広島　橋本氏来室（砲台遺跡調査）。

28日　広島女学院大学　原田佳子氏来室（厳島神社舞楽の調査）。

6月1日　広島　橋本氏来室（砲台遺跡調査）。

廿日市市老人クラブ来島研修指導（岡崎）。

3日　編さん委員　土井作治氏来室。

6日　郷土学習講座『道芝記の世界』第66回（佃）。

15日　大野町　中丸氏来室（『厳島図会』に関する調査）。

29日　是光吉基氏来島（石造物編調査）。

立正大学　坂詰氏とともに大願寺経筒・町内石造物等を調査する。

30日　広島県歴史民俗資料館等連絡協議会（西城町、～7月1日、岡崎）。

7月1日　日本文理大　高原氏来室。

4日　郷土学習講座『道芝記の世界』第67回（佃）。

6日　Gakken 上野氏来室（厳島合戦について取材）。

8日　編さん委員長　後藤氏来室。

11日　広島城管理事務所　久保氏・村上氏来室（築城400年展の資料調査）。

竹中氏来島（民俗編調査、～15日）。

16日　大野町　中丸氏来室（井戸について調査）。

19日　資料調査（～21日）。

竹原市吉井家所蔵資料調査をし、宮島に関する奉納和歌・俳句などを撮影・収集する。編さん委員　頼氏と同行する。

25日　広島市公文書館　半田氏・井野氏来室。

30日　県博物館準備室　松崎氏来室。

広島ライオンズで講演（岡崎）。

31日　故木上晴登氏葬儀。

故木上氏は、民俗編「人の一生」「町内の年中行事」を担当され、精力的に調査を進めておられた。また、開館当初より歴史民俗資料館協議会の委員として、常に資料館の有るべき姿について真摯に考察され、また積極的に協力を戴いた方である。厚く御冥福をお祈りする次第である。

8月1日　広島修道大学博物館学実習生来島指導（岡崎）。

郷土学習講座『道芝記の世界』第68回（佃）。

4日　総務課長来室（明治期来島の軍艦名について調査）。
5日　光明院で調査（「厳島八景」について）。
8日　財務課長来室（埋め立て関係資料について調査）。
13日　編さん委員長　後藤氏来室。
17日　水田氏来島（自然と人間編調査）。
23日　資料調査（～25日）。
　大竹市和田家所蔵資料を調査し、撮影・収集する。編さん委員　頼氏と同行。
24日　編さん委員長　後藤氏来室。
25日　宮島小学校　荒木氏来室（誓真について調査）。
26日　編さん委員　土井氏来室（近世地誌・紀行編の打合せ）。
29日　別府大学　伊藤氏来室。
31日　広島文化女子短大　前田氏来室（明治期宮島の宿の料理の調査）。
9月3日　中四国民具学会（徳島県麻植郡鴨島町、～4日）。
5日　郷土学習講座『道芝記の世界』第69回（佃）。
10日　広島修道大学総合コース「宮島の歴史と文化」講演（佃）。
17日　広島修道大学総合コース、宮島現地研修会指導（佃）。
28日　JR三次駅主催の島廻りで説明・指導する（佃）。
10月3日　郷土学習講座『道芝記の世界』第70回（佃）。
8日　日本民具学会（館山市、～10日、編さん委員　藤井昭氏と参加）。
11日　広島市公文書館　井野氏来室（『図説広島市史』掲載写真の調査）。
14日　編さん委員　土井氏来室。
30日　中国四川省　新聞出版代表団一行来島案内（佃）。
11月2日　編さん委員長　後藤氏来室。
7日　JR三次駅主催の島廻りで説明・指導する（佃）。
　郷土学習講座『道芝記の世界』第71回（佃）。
11日　町史編さん小委員会を開催する。
12日　編さん委員　藤原健蔵氏来室。
13日　広島市三篠公民館中国帰国子女、来島案内（佃）。
　可部郷土史研究会、来島案内（岡崎）。
14日　広島大学　朝倉尚氏ほか学生来室（文芸関係の資料調査）。
16日　編さん委員長　後藤氏来室。
19日　中四国民具学会10周年シンポジュウム（広島、～20日）。
22日　広島大学　朝倉氏来室。
29日　広島工業大学　佐藤氏来室。
　県立歴史民俗資料館　井上久美子氏来室。

30日　編さん委員長　後藤氏来室。

12月５日　郷土学習講座『道芝記の世界』第72回（佃）。

福山市　白井氏来室（砲台関係資料について照合・点検）。

８日　編さん委員長　後藤氏来室。

10日　広島市立中央図書館を訪ねる（地誌・紀行編の掲載図版の調査）。

12日　県博準備室より、厳島信仰について　問合わせ。

15日　府中町立歴史民俗資料館　田上敏文氏来室。

17日　町史編さん小委員会を開催する。

21日　是光氏来室（石造物編執筆打合せ）。

23日　マツダ研修生来室。

２．委員会から

①昭和63年３月18日　町史編さん小委員会を広島県立社会教育センターで開催する。

出席者：後藤陽一氏・藤原健蔵氏・土井作治氏・藤井昭氏・頼祺一氏

『地誌紀行編』・『民俗編』・『建築編』・『石造物編』の進行状況を報告し、早期に刊行するべく、出版への具体的な計画について協議した。各委員から、町・編さん室に対し、編さん事業に取り組む姿勢について、示唆に富む意見をいただいた。

②昭和63年11月11日　町史編さん小委員会を広島八丁堀シャンテで開催する。

出席者：後藤陽一氏・藤原健蔵氏・土井作治氏・藤井昭氏・頼祺一氏

出版方法・執筆要領について検討・協議をする。また編さん経費等に出来るだけ有効に支出するようにという希望があった。

『地誌紀行編』・『石造物編』の現状を報告した。

③昭和63年12月17日　町史編さん小委員会を広島県民文化センターで開催する。

出席者：後藤陽一氏・藤原健蔵氏・土井作治氏・藤井昭氏・是光吉基氏

執筆要領を検討・作成する。

出版方法案について、協議し再検討することとする。

『地誌紀行編』・『石造物編』について、編・章・節の構成及び監修等につき協議する。

３．その他

町広報紙に『町史の窓』を連載する。

「瀬戸内の船旅」では、幕末の志士清河八郎の『西遊草』からとくに伊勢・瑜伽山・金刀比羅・宮島を紹介した。

昭和63年１月　第45回　松浦武四郎と宮島　　第349号

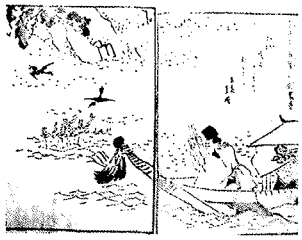
2月	第46回	瀬戸内の船旅(1)	第350号
3月	第47回	瀬戸内の船旅(2)	第351号
4月	第48回	瀬戸内の船旅(3)	第352号
5月	第49回	瀬戸内の船旅(4)	第353号
6月	第50回	筑紫紀行(1)―商人の旅―	第354号
7月	第51回	筑紫紀行(2)―商人の旅―	第355号
8月	第52回	筑紫紀行(3)―商人の旅―	第356号
9月	第53回	筑紫紀行(4)―商人の旅―	第357号
10月	第54回	筑紫紀行(5)―商人の旅―	第358号
11月	第55回	筑紫紀行(6)―商人の旅―	第359号
12月	第56回	筑紫紀行(7)―商人の旅―	第360号

の方より。一双の神鴉。翅をならべて舞下り。御師の船にうつり。彼浪に浮へたる供御をまづ雄鴉あげ給ふ 是を御鳥喰といふ 是今日第一の吉事として。諸人一同に舷をたゝき。はやしたてよろこぶ事限なし。雌飛来りて前のことくあけ玉へバ。ます〳〵声を上。勇ミどよむに。神鳥ハすこしも惧れ玉ハず。雌雄三度是をあげ給ふをかぎりとす。時により。一日に御嶋廻り。一組にかきらず。幾組にても。不浄あらねバ斯のごとし。其不思議いふばかりなしとぞ。林「御客さま御ろうじませ。寔に神変不思議で。ございませう　太九「いかさま。目前ふしぎを見やした。感心〳〵　鉄「これらハ。きつと咄しの種だ　林「あれを御鳥喰と申ます　太九「ハゝア御鳥喰を御得意にする嶋廻りとハ此ことだね　林十「左様〳〵　太九「しからバ一首いたそふ

おそれけも浪に浮へて捧ぬる
供御を抓んであげる御鴉
梓弓はなしのたねに為ばやな
そのやぶさきに見つるふしぎを

滑稽道中宮島ミやげ二編下巻大尾

りをたづねて。人数をつばめたいとぞんじたが。過急にどふも。加ろふといふ人かないじや。彼是すれバまた日がのびる。延れバまた。支の出来るものゆへ。まづ止事を得ず。欠た侭でやりかけましたへゝゝゝ　林「イヤ左様なれバ幸私方に。江戸の御客が御二人御逗留でございますが。折角御加入の。御咄しをいたした所が。随分飛入の出来ることなら。幸のことじやと申されまする。どなたも思召ハございませんか　講中ミな「イヤなんとして。支ハ決して御ざらぬ。江戸とハめうじや随分御加へ申ませう。左様申てくだされ　林「かしこまりました　ト此事を両人へつげ座しきへつれきたり。ミな〳〵へ引あハせ兎角する内ぜんもすミて。もはや御船へめしませとのしらせに。おの〳〵切立の黒の紋附に。麻裃を着し。立派に装ひたるに。両人ハ垢じミたる布子着たるゆへ。亭主竊に我内の。紋付の着ものと。裃を着せ。打連て船場へいたるに



⊗⊗の御紋付たる幕うちたる船。飾たてゝあるに。乗移れバ。御師の船にハ四手切かけ。榊をし立。鹿子共ハ声おかしく打揃へて。「洲崎の松の枝も栄へてと。同音に謡ひつゝ槽出す　都て船三艘なり。御師の船講中の船料理船なり。まことに。いぎうやゝしく。何ごとも打わすれて。心すミわたり。しん〳〵きもにめいじ　渇仰のなミだとゞめがたし。偖御山を右に見なして。巡り行なり。名にしをふ麓の森脇の浦。有の浦も打過。宮の尾。小浦池の浦。日の長濱も打越て。屏風が浦。なきりが浦。清水が浦。米が浦などあとになし。蓬莱聖崎もいつしか過。姥が懐。江の浦こへて。杉の浦に着。おの〳〵爰に上りて。修禊し。社頭に額づき拝するに。御師ハ装束の袂をはへ。神前におゐて楽を奏し。此濱に茅の輪を立。是をくゞりて祓をなし。頓て此所にて朝餉を調ふ定例なり。膳部殊に質朴にして尊し

我〳〵ハはじめて三輪の夫ならで
　かミのしるしの杉の浦かも

それより桜川多し　さくら中崎。火戸り口を過て。包の浦といへる所にいたる。爰に包の岩迚巨厳あり傳へいふ明神の包の絹。岩と成たりとぞ岩上に社あり。是を船より拝して太九郎兵へ

石となる包の絹を今もなを
　よごれハ浪にあらひ清むる

夫より第二番の拝所。鷹の巣といへる処にいたる。頓て船を着て。杉の浦のごとく。御師講中とも上りて。社前に楽を奏し。茅の輪をくゞる。爰にハ峙たる厳多し太九郎兵へ

今見るハ夢かとはかり思ふなり
　その二番目の鷹の巣へ来て

爰を過て。又腰細といへる所へいたる。是第三の拝所也。前のごとく上りて祓をなし。茅の輪をくゞり。船に乗てかなたを見遣れバ。松ケ枝にかゝりたる。藤の花咲出たるに鉄七

ねぢ藤のねぢかへり見ん山姫の
　すかた艶しき腰細のうら

飯濱。下飯濱大砂璃。穴の口。上薦どまり樫の木。焼山。今山王餘魚崎。山伏もどし慢心の山ぶしありてとがめを蒙り是よりあとへもどせしにや其名ありそれより青海苔といへる所にいた是第四の拝所なり。爰にて昼飯を調ふこと前のごとし。青海苔を粉にして。餅飯にかくる。是地名に寄るか。偖漸爰を船出して。養父崎といへる所に到る。第五の拝所也。此所ハ濱もなく洲もなく。風に打よする浪ハ。厳にくだけて自ら鼓の音をあらハし。松吹風ハ琴に通て面白し。厳に立る松の木の間にハ。朱の玉垣拝れ給ふ。おの〳〵船より上りて。是を遥拝なす。扨爰にて。御師の船を沖中に槽出し。粢を浪に浮へて。楽を奏す。此時嶺

「アツア引もふ明たそふだ。鉄七〳〵どふだおきねへか〳〵　鉄「ムゝゝゝゝアゝ折角おらが得手吉めと面白くたのしむ夢を。おめへ破いてしまつたア。おしひことを　太九「ハゝゝゝ夢に見たと。画に書た餅ハいくら味そふでもはじまらねへ。時にけふハ御立とせふか　鉄「そふよモウ見物の場もあるめへ。是から岩國の錦帯橋とやらを往て見よふじやアねへか　太九「夫がよかろふ。それから陸で廣嶋へいつて。ちつとまた見物無上借金の淵とせふか　鉄「岩國へいつたら。まつがね油を買て。江戸へ帰ツたら。一番女どもをなびかせて遣ろふ　太九「モウだぼの事をいわアハゝゝゝトやがておきいでぜんもすミたる所へ亭主出きたりて　「コレハ御客さま。御退屈にございませう。　太九「大きにおせハに成やした。モウけふハ御暇としやせふ　林「マアまちつと御逗留なされませ。イヤ時に御聞及びもございませう。当所に御島廻りと申て。七浦を御船て廻ります。皆嶋廻り講と申て。連中を催しまして廻りますが。それハ〳〵ありがたひものでございます。もと是ハ明神さまが。此島へはじめて宮所を営ミ玉ハん迚。御めぐりなさつた。例を慕ひ奉ツてはじまつた事じやげにございます　太九「いかさま。其様なことも聞およんで居やすが。アレハ中〳〵はした銭で。いける事でもねへそふだ　林「さやう〳〵。是も一人たつて被成と。余程金の入ことで。ございますが。飛入をなされバ。格別の御出宝にも成ませぬトはなしてゐる所へ。かつて呼たつるに。ヲゝと言て勝手へ行。暫くありて又出来たり　林「イヤ噂をすれバ何とやら。急に只今。御城下から私方を宿で。島廻りが出来ますと申て参りました。当島でハ此宿をいたすを。吉事と致して。譬へ少々ハ足が入ましても。皆いたしたがる事でございます　太九「ハテナ夫ハめでたい。そしていつのことだね　林「已に明日でございます。人数次第で飛入も出来ますが。なんなら御廻りなさいませんか。江戸あたりからも。ごろうじませ。態〳〵廻りなさることハ。ふだんでございます皆回廊に。額が沢山あがつております。マア第一身の御祈禱に成ます　太九「そふかね。夫じやア。一ツ廻ツて見てへものだノウ鉄公　鉄「ほんに是も咄しの種だ。しかしいくらばかり入やすね　林「御二人で壱両御張込なさいませ。其代りきつと十両が直打ハございます。中〳〵御船へめして御ろうじませ。あつた物じやア御ございません。其心持と申ものハ。御大名でございます。ハテその筈の事がございます。どの様な位高ひ御かた抔でも。我々風情でも。おなじ船で社家がたの出かたも。替た事ハございません。そこらが妙でございます　太九「どふだ鉄七。でへぶものゝ入事だがどふする　鉄「まだ。格別路用を遣たでもなし。一ツ咄しのたねに。飛入をしなせへな　太九「そんならよろしくたのミやす　林十「イヤかしこまりました。コリヤほんにあなた方も幸でございます。さやうなら其つもりに致しませう　ト亭主殊の外よろこびにハかに神酒を上潮をまつり。家内を掃除して取片付。俄に料理人を呼よせ。献立の相談するやら。林十ハ立たり居たり。てん〳〵舞て。其日ハ皆々。暮るを待て寝。偖明る日ハ。いまだ夜の明ざる内。火を燈して起たる所へ。廣嶋の講連中。船上りして入きたるに林十ハ袴にて出迎ひ　「コレハどなたさまも。御早ふトそれ〳〵にあいさつなし。かねて人やとひをなし置たるゆへ茶をくミ。火鉢たばこ盆をはこばせ。そのさうどういはんかたなし。さてやうやく。茶もたばこもゆきわたりたる時に。人々に向ひて　林十「時に此たびハ。御連中さまがたの内。御二人御差支の御様子に承まハりました　講中「さやうで。ヱゝちつと據なひ事で。味噌屋の幸次と。酒屋の呑太郎両人が止たで。どふぞ代

ねへことを。蒔出さア此親父どのハ。コレヱおいらア江戸ッ子だぞ。アゝつがもねへ

親父「ハゝゝゝ江戸でも長崎でも。いがんだもなア。いがんだのじや。どふぞもどひてくだつしやい。たのミじや。ハテねきで。見たちうものがあるに　鉄「傍で見よふが。遠くから詠ふが。おいらアしらねへ〳〵　太九「此男ハわつちが連で。どろぼうするよふな奴じやアねへ。しらきちやうめんな。御旅人さまだア悪く見そくなつて。御堪忍じやア済ねへぜ

ト太九郎兵ヘハなにもしらず。むやミに力ミけへつてゐる。実ハ此おやぢ。もちをおごるやくそくを。とやかくといゝたるを。つらにくゝ思ひ。かたへに置たる巾着を。そつとちやくぶくせしを。かのもちやのかゝ。これを見つけて。しらせしなるが。鉄七うつかりとこれを。こしにさげてかへりしが。此おやじ来たらんとハ。おもひがけなく。こしにさげたるまゝにわすれ居たるが。此時フツトおもひ出し。そつとうしろにてはづし。たもとへ入んとするを。親父目ばやく見つけて。それがわしのでごいすと。とりにかゝるを。手ばやくふところへかくし。エゝこりやアおらがのだとあらそふを。太九郎兵ヘハ。いさゐのわけをしらず鉄七にむ「コウ鉄七マア。それを出して見せるがかひいゝ　親父「そふじやわいの。マア見せさつしやい　鉄「ハテ是じやアねへといふに　太九「うたげへをはれるためだ。出して見せろ。もしまた夫でなけりやア。おらが承知しねへ。鉄七潔白に出すがいゝ。おらが了簡がある

鉄「それだとつて　トうぢ〳〵して。太九郎兵ヘにいふなといふしかたをして見せる　親父「ハゝゝゝゝそふおまへ。隠してじやと猶臭イ。ちやつと見せさつしやい　トだん〳〵せめられ。せんかたなくふところよりしほ〳〵と。かのきんちやくをいだし　鉄「成程実ハおれがものじやアねへが。拾ツたからハ。おらがものだろふ　親父「ハテ其ぬしが傍におるに拾ふて済かいの。油断のならん人じや。どふやら目つきが悪ひと思ふたて　鉄「なんだとぬかしやアがる。此摺子木親父めうぬがおとしやアがつたから。拾ツたのたバ。夫になんだ。目つきが気にくハねへたア。能出来た。乍憚本阿弥へかけて極めをとつた。水晶輪の鉄七さまといつちやア。チツト重てへ江戸ッ子だハ。譬千両千貫。大道へぶちまけてあろふが。目も遣ねへといふ野郎だア。此薬鑵親父め。悪く晒落やアがるがせへご。たゝきつぶして。飴屋の荷擔へ往生させるぞ。いゝかと思つて　親父「ハゝゝゝ盗人猛々しひと。高が人のもの。ちよろまかしたのじや。それがいにがん〳〵いふても。ねつから勝んことじやハゝゝゝゝヤレ〳〵嬉しや。マア又来ませふハゝゝゝ。油だんのならぬ。なんまミだぶ〳〵　トきんちやくをもつてそふ〳〵

太九「ハゝゝゝ安敵をやるやつさ。智恵のねへ。そしてまだ。手めへが新めへの盗人だから。物したものを。自慢らしく。腰へぶらつかせて居るから。見つかつたハワハゝゝゝ

鉄「面目ねへあんまりアノ親父めが吝坊だから。敵を取てやろふと思ツて　太九「三枚目の番頭役をやらかしたアハゝゝゝ　林「ハゝゝゝヱゝアノ親父のもんなら。とふぞ返さぬ趣向が。ありそふなもんじやに。残念なことであつたアハゝゝゝ　太九「ほんにいめへましひ。イヤ夫で思ひだした。けふ彌山で。破れるやうな音のしたも。今の罰やらしれねへぜ

林「さやう〳〵。コリヤてつきりそふでございませふ。弥山にかぎらず。都て爰でハ直に。御三鬼さまが。罰を御あてなさいます　太九「ホンニふしぎ〳〵

欲に目のくらまにあらぬ彌山にて
あくの報ひハ奇妙きんちやく

鉄「一番へこましやアがつたいめへましひ
いゝ頬の皮の巾着せしめたる
敵をとつて遊でしまつた

太九「ワハゝゝゝおもくろし〳〵　林「ほんにコリヤアよふ出来ましたアハゝゝゝ　トもとより。しわんぼうをにくミたる。悪じやれにしたる事なれバ。ミな〳〵どつと打わらひて。また〳〵酒ごとをはじめ。大なまよひとなり打ふしたるがミじか夜のゆめをやぶる暁のかねに目をさまし　太九

ト是より奥の院へ参詣なし。順拝すミてだん〳〵下向道をくだるに。いかゞしたりけん。ミな〳〵。目前くらく成て歩行かたく。三人顔を見合ていかなることにやと。色をまきてイミ居たるに。忽ち頭上の山。今も砕ると。思ふ斗の音なしけるに。三人ともアツト叫びて。うつぶしに其所へたふれけるが。暫くありて心付。あたりを見れバ。もとのごとく明くなりたるに。三人ハよミがへりたる心地して。さるにても。いかなる咎めにやと。いふに林十心づき「ハゝアわたしハ。うつかり思ふてをりましたが。革の煙草入。もて来なさつたな　太九「そふさ。是ハもてねへのか　林「革類と刃ものハ。きつい三鬼さまのおきらひじやに。コリア私が悪かつた。爰からおことハりを申ませふ。あなたがたも。御詫なさいませ　ト三人とも三鬼堂のかたをむ九拝なして。晒落も無だも出バこそ。早〳〵山をくだりて。宿へ帰り。太九郎兵へ鉄七ハ裏へ馳行て水を呑。やう〳〵人心地となりて　太九「イヤ怖へことであつた。コウこんなに汗になつたおさる「どふなさいました　鉄「イヤどふなさつた所か。肝が引くりけへツて。魂が鯱立をしたア　おさる「気味のわるい　鉄「おらア躰が。こなミぢんに成たと思ツた　林「マア〳〵御神酒でも上て。御祝ひなさいませ　鉄「ムゝそれがいゝぜ。ノウ太九さん　太九「いかさま。御亭主さん。能様にたのミやす　林「かしこまりました　ト両人座鋪へかへり。寝はらばつて居ると。表からうそ〳〵と内をのぞき。御めんなさい　ト入来たるハ。彼弥山にて。争ひたる親父なり。林十不肖〴〵に出て　林「ヘイなんぞ御用でもありますか　親父「アイちつとべくし用で来イした。御客ハ内にごいすか。ちいと御目にかゝりたい。ヘゝゝゝゝどふぞふ言てくだつしやいヘゝゝゝゝ　トいふに林十へんじもせずおく「御客さま。アノけふ御弥山へ行て二人に向ひで。連になつた吝坊が。あなたかたに。御目にかゝりたいちうて来ましたが　太九「ヱゝおいらに何の用だ。おもしろくもねへ。コウ鉄七往て見ろ　鉄「おいらアいや〳〵。おめへいつて見なせへ　太九「なぜいやだ此男ハト出て　ゝ〳〵なんぞ用でもありやすか　親「チツト用があつて来ましたテ。ヱゝ御若イのにへゝゝゝ。ちいと尋ねたいことがごいス。どふぞ呼でくだつしやい　太九「コウ鉄七ちよつと来な　鉄「なんだヘト出て　親父「イヤ外じやアない。革の巾着ウ。もらひに来ました。サア出してくだつしやい　太九「ナニ巾着をくれろ。わつちらア。そんな商売人じやアねへ。風流一遍の。諸國無駄修行サ　親父「ハゝゝゝいか様おまいハしられまい。けふ弥山で。餅ウくふた時帯ウ直さふと思ふて。革の巾着へ。小玉二ツと四文銭廿と入て。もつて出たを。腰からはづして。傍へ置たが。かいもく見へんで。コリヤたつた今。爰へ置たに違ひないにといふたら餅店のお嬶が。ほんにそれハ。いんま休れた。アノ若イ天窓の。さいこ槌見たよふな人が。手にとつて捻りまハひて見られたケニ。あれに問ふて見なさいといふたで。ソリヤ能手がゝりじや。しかし宿がしれんちうたら。ソリヤアそんじよそことくハしふおしへて貰ふて来イした。ヘゝゝゝどふぞ出してくだつしやいヱヘン〳〵　太九「鉄七てめへそれをしつて居るか　鉄「ナニおらがしるものか　親父「ハテしらんちうても現在ねきで。見たちうものがあるに。夫がたしかな證據じや　鉄「イヤいハしておきやアいゝかと思ツて。途方も

宮島ミやげ二編下巻

浪速　十方舎一丸　著

偖三人ハ弥山の本堂に憩ひて。茶をすゝりながら　林「爰へ居る御出家ハ。ずんど清僧でなけりやア務りませぬ。食ハ一度夜の丑満頃に。あちらの谷へをりて。阿伽の水を汲んでもどらしやりますげなトこゞへにそして夜になると。天狗さまが爰へ出さつしやりますと。怖　こわい事をいびせいといふいぶせきにやことでございます

太九「ハテナ此淋しひ山中にたつた一人たア凡人でいけねへこつた

洗たくのそれとハかハる法の道

こハげもなしと見ゆるぼんさまトよミすて一礼のべてこゝを立いでだん〳〵のぼりて。奥の院弘法大師へ参詣なし。それより当山の守護神三鬼神の社へまいる。天狗を祀りとぞ。此御神甚だ汚穢を悪ミ。悪を懲し善に恵ミ玉ひ。賞罰厳にして。諸人尤も恐るゝこと甚し。已に心ざまあしきもの。或ハ身を裂れ或ハ数丈の谷へ。蹴落さるゝもの侭ありとぞ。また正直律義なるものにハ。是に反して幸ひを与へたまひ。或ハ是を為て。須臾に京および。東武日光抔へ飛行見物なさしめ。其土地の名産など。もとめ与へて連帰り。不思議見せ玉ふこと。をり〳〵ありけると也。作者一丸がしれる人の兄。幼年にて此ことありしよしきけり。その時。ちさきわらそのじ一そく。もとひたるを。猶もてりといゝし外奇談甚だ多し。偖此御社たる。三社にて丹塗。一面の厳上にたてり。朱の玉垣四面を囲ミ。後ハ山高く松杉繁りあひ。前ハ数万尋の峙だちたる岸にして。拝するにも。足うらこそばゆき様にて。怖しなんどいふばかりなし。二個ハ身毛竪。色を失ひ。社前に額突て。身の罪を詫。そふ〳〵爰をたちて。下向道へ出て。太九郎兵へ「ヤレ〳〵怖や〳〵。いよ〳〵善心にひるがへツた　鉄「わつちもいろ〳〵なことを。思ひだして。気味が悪くてならなんだ。もふ〳〵喧をいつたり人を欺すことハ向後やめだ〳〵

林「人ハいがんだ事さへなけりやアなんにも怖こたアございません　太九「ホンニまた思ひだした一丸子が狂句に『身の罪を懺悔してゐる三鬼堂。とハよくいつた　林「成程ハゝゝゝ。イヤ中〳〵おそろしひことでございますトはなしながら山のはなをまハりたるに。大きなるいのしゝ。木の根をほりて。何やらんくらひ居たるにミな〳〵びつくりし。いかゞハせんとふるひ居たるか。かのいのしゝ人音をきゝてかしらをあげ三人のかげをミると。一ト声ヲゝ引とほへけるにミな〳〵きもをつぶし。太九郎兵へハあたりの松の木へかけのぼると。てつ七ハこなたなる木のゑだにとりつき。のほらんとしたるに。そのゑだぽつきりをれて。地べたへどつさりおもハず大ごへをあげて。アイタゝゝゝゝといふこへをきゝて。かのゐのしゝハまたひとこへほへて。グワサ〳〵〳〵と木のしげ　太九郎兵へ木ミへかけこミたるに。やう〳〵と　林十も山の小かげより立出よりをりると。林十も山の小かげより立出

林「鉄さんどふしなさつた　鉄「此上へのぼろふとつて。アノ木のゑだをつかまつたら。ぽつきりおれやアがつたから。尻もちを搗たのだアゝいてへ〳〵　林「ハゝゝゝゝソリヤアいたいはづじやハゝトこしをなでゝ　太九「勘平だと二玉といふ所だが。おいらア。二ツのきんたまが。ちゞみ上ツたからつまらねへ。あいつが牙へ。引かけられちやア往生だと。ほんに生た心地ハなかつた　林「わたしハまた一心に。明神さまを拝んでおりました

太九「なんでも早くくだるがいゝ。サア鉄公あゆバねへか　鉄「マアまちなせへ。尻がいたくてならねへ人の気もしらねへで

鉄炮のそれハなくして猪よりハどつさりうつた尻のいたさよ

太九「尻ハいたくても口が達者だからいゝおそろしと猪より先へ一さんにまづたましゐが飛んだ三人

江戸でござりやす。承(うけたまハ)りおよんで参詣(さんけい)いたしやした　僧「それハよふこそ。マアゆるりと御休(おやすミ)なされトいゝすてゝ勝手へはいる

滑稽道中宮島土産(ミやじまミやげに)二編(へん)上巻畢

九郎兵衛。北向屋鉄七たア。おいらがこつたアアゝつがもねへ　親父「ハゝゝゝゝそれがいに。桓武天皇九代の後胤と。長たらしふ。きかいでも高が四匁か五匁の餅代じやア。ツイ拂ハつしやい　太九「その高が四百か五百のものを。ナゼ約束通りにうぬ。はらハねへのだヱ毛唐人め　親「ハテわしやア。日本人じやといふに　林十「ハテマア斯しなされ。おまへもはじめに。はまろふといゝなさつた口もある。また狂歌のひとつもたのめバ。礼もいるものじやよしか。そこで半分はらひなされあとハしよふ事がない。御客さん拂ふてしまひなされ。どふもコリヤアかゝり合じや

親父「ヱゝこりやア迷惑じやトこゞといゝつゝ。かミ入よりゝ。わり合をだしてはらふをミれバ。ぎん札百目ばかりももつて居ながら。とんだしわんぼうとミへて。やう〳〵のことにてはらふとこなたもはんぶんはらつて。爰を立いで　太九「いめへましい。アノ死ぞこないめハ。持て居ながら。出しやアがらねへよく〳〵の柿のたねだ　鉄「ぶんのめしてやろふか　太九「イゝハけふハ神仏を順拝するのだ。乞食にやつたとおもつて堪忍して遣ろふ　林「さよふ〳〵。そふ思ふて了簡しなされ　太九「マアゑんぎに一首やらかそふ

おし強く無利にをしがる吝ぼう

中をれにした力餅代

是にてミな〳〵。どつと笑ひを催し。だん〴〵登る此内いろ〳〵。拝所霊跡等あれども。作者一丸三十年前のぼりたるまゝにて。ことゞく忘失せり。よつてぐつとはしよつて。これをしるさず。もとより滑稽をのミ主とすれバそれらのせんさくをとげざる也。閲者よろしくさつし玉へ　さて行〳〵て本堂へいたる。爰に爐をきり。ほた打くべて。大ひなる茶釜を自在にかけ。昼夜沸て絶ることなし。傳へきく往昔弘法大師。当山を開き玉ひし時より今におゐて消ざる所の火なりとぞ。三個ハしバらく爰に憩ひ居たるが。鉄七雪隠へ行たしと。林十にをしへられて。其雪隠へ這入て見けるに。下ハ遥の谷にて。甚だ気味あしき様なり。鉄七ハいきミて。一ツ垂てハ下をのぞきて見るに。ヒラ〳〵と遥の下へ落ると其所に居る鹿どもすぐに。是をなめて仕舞を。おかしく瞻望ながら。漸たれてしまひ。そこらの流れにて手をあらつてもどる　太九「イヤ強勢長へせつちんだ。いゝ加減に垂れバいゝに　鉄「マア太九さん往て見なせへ。半鐘盗人といふ途方もねへ高へ雪隠だ。そして糞ハありつたけ。鹿めがくつてしまつた　太九「穢へことをいふなへ　鉄「それだとつて。くつたもんだから　太九「ソリヤアあたりめへだハ　鉄「ハテ糞がでりやアしゝが出る　林「ハゝゝゝ　太九「古く晒落らアおかしくもねへ　鉄「イヤ〳〵兎角古ひが直打だ　林「ソノ古ひにつけて。此囲爐裏ハ。むかし大同年中。弘法大師さまの時分から。今に消ぬ火じやと申ます。そしてアノ御燈明も。其時からので。もし消ると高野へもらひに行のじやげにございます。また高野山のが消ると。爰へとりに来ますげな　太九「ハテナそれハめうだ。ホンニ火ハ古くても。別によごれも。兀もくだけもしねへから。調法だ

空海の廣きミのりハ今もなを
ひかりわたれる影をミあかし

鉄「千何年も消ねへたアめづらしひ
あなめでた大師の御手のかゝりけん
おかまハ今も残りてぞ見ゆ

太九「こいつハよく出来たハゝゝゝ。時に一杯呼れてもいゝかね。祈禱になるだろふ　林「サア〳〵よバれなさい。茶碗もそこにあります

太九「ドレ〳〵サア鉄七ももらつてのむがいゝトいふ所へ四十ばかりもつたいらしきぼんさま香染の衣きたるがいで来たりて「コレハよふ御参詣でござる　林「御めんなさいませ　太九「御茶におよバれ申やすへゝゝゝ　僧「サア〳〵勝手にまいりませ。おまへがたどれでござる　太九「わつちらア

ときてモウ〳〵屁が出そふだから。御めん〳〵　親父「ハヽヽヽ皆若ひに埒のあかぬ。ヱヽとおがう何ぼになる人のつまをさしておがうといふ方言也字義未考　餅屋の嬶「ヱヽ斯と皆で丁度五匁六分に成ます　親父「ナニ五匁六分。コリヤア強義に入たト　ふところより紙入をとりいだし。いろハテ〳〵さがして見て。あたまをかきながらのふ。わしやア。此中へ。札を十匁入たに違ひないが。コレたつた壱匁五分ほかない。ホンニそふじや。御弥山で。銭の入こたアないと思ふて。此札壱匁五分入て来た。そふじや〳〵。己どふも年でおぼへが悪ひ。コリヤ気の毒じやが。お前がたハ。餅の代を拂ふてくだつしやい。ハヽヽヽヽ　作「イヤアノ札ハ財布へトいヽかけるを。いふ　太九「イヤコウおぢいさんハヽヽ所じやアねへ。おめへが餅を振まふといつたからしこたま喰たものを。今更おいらに払へたア。あんまりあたじけ茄子だろふ。おいらアしらぬ〳〵　親父「しらんちうても。己もち合せがないケニ。しよことがない。ハテ自身が思ふ程くふたもの拂ふのじや。損ハいかんに　太九「じしんが喰ふが。雷がやらかそふが。あんまりじやアねへかへ。なぜまた初手に。拂ふあてがあるかねへか。見ていはねへのだ。人に御馳走だの摺子木だのと。しこたま礼迄いハしやアがつて。今更其代を。拂ツてくれろも能出来た。此毛唐人めが　親父「己ア日本人じやに。しかも此近在の産れで。紛れのない百姓じや　鉄「ヱヽコレ紛れがあろふが有めへが。百姓でも唐人でも。いさくさが有もんかへ。なんでも爰の払へハ。おいらアしらねへぞ　親父「ハヽヽヽ若ひ迚。そふ短気にいはんものじやてや。ハテおまいがたア。江戸じやアないか。花の御江戸の衆ハ。気がふとひ〳〵ちうが。四百や五百のことを。気のきたない　太九「ナニ気が穢へたアうぬがこつたハ。手前是さつきに何といつた。めでたく一首よんでくれろ。其礼に此餅を。奢ふといつたから。しこたま喰たのだハ　親父「サヽそこが気がきたねい人の振舞なら。遠慮をするが禮義じや。それを無理に喰て。人に銭ウ拂しちやアいかんてや　太九「いるにやア。なぜだましやアがつた。合点しねへぞ　おやぢ「マア聞いせへ。歌賃ちうハ。能因法師の様な歌よミの事。こしをれの夷うたに。賃たアヤレハアおしが強ひハヽヽヽヽ　鉄「なんだ。腰の折た大黒うただ。ヘン歌の腰が折りやア。発句俳諧ハ躄に成だろふ。太平楽じやアねへが。しかも達者で申ぶんのもノ字もねへ。りん〳〵とした狂歌だハ。何でも餅の代ハしらねへ〳〵　親父「ハテそれハ挨拶にいふたのじや。マア喰もんの事を。それがいにいふもんじやアない。ミともないハヽヽヽヽ。ハテ高が自分にくふた銭ウ払ふのじや。くじうくるこたアないてや　鉄七「こつちで喰ふが。鼬にくハそふが。おいらが銭でおいらがくつたもんなら。ナゼまた礼をいハしやアがつたのだ。此薬鑵親父め　親父「わしやア。金じやアない。人間じやに　鉄「かねであろふが。土瓶であろふが爰の勘定ハしらぬ〳〵　もちや「わたしやアわけハしりませんが。そふおつしやらずと。中をれにして。あなたと半ぶんヅヽ御出しなさつちやアどふでございます　親父「ハテこんたもいらぬ事をいふ。うらア餅なら一ツ喰もせんに　太九「喰ねへハ手めへのこつたハ。そんならさつき。狂歌の礼に。餅を奢ると。ナゼぬかしやアがつた。コレヱ誰だとおもやアがる。江戸ツ子だア。遠からんものハ音にもきけ。近くバよつて目にも見よ。東都神田の八丁堀。弥次北八が身内にて。反歯屋の太

ます　親父「去年の秋倅めに。破れ世帯をわたして。夫から隠居と改名しました　太九「いんきよハ隠居でも。なんとか名がありやせう

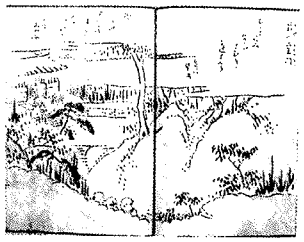
親父「アイ名ハ元からの名でごいす。わし堅くろしひ生れで。そして兎角ものごと丸ふなることが好じやで。丸ふてかたひものにあやかつて。石の臼右衛門と言ますて　太九「イヤコリヤア妙な名だハゝゝゝ臼右衛門なら。子がたんとありしやう　親父「随ぶん沢山にごいす。たつた拾五人ばかり　鉄「ハゝゝゝ途方もねへ　太九「其はづよ。上下が臼で曳だすから。そこで子が沢山大権現だろふハゝゝゝ

石臼のめでたく千世もひきつゞき
さかへ〳〵てふゆるこだから

鉄七も打かたぶきて

ごろ〳〵と長く曳らん石臼右
千代よろづ世と齢かさねて

親父「ハゝゝゝコリヤ奈い奇妙〳〵ハゝゝゝ。御礼に酒でも一杯買たいが。此御山ハ酒が大禁もつじや。其所の二王門で。力餅でもはまろふかいものをたてる事をはコリヤ作十や精出ひてあるけ。追付そこで餅ウくハすぞ　太九「ハゝゝゝ此小僧どのハ。作十といゝやすか。大きな名だハゝゝゝ　親父「イヤ形こそこもふても。年くらひじやに。あれでもことし。十八でごいす　鉄「鬼も十八たアチツト見へにくひ　親父「そんだい。飯ハうらが十人前もとりこミよるてやハゝゝゝ。夫にまだ色事師でごいす。うらが隣の。六十あまりの婆々と。ねんごろふしてヤレカア。夜も昼も這入こんでなりいせんてやつこ「ウワアイあれがいな啞を。わしウ作十来てくれひ〳〵ちうなア白髪アぬいて呉ひちうのじやに。ワアイハゝゝゝゝ　親父「ハゝゝゝそふであつたかいワハゝゝゝゝ



太九「こいつハおもくろひワハゝゝゝゝアゝゝゝト興に入てのぼる程に。頓て二王門にいたる爰に茶店ありて名物の力餅を売一銭ほどなるきなこもちにさとうかけたるなり　一ツ壱文宛也。皆々床机に腰をかける　ト茶店の嬶「よふお早ふ御登りなさいました。　親父「お嬶。茶を一ツくだいせヱ。ヤレ〳〵辛度やゞ〳〵　ちや店のかゝ「サアおあがんなさいませ。トちやをくんでミなく〳〵へ出す　親父「この頃ハ人ハどふぢや　かゝ「マアぼとり〳〵あります　親父「ソリヤアゑゝ塩梅じや。時に餅ウ出ひてくだいせへ。此御客へもあげてくだいせへ　嬶「ヘイ〳〵。サアどなたもあがりませ　トくハしぼんに十ヅゝ入たるを四ツもちきたる　鉄「ちから餅といふから。どんな太へもちかとおもつたら。こんなちつぽけなものだ。人をつけにした。こんな餅の。千や万喰たとつて。腹のたりにやアならねへ　太九「イヤそんなもんでもねへ。小言をいはずとやらつし。隠居の　おやぢ「ホンニ我ものいらずじや。腹へ這入ほど。遣で。ゑゝじやアないかハゝゝゝ　鉄「そいつハありがてへ。中〳〵旨へもちだ　太九「サアいん居もちつと付合なせへし　親父「わしハハア酒組じやで。餅ハいきません。ヨイ〳〵作やうらが代りに。精出ひてやりからかせけふハ喰しだいはまるぞ　作「ヤレ嬉しや旦那さん。御馳走でございます　親父「あとを見ずとくへ〳〵　作「うれしひことじやトにこ〳〵として。さつ〳〵と百四五十も。なんのくもなくなめてしまふ。太九郎鉄七林十三人にて。弐百ばかりくつてし拭ながら　鉄　太九「コリヤア御隠まひ。口のはたを居。大きに御馳走に成やした。是がほんの歌賃だハゝゝゝ。イヤ林十先生も餅ハ好だな林「わたくしハ両しのぎで。餅も酒もいけますてへゝゝゝゝ　親父「時に皆もふゑゝいかの太九「御馳走に成やした。おかげで満腹長者

ハヽヽヽ鉄七来さつしト風呂へゆき。しばらくあくして待かけ。サア一ぷくあがつて出かけませうと　打連て西をさして行。瀧町をだん〳〵のぼりて。山路にかゝり。程なく瀧の宮近く成たるに年の頃六十あまりの親父。十二三の小野郎を連たるが。後になり前に成て行に。彼親父とりはづして　屁「ブゞゝゝゝゝゝゝゝ引　ブツトひりながらゆくとあとにつきたる小やろうもト放ると親父ふりかへりまたブゝゝゝブウ引　放なさいまてねめつけ　「イヤこんないつめが。主人の前で屁を放ちうことがあるものか　やつこ「イヱあんたのうしろで放ましたに　親父「まへでもうしろでも。放ちやアわるい　やつこ「それでもあんたハ。一日屁ばつかり。放なさいます　親父「おらア年よりじや。放てもだいないてや　やつこ「そんなら放てもかもいますまい

親父「なして我が放てもかまハん　やつこ「それでも此中余所の人が。旦那の好む屁をこけと言ました　親父「ハヽヽヽそふいふおどれ間違をぬかす。ソリヤア旦那のこのむ。繪をかけちうのじやわいハヽヽヽ。イヤ馬鹿にやアつける薬がないハヽヽヽ　太九「ハヽヽヽこいつハよく出来た奇妙〳〵　鉄「ほんに屁について。いろ〳〵な咄しがありやす。此前江戸の両國で曲屁の妙人が。さま〳〵に放わけて聞せるやつを観ものにしやしたが。イヤまた奇妙であつた。わつちもその弟子になつて。さま〳〵曲屁を放やすがどふも爰じやア。勿躰ねへから残念だ。成程屁ハ身ハ助ると譬の句で。屁でハ儲た男サ　親父「ソリヤおもしろい。私一番銀主になつて儲たいもんじや　鉄「ソリヤア自慢じやアねへが。おそらく日本一だ。アヽ屁際が見せてへ　親父「尻だけて屁ぎハかハヽヽヽヽト打興じたどる程にやて瀧の宮にいたる爰に一条瀧あり。恰も白糸を紊せるが如くにして。其水勢甚奇観なり　鉄「ハヽアたきのミや。とハと上戸ハ思ひだしト十方舎が狂句ハ爰だな。奇妙〳〵。なんと太九さん。能瀧じやアねへか　太九「ホンニ妙だ爰でちつと休んでいかふ　林「一ぷくいたしませふト火打とり　「カツチ〳〵〳〵サアあがりませトミな〳〵爰へ瀧を瞻望ながら　鉄「太九さん見なせへ。アノ桜の咲かけた景色ハ。中〳〵繪にもかけねへ様だ　太九「どふもいへぬ〳〵　林「爰ハ宮島八景の内で瀧の宮の水螢と申ます　鉄「ナニ瀧のミの酔興だ　太九「なんでも喰へものとおもハア。外聞の悪ひ　林「水螢とハ。ミつのほたると書ます。爰ハ螢が名物でございます　鉄「そんなら爰を八景だといふハ間違じやアねへか。八景といやア。唐崎の一ツ松。堅田の落厂。ナニ瀧の宮といふハねへに太九「ハヽヽヽ馬鹿をいふ男だ。八景といやア。近江八景より外にねへと思ふそふだ。唐日本おふい物だハ。宮島ハ宮じまだけの八景があるのだ。ノウ林さん　林「左様でございます　鉄「ほんに。里見八景子といふもあつたつけ　太九「ハヽヽヽいゝ加減にすこたんをいへ。馬鹿げきつてゐらア　親父「ハヽヽヽヽ　太九「時に一ツやらかそふ

名にしをふ瀧に螢ハ見へねども
火ともしてゐる花ぞあいらし

鉄七もとりあへず

さも清く落瀧瀬の白糸を
くる人ごとにほめてやハ見ん

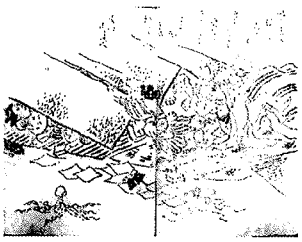
親父「イヤコリヤアおまい方歌よミじや。中〳〵面白ひ〳〵。どふぞわしをひとつ。おもしろふ祝してくだつしやい　太九「イヤおはづかしひ。ほんの出来合でござりやすハヽヽヽ。そしておめへさん。名ハなんといゝ

ことに林十。火鉢の火をつけ木にうつし。ざしきのあんどへ付て見れバ。ひる二人がかつてきたるたこなり。ふたのこりをのけたるまゝにして。わすれたるよりたこどもうごきいだし。くゝりたるなわほどけて。はひいでたるなりまづしやうたいがわかりたるに。ミなくゝあんどし。大わらひとなりたるが。さるにてもおさるがほふりつけたる。あんどのかハらけとびちり。あぶらさしハねこりびて。たゝミもふとんも。あぶらだらけとなりたるにぞ　林十大きにおこりけるゆへ。太九郎兵へ鉄七。麁相をわびて南鐐一片ほふりだし。あいさつなしけるに。林十もやうくゝとわらひがほとなり。かのたこをおのくゝとりあつめて。またくゝれいのすりばちにいれて。しつかりとふたをなし。をしを置てミなくゝ手水ばちにて。手かほなどあらひ。やうくゝかゝる中にも好の道とて太九郎兵へ

傾城の八文字ならで鮒の足
その八本に目をさましたれ

鉄「いゝ目にあハしやアがつたハゝゝゝ
女郎よりまして手の有鮒に迄
すひつかれたる事ぞおかしき

ト斯口ずさミて。また〳〵床にいり。邯単の栄花の夢を結び。頓て夜の明はなれたるに。



娼婦ども目をさまし　花山「もしくよふ寝さつしやる。もふ起さつしやらんか。もしくゝ

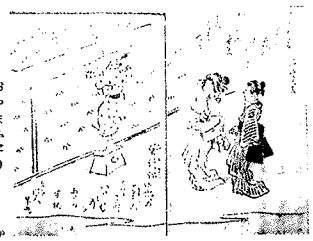
太九「ムゝゝゝアゝゝゝゝ引ぐつと一ト寝いりやらかした。もふあけたか。アゝ夜のミぢけへこつた　花山「アノ今日もどふぞよんでくだつしやい　太九「今朝ア弥山とやらへ登るから。また晩にでもいつて遣ろふ。　花「そんならどふぞとめて置てくだつしやいよ

太九「否々マア一らく遊で来な。どふせけふ一日ハ。内に居めへから　花「ヲホゝゝゝゝ留言なア爰に居いでも。わたしが内へ外へやらぬ様に。とめて置てもらひますのじやに

太九「フムよしくゝ。承知之助だト此内鉄七が合かたおき出。いろくゝせりふありてやがて二人の女郎ハ青ざめたる顔にていとまごひをなし。コロンくゝとかへりたるあとにて。二人ハゆふべの。もてたるはなしをなして。たがいにうぬをならべたてゝ居る所へ。おさる出きたりて。にこ　おさる「お早ふございます。くゝわらひながら

もふ御膳ができました。御手水を御遣ひなさいませ。アノゆんべハおかしふございましたのふ肖魚がヲホゝゝゝ　太九「そふよ。おらアどふぞおめへにあんなに吸つかれてへハゝゝゝゝ　おさる「ヤレくゝうるさやヲホゝゝゝ　太九「アゝどふやら今朝ア腰がぬけた様だ　おさる「夜前よつぽど御精が出ましたろふケニ。ヲホゝゝゝ　太九「御推量の通りがあきれらアハゝゝゝ。ドリヤ飯でも遣ツて。手水でも給ませふト二人ハやうくゝと寝所を這出。のびをしながら。小べんにゆくと。かなだらゐにゆをくんできたるに。かハりくゝかほをあらつてざしきへもどり。たばこのミゐると。やがておさ膳を持来たりて　おさる「御膳をあがりませ　太九「イヤ御めしと菜を喰やせふお汁ハなんだ。若芽に干大根か。いゝ加減だ　おさる「おかへなさいませ　太九「鉄公。いつしよにやらかそふト汁わんを出す　おさる「おふたを　太九「ナニどふでもいゝ　おさる「それでもトふたをしてかつてへたつてゆく　鉄「お平ハなんだ。へゝおさだまりの豆腐に生姜か。此ひたしものが旨へくゝ。ヲツト汁か　おさる「御ぜんをおかへなさいませ　鉄「ムゝめしかソレおかハりだおさる「よろしふ御あがんなさいませ　太九「御給仕がいゝから。汁も飯も飛こむよふだおさる「ヲホゝゝゝわたしの給仕で。よけいあがつちやア。損がいきますに。旦那とかハりませふかヲホゝゝゝ　太九「悪く晒落らアハゝゝゝトやがて膳もすむと　林十出きたりて「どふやら今日ハ。御天気もよし。かの御弥山へ。御登山でもなさるなら。御供いたしませふ　太九「ほんによふごぜへしやう。どふぞよろしくたのミやす　林「左様なら。ちよつと御風呂へでも御出なさつて。身を清めて御出なさいませ。

太九「いかさま昨夜の汚れを洗て来やしやう



居る　トやがて林十こしらへ置たると見へてさけさかなもち出　林十「おきやくさまマア一ツめしあがりませ。酒なくバ。なんのおのれが。お山かなじやハヽヽヽト　女郎の顔を見て笑ふと。娼婦二個も。片頬ににつこり　太九「是ハ御心配ハヽヽヽ　林「あなた一ツおはじめなさつて。アノ嬋娟ものへ。おさしくたさりませ　太九「ハイ〳〵これハ〳〵へヽヽヽ。ヲツトヽヽヽコリヤアとんだいヽ酒だ　林「小倉屋の蔵出し。一本木を取て来ました　太九「中々いヽ酒だ。時に斯いたそふト花山さすと。ちよつといたゞき呑まねをして盃を臺へのせると。おさるとつて太九郎兵へ是をうけて　「是ハおかたひへヽヽヽヽト又のミて鉄七へさす。鉄七一ツうけてほし。文弥へさす盃ごといろ〳〵ありて。女郎二人ハ勝手へ立て行と。あとにて　太九「田舎にしちやア中々いヽしろものだ　鉄「おいらがのハ。ちつと中だがいヽハ。堪忍してやらア畜生めハヽヽヽヽ。ドリヤ小便でもしぼツて来ませふトたつてゆく。入かハつて太九郎兵へもてうづに行てもどる。此うちおさるわり床にとりて。びやうぶ引まハし。ぼんに茶を二ツづゝくミきたりて。二人が枕もとへ置。かつてへ行あとにハ。屏風引廻し両人床おさまり。太九郎兵へが合方花山。まくらをあげて。たばこスツパ〳〵ふすべながら

「もしおまいハ江戸でありますか　客をさしてふさとな　太九「江戸〳〵　花山「アノ江戸の男まりなりハ東男ちうて意気な〳〵ちうてじやが。おまいのよふなトあとをいはずヲホヽヽヽ　太九「なんと。水際のたつたいヽ男だろふ。そのはづよ。水道の水で磨きあげた江戸ツ子だものを。ハテ郭公の八千八声を聞ながら。初がつほで剣菱を引かけたありがたさにやア。花洛の生のろけた野郎でも。大坂の才はじけだろふが。どふもおいら抔が陰を見ると神がつて。イヤはやもはやとたてまつらア。太平楽じやアねへが。其上に手があるといふ物だから。江戸の吉原であろふが。京の嶋原であろふが。大坂の新町であろふが。うるさくもてるにやアこまる。爰らが花の御江戸の土地に生た徳だろふ。なんとそふじやアねへか。ヲヤ鼾をかくかハヽヽヽ。コウおきねへか〳〵　花山「ゆふべ。ほつちりとも寝なんだケニ。ねぶたふて〳〵。アノどふぞまちつと江戸の自慢をさつしやい。其あいだ寝るケニ　太九「おきやアがれハヽヽヽヽト　これよりむごんとなり鉄七が方もいつしかはなしごへもやミて。たゞいびきのこへ。ゴウ〳〵ときこへて。たがいにぜんご白川夜ふね。引つきあつてねいりたるが。夜ふけて何やらんつめたきもの。太九郎兵へ花山。二人が顔へしがミつきたるに。おどろき。きやつといふてはねおきたるが。おりふしあんどの火きへてまつくらがり。太九郎兵へハかのとりつきたるものを何やらんとさぐりて見れバたこなり。これをつかミのけんとするに。吸つきてはなれず。よふ〳〵のことにて引はなし。ほふり出すうち。花山もヤレコリヤキ　太九「ヒヤアこいつハ昼買た肖魚だ〳〵　花「ヤレ疾ふどけてくだツしやいほところへ這込にヤレコリヤ心悪ひ　太九「どれ〳〵何所に〳〵ハヽヽヽ鮹がたこをねらふから大わらひだハヽヽヽこれか〳〵　トよふ〳〵引つかミ。ほふり出すと。鉄七が寝たる上へおちて。文弥が顔へはひ上るとめをさましてきやつといふて顔をなでるとやハらかなるものが手にさハりたるに二度びつくり。ヤレおきやくさんと。きいろな声をいだしてわめくに。鉄七目をさまし。なんだ〳〵と。おきあがりしがまつくらがり。イヤこいつハはなしが見へないと。さぐりまハす手さきへ。たこがさわりたるに。これもおなじく。きやつといふてとびのきしが。やう〳〵心づき。これハ昼かつて来たたこを。すり鉢へいれて置。そのふたになしたる合利をのけたるまゝにして置たるゆへ。さてこそかのたこめが。はいいでたるものならんと。しきりに手をたゝくゆへ。かつてより林十。ねぼけたるまゝ。なんの御用とふすまをあけ。はいつた所がまつくらがり。およびなさいましたかと。びやうぶのきハへゆくと。あしくびへかのたこまとひつきたるに。これもきやつといふて。とびあがるひやうしに。びやうぶとともにたふれて。太九郎兵へと。花山がねたる上へこけると。太九郎兵へびつくりしアイタヽヽヽトおきるひやうしに。花山とあたまをこつゝり。花山もこれにびつくりしヤレいたやと。飛おきるはづミに。これもまたとなりのびやうぶをこかすと。鉄七ぶんヤびつくりし。十ハうろたへて。火をともさんと。かつてのかたへゆきかけたる。あしもとのたこにふミすべりて。あふむけにどつさりところぶと。たこもうろたへ。林十がまたくらへはひこミ。きんたまへ吸つきたるに。きやつといふてとびあがる。そのこへにおさるも目をさまし。ヤレコリヤだんなさんなんでありますと。あんどをさげて出きたり。林十がそばへあんどさしいだせば。林十ハまたくらへはいこミたる。かのたこをつかミだし。ほふりたるが。そのたこおさるが顔へべつたり。これもおなじく。きやつといふて。あんどをほふりつけると。かハらけハとんで。またまつくらがりとなり。こけるやらすべるやら大そうどう。やう〳〵の

太九「むやミにこじつけらアハゝゝゝ　鉄「そこらが鉄七先生の御風調だア　太九「風調懐に入ときハ。猟師も是をとらずといふから。其狂歌ハマアとれぬ〳〵　鉄「とれん反もの蚊屋かたびら。安本丹御用なら。此間に御もとめなさいハリトウ〳〵　林「ハゝゝゝ　太九「よくしやべる男だ　鉄「しやべり見しよとて。紅かねつけよぞ。ミんなツゝシヤンぬしへの心中だアてヲゝ嬉しトおどるまねをしてあしもとの汐のたまりへ　「ヱゝどいつだ。こんな所へ。水をビツシヤリ　ためておきやアがらア。気のきかねへ。ヘツへ大変の大小だ　太九「あんまりしやべるからいゝ気びだ　鉄「いゝ気味せまいぞうとヲたしなんで見てヱゝも情なや　太九「ハゝゝゝいゝざまだ　林「ハゝハゝゝゝゝイヤ直に乾きます　鉄「どふもおらア濡ごとしだからこまらア。ちくしやうめ　林「今宵ハしつかり濡が聞ませふアハゝゝゝゝ　鉄「ほんにそんなしらせだろふ。斯もあろふか

美しき女が目もとのそれならで

わがあしもとのしほにはまつた

偖とかくなしける内。日もはや西の山の端へ。入相告る時寺の鐘におどろき。足を疾めて宿へかへり。風呂にいり膳もすミて。二人ハ横になつてゐると林十出きたりて、林「おくたぶれでございませふ。時に御客さまがた。今晩新町へ御こしでございますか　太九「イヤもふがつくり草臥やしたから。やめにしやせう。ノウ鉄七　鉄「どふともしなせへ。しかしまんざら中の足ハ。くたびれもしめへ。ノウ御亭主　林「ハゝゝゝいかさま三本でも御あるきなさるまいワハゝゝゝ　太九「イヤはや若へものといふものハ。兎角行義が悪くてならねへ　鉄「ハゝゝゝおめへにならツてサ　太九「馬鹿アいへ。おいらア遁世同様な気だが。どふも野暮らしく。いやだともいへめへ。どふだ御亭主さん。爰の内へ呼こたア。出来やせんか　林「随分それハいか様とも成ます　太九「そんならいつそ。おめへの見合せで。意気なしろ物を二めへたのミやす　林「かしこまりました。ヱゝ斯と誰がよかろふ。ヲイ〳〵おさるやア〳〵。ちよいと来てくれいトおさる出きり　おさる「およびなさいましたか　林「ヲゝおさるやア引。ちよいと来て呉ちうたら。呼だのだろふじやアないか。ハゝゝゝ。時にそれハ夫じやが。此御客さんがたに。女郎衆をよんてあげにやアならん。貴さま働て能のを二人呼であげい誰がよかろふ　おさる「誰が能ありませうかの　林「されバアノちよいと爰に兀ハ有が。瓶子屋の花山ハ。随ぶんゑゝ子じや。あれと一人ハ槌屋の文弥がよかろふ。愁ひがよふきくケ二　おさる「そんならアノ二人に仕ませう。そしてアノとめでございますか　林「ヲゝとめとも〳〵　おさる「そふ言ませふトト出てゆく。あとに林十ハ。あんどを出しざしきへもあかりをつけ。神だなへかづ〳〵燈明をあげてかしハで。「ヱヘン〳〵家内安全息災パツチ〳〵〳〵延命。家業繁昌罪障消滅。別て私へ金銀充満。女人愛敬を守らせ玉へ。拂ひたまへ。清めてたまへパツチ〳〵〳〵。ト一心におがんで居る所へ　カランコロン〳〵〳〵トあしだの音高く。槌屋瓶子屋の紋つきたる丁ちんを先にたて。禿一花山。文彌入きたり　二人「林人ヅゝつれてかの十さん。今夜ハありかたふ　林「ハゝア皆うつくしひのふ　花山「ヲホゝゝゝゝちつと美しうありませふ。そして御客衆ハ　林「御客衆の御入イゝゝ引ドゞンヒウ　二人「ヲホゝゝゝ大かたこつちの座鋪じやろう　林「ヱゝ畜生め。あやかりたい　文弥「ちやアきついこれハ爰の里ことバ也　おさるさんが能ことじやアあるまアのふおさるさん　おさる「バアわしやアしりませないヲホゝゝゝかゝることバアといへる土地なまりあり　偖女郎二人ハ座しきへいたり。太九郎兵へ鉄七へ。ものをもいはず。上座へ

太九「あるだんか。おらが若へ時ハ。朝比奈の三郎。源の為朝といつて。異類異形種々薩垂の。島巡りをしたものだが。長者國抔ハ。土砂子まで金銀といふものだから。奇妙じやアねへか　林「ハテノそれがいな。金のおいゝ国なら。商ひも仕事もしてがあるまい　太九「しれたこと。酒ハ酒地といつて。池から涌し。肉林といふ所じやア鯛のさしミも。鴨の鍋焼だろふが。まぐろの煮びたしだろふが。ほしひと思ふものが生ておるから調法だ　林「ソリヤめうじや。そんならおやまの様なものも。銭いらずに出来ませふ　太「しれたこと。三十二相そろつた美しものが。鈴なりに生ておりやす　林「ハゝゝゝ女が木になるたア啞らしい　太九「イヤサほんのこつたが。まづとしまの木。後家の木。おいらんの木。惣嫁の木と。いろ〳〵有て。気にいつたやつを。枝ぐちおつぺしよつて土産たアきつかろふ　林「ソリヤめづらしひ。そんなら大かた娘の木も有ませふアノきむすめがハゝゝゝゝ　太九「こいつア一番かつがれたハゝゝゝゝ。時に此鳥居ハおもつたよりやア太ひの根ときたイヤがうせへぐ〳〵　林「此御鳥居ハ土地の人ハ御の字をつけてふ一本は楠。一本ハ萩の大木じやと申ます

太「獨活の大木でなくツてめつけもんだ　鉄「フムそんなら。百人一首の中にある人が。建立したのだろふ　太九「ナゼ〳〵　鉄「法性寺の入道萩の大木大政大臣　太九「悪くしやれらアハゝゝゝ　林「コリヤアおもしろひワハゝゝゝ　太九「なんにしろ。ふてへもんだ　鉄「ほんに中村ふてへもんだ　太九「歌右衛門たア。ちつとうけにくひが。マア堪忍してきいてやろふ。そんならおらがひとつ。謎をかけよふから。といて見さつし。此鳥居とかけて。何ととく　鉄「あげやせふといつたら。あげて見ろじやねえか　太九「馬鹿アいはつし。そんな古手じやアなしサ　鉄「そんならあげやせふ　太九「どふやら風をひいたよふだトとく　鉄「心ハ　太九「ハツ楠萩　鉄「ハツくさめかおきやアがれワハゝゝゝ。そんならわつちが一ツかけよふ。といてミなせへ。此大鳥居とかけて。どふやら風をひいたよふだとゝく。心ハハツ楠はぎ　太九「ハゝゝゝそんな謎が何所にあるもんだ　鉄「アリヤアこそかけるのだ。サアどふだ〳〵　太九「とけねへ　鉄「是を梶原が生田森の合戦と解　太九「心ハ　鉄「二度のかけ　太九「ハゝゝゝイヤこいつハ重ひ〳〵　鉄「おもひはづよウ鎧を着てゐらアハゝゝゝ　林「ハゝゝゝコリヤおもしろいハゝゝゝ　太九「額ハなんと書てあるトぐつとあふむきナニ〳〵伊都岐島大明神か　林「あれで伊都岐島大明神じやげにございます　太九「ツイいつくしまと書バいゝことを。こつちハどふだト廻りハゝア此方ハ厳島大明神とある　林「今宝蔵に納めてある御額ハ。小野ゝ道風と弘法大師の御筆でございます。此御額ハ。後奈良の院さまの。御震筆でございますげな　太九「ナニ氷豆腐に香〳〵大師の筆で。其うらハ。夫を喰過て。おならの院の御筆か　林「これハ勿躰ないことをハゝゝゝ　太「時に一首うかみ八目だ

そのふとさたぐひも浪につゝ立て
日本一の名をとりゐなれ

林「成程コリヤおもしろいハゝゝゝ。鉄さんもなんぞ出ませんかのハゝゝゝ　鉄「ヲツト皆迄いふめへ。ソリヤ斯だ

宮城のゝ萩の一木と聞バげに
せんだい未聞の大鳥居なれ

滑稽宮島土産二編自叙

二番煎じの香の無とかへり咲の色淡きハ左もあるべし。二本目ハ與一もこまるとハ。武道に疎き未練の推量にて梶原が二度の駈ハ。箙の梅に。花々しき。美名を遺せり。されや駿足の膝栗毛ハ。数編をかさねてます〳〵はね。老たる麒麟に増こと遠きも。御者が達者の鞍あんばい。ヤンヤ〳〵の絶る間なし。予頃日。たま〳〵宮嶋土産の店を開きて。今おかハりの嗣編目も。はじめにおとらぬ。上あんとは。売たい儘の商ひ口茶屋の餅も強ねばくへず。サア御かわりを〳〵と。此本の口とりに。自らすゝめてしかいふ

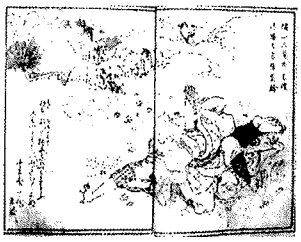
辛亥晩夏下澣

去年の冬から居つゝけの客舎になまけて

十方舎一丸戯識

凡例か附言かアゝソレ左之通

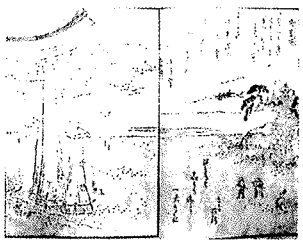
宮じまミやげ初編の店を開てより。思ひの外に評判よく。ぬれ手で粟餅の黄色をせしめて。書肆ハおふきに腹をふくらし。作者に砂糖の甘味を見せ。サア〳〵あとを蒸籠の。さめぬうちこそ御馳走だと。餅を机に頻りの催促。承知〳〵とのミこんで。咽へつまらぬ急案も。思ひのほかに御口に協はで。あとがまをまた張込で。アゝして斯してどふしてと。胸の積りの大和とぢ。筆にいとまのなき程に。御もとめなさい〳〵



滑稽道中 美屋島土産弐編上

浪花 十方舎一丸著

満汐の。なかバひたせる神の戸や。龍の都に。立つゞくらんと詠じけむ。厳島の大鳥居ハ。海内一にして其巨大なること。眼を驚せり。爰かの東都の騒客。太九郎兵衛鉄七の両士ハ。大元より。急ぎ旅宿へ帰んとなしけるが。暮るゝにハいまだ。ちと間もあるべけれバ。次手に大鳥居を。手ぢかく見ばやといへるに。宿主林十さらバとて先にたち。千畳鋪のしたを。御笠濱の。石燈籠のあたりへさして行たるに。折ふし汐ひきて。干潟となりたるを幸と。此所よりをり立。草履を脱て。おの〳〵手にさげ。洲をあゆミ行に。夕陽斜に照してまバゆく。足もとにハ。さゝやかなる貝どもの。売を引ずりて這めぐりちさき蟹ハ人の足音に怖て。忽ち穴へむぐり。潮の残りたる凹たまりにハ。小鰕鮒などのちよろつくを斜目ながら。をり〳〵貝売に足を突てつぶやきつゝ行向ふにハ。鹿どもすましたる顔して。左右の耳うごめかし。のたり〳〵と横ぎる空にハ。鷗翅をならべて塒にいそぐ。夕風のいとさむきに。足を馳て行程に。頓て鳥居の傍近くなりて。太九郎兵へ是を見あげ　太九「ヒヤアこれハ〳〵とばかり。花のじやアねへ。大鳥居だ。扨も〳〵　鉄「ほんに。大鳥居といつても。こんなであろふとハ。おもハなんだ。イヤはやこれハ〳〵　林十「なんと。太ひもんでございませふ　太九「弓削の道鏡もはだしぐ〳〵　鉄「勿躰ねへことをいふハゝゝゝ。マアなんにしろ。こんなふてへ鳥居ハ。日本唐天竺。東夷南蛮。北狄西戎にも。ない〳〵つぶりだろふ　林「ハテいろ〳〵な國の。あるもんでございますのふ



ト例の好の道を。出る侭に吐ちらして。三個ハ椽側の茶店に腰打かけ休ミ居ると。茶店の十五六なる娘。きなこ餅に砂とうかけたるを。菓子盆にもりたるを三ツと。ぼんに茶を汲たるを持来りて　「どなたも御茶をおあがんなさいませ　太九「アイ〳〵茶を喰やせう　娘「ヲホヽヽヽヽトもちをめい〳〵にわたしやうぎに腰打かけ。かの餅をくひながら暫く四方を打ながめ居たるに。爰にハ殊に猿ども多く居けるを見つけて。太九郎兵へ彼きなこ餅を。一ツ投て遣ると。猿これを。ちよいと取て喰ふを。二人はおもしろく思ひ。やたらに投てやると。だん〴〵猿ども多く出来るに。二人ハ夢中になり　鉄「ハヽアまた来たぞ〳〵ハヽヽヽヽおもしろへ〳〵。ソリヤ遣るぞと。菓子盆共に遣る真似をして。また引たくらんとするを。猿共腹をたて。三四足一度に鉄七にしがミつきて。掻まハすに。鉄七膽を潰し。アイタヽヽヽヽトくハしぼんを。そこへほふり出すと。もちばら〳〵とさんらんするを。さるどもそふ〳〵これをひらひとりては屋しらへかきのぼり。ムシヤリ〳〵とくらひなから根うらへ隠れてしまう　太九「ハヽヽヽ　鉄「コウこんなに。爪をたちやアがつた。いめへましひアヽ痛へ〳〵　林「猿に遣だてをなさると。いつでもあれがいに寄て来て。どふもなりません。いたミませう　鉄「ピリ〳〵すらア。いめへましひ畜生めだ。その上餅迄引たくりやアがつて。いヽ目にあハせた　もちや「ヲホヽヽヽ御きのどくな　太九「ハヽヽヽヽ中〳〵あいつらア。人間よりやア気のきいたものだ

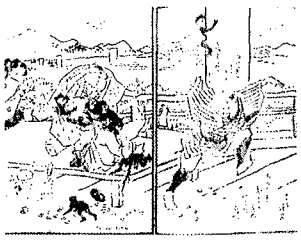
きなこ餅引たくる間もあらくやし
人にましらが喰てしまつた

ト此狂歌に笑ひを催し。頓て此山を経蔵の方へ下りて。山王社へ参り。夫より紅葉谷を見ぶつなして。山路を東へ。鳥居松といへる方の花見んと。林十先に立て。段々山道をたどるに。何方も花ならざる所なく。所〴〵に氈打敷て。弁当さヽへ打ひらき。舞あり唄ふあり。浮世の外のたのしミ仙境にいりたる心地して。猶花の雲をふミ。興に乗じて三人ハ漸と日のくるヽ頃。宿へ帰りて見るに西蓮の上方妓女。二三人押かけ来たり。両人をまちうけたりと。ざゞめきて浮したつるに。二個ハもとより願ふ所と。肴言つけ。大酒もりをはじめ。夜とヽも騒ぎけるが。いたく更わたりたるに。太九郎兵へ鉄七ハ。したヽか醉つぶれ。其侭火燵に轉寝なしけるにぞ。頓て藝者どもヽ。迎と倶に三弦箱とり片付。いとまごひして帰りけり

滑稽道中宮島ミやげ拾遺全終

ぱいをかたふけ。けふのさい料理させてさしつなんをはらハんと。ちよつと おさへつ。よき程の醉に乗じて。爰を出。本町へ到り。ある楊枝店へ立より　太九「ハヽアいろ〳〵奇麗な楊枝があらア。ねへさん是ハいくらだへ　やうじやのむすめ「ヘイ是でございますか。こちらが廿四銭。此ぶんで四十八銭でございます。御土産にハ。是等が奇麗で。よろしふございます。ヘイ〳〵是でおまけ申て。六拾四銭でさし上ませふ　太九「楊枝より姉さんがほしひもんだ　娘「ヲホヽヽヽどふぞ。わたしと一緒におめしなさつて。遣アさいませ。おまけ申てあげますにヲホヽヽヽト鉄七が顔を。じろ〳〵と見るゆへ。こいつござつたのだなトゑりをつくろひミへをつくりて「ねへさん。あれを見せてくんなせへ　娘「ヘイ〳〵此ぶんでございますか。是ハ五色の。もやう入でございます。御直だんハ。三十二銭でございますヲホヽヽヽヽト　また鉄七が顔を。しばらく見つめて居たりしが。ツヽと立て内へはいつてしまふと。やがてしらがの。七十ばかりなる。ばアさま出きたり「是はどなたも。よふ御出なさいました。

鉄「ヱヽおばアさんじやアむつかしひ。今のねへさんを出しなせへ　ばゝ「アノ娘ハ急に。何やら悲しふなツたちうて。内で泣ますケニ。どふしたのじやと問ましたら。此御若ひ御方が。アノ孫めが死別れた。聟殿に能似てじやチウて。思ひだし泣をしてをります。　鉄「なにかへ。アノわつちが今の。娘さんの聟に。よく似てゐる所で。恋しがつて泣て居るのか。ヱヽそんなことに。泣ことがあるものか。其恋しひ聟さんに。似て居りやア。わつちが爰の聟になつて。可愛がりやアいゝじやアねへか　ばゞ「イヽヱ好て泣のならゑゝが。其聟が



醜ない不男の癖に。内をあらひがハにして遊だで。似た人を見ても。腹が立ちうて泣ますわい　太九「ワハヽヽヽ鉄七いゝ見立にあつたアべらぼうな　鉄「いめましひ。がきらじやアねへか。一文がものを買ても御客だろふ。それになんだ頬が似たの。道楽ものだのと。ナゼ安く扱やアがつた。了簡しねへぞ　ばゞ「ヲホヽヽヽ御気のどくなヲホヽヽヽ　鉄「太九さんよしなせへ。爰の内で一文がものも買て往こたア否だ〳〵ト立あがる　ばゞ「マアそふおつしやらずとトとめて

鉄「ナニ馬鹿アぬかせ。べらぼうな。いゝかと思やアがつて　太九「いゝ見立に逢たナ。ハヽヽヽサア行べいト早〳〵爰を立出。此本町のつきあてより。千でうじきの山へのぼる。此上に大経堂あり千畳敷と云傳へいふ。むかし此山上に大木の楠ありて。近郷に蔭し。耕作の害となれるを。　豊太閤。御社参の砌。上覧ありて。是を伐とらせ玉ひ。則此大経堂御建立あり。猶其餘材をもつて安宅丸といへる。御船を造らせたまひけるとぞ。又五層の塔あり丁数かぎりあれバく三人ハ千畳敷へ上ると。掾側なる茶店の嬶「どなたも御休ミなさつて。お茶でもあがつて御出なさいませ。名物きなこ餅を上りませ。御休ミなさいませ〳〵トよびたつるをきゝながら御堂の内へはいると。色やうじの出店ありて。人　やうじや「名ぶつ色楊枝ハ。よろしふございますか。当いつくしまの繪図ハよろしふ　太九「成程千畳敷だろふ。強勢廣ひもんだ　鉄「太九さん向ふを見なせへ。気が晴ていゝね　太九「ムゝいゝ景色だ爰も桜が沢山だから。どふもいへぬ〳〵

春なれや花咲そろふ此ながめ
あたへ千両じきといふべき

鉄「こじつけるもんだのトあたりを見楓樹も数株ありて。赤ミたる若葉の細やかなるが。繁く出たるも殊に愛らしけれバ

花もミぢ野山に繁く色づきて
人のこゝろをはるあきの國

アゝラ口をしや残念やナア　引ドロ〳〵ギツクリト芝居のかたきやくといふ見へをするとそこらにあそび居たる子ども大ぜひ是をミつけ　子ども「ワアゝイあの人ハ芝居をしんさるワアイ〳〵アハゝゝゝアハゝゝゝ　太九「へゝ爰等でも。芝居といふことを知て居やアがるそふだ　林「馬鹿にしたことをおつしやる。爰の芝居ハ。名高ひもんでございます。しかも千両役者ばつかり。参りますに　鉄「田舎だつて馬鹿にやアならねへ　太九「芝居を知て居る御褒美として。サア是を遣るぞト四文せん十文ばかりまくと　子どもミな〳〵よろこび　「ヤレ御ほうびじや。ひら〳〵トてん〳〵にば　太九「ハゝゝゝおもしろへ〳〵。ソリヤ最一ツまくぞトいふを聞て。子どもの乞食。大ぜひかけきたり　「旦那さん。わたしらにも遣アさい　太九「よし〳〵サア拾へ〳〵トバラバラと。二十文はかりよろこび是を拾ウと最前の子供等。寄来たりて　子ども「おぢさん。わしらにも。もちツとおくれんさいト一時に太九郎兵へとり　太九「コリヤどふするつき。さいふを引ぱる〳〵。此がきらア。マアはなせ〳〵子供口〳〵に「イヤ〳〵おくれんさらにやアはなさん〳〵太九「ソリヤほふるぞトさいふを高くなげると。やねに居たる猿。手をだして。ちよいとかの財布を。つかんでとりやねの小すミへ持行。さいふをあけてみた所が。くらひものなきゆへ。さいふを下へほふりつけると。さしがきれて。四文せんばら〳〵〳〵と。そこら中へさんらんするを。乞食も子供も。ソリヤやねからぜにが。ふつて来たと。おしあふてひろひまはるを。太九郎兵へうろたへまハり。エゝ此がきめらア。何をしやアがると。やう〳〵とおつちらし。ひらひあつめた所が。四百あまりの銭。たつた三十ばかりのこりたるに。太九郎兵へつらをふくらし。エゝいめへましひいゝ目にあハしやアがつたトこゞとをいつてゐるを鉄七ふきだし

「なんのいらざることを。おめへがまき出したから起たこつた　林「御用心なさいませ。今日ハなんでも。鹿と猿の。たゝる日でございますハゝゝゝ　太九「しかたがねへ。明神様へ。奇進したと思ツて。了簡してやろふ

遣るまじとほれバ屋根から引たくり
さるとハ馬鹿を四文銭かな

ト斯口ずさミてたどるほどに。頓て大佛の原にいたる。大御堂とてあり丈六の弥陀并四天王を安す　此原に丸屋喜右衛門迚二軒の客舎あり　作者一丸。当金子屋庄蔵　子正月下じゆん。廣しまの。或富家のいん居。鶴屋老人ハイカイヲコノミテ。ヨク人ニシラレタル人也に誘れて渡海せし時。かの丸喜といへるに。四五日逗留せしが。座しきひろく。奇れいにして。庭前のながめ甚よし。客をもてなす事。ていねいなり。渡海のくんし。爰へ止宿し玉ハんことを。一丸奉希候。またかのかねこやといへるも。一丸がしる人の一類なれバ。爰にハ山あり是へも御入らせをねがふ所に候　野あり。古木若木の桜。数株有て。花の頃ハ殊更に遊客多く。弦歌の声不絶して。賑しきことといはんかたなし　前許一丸参詣せし時。いん居。丁稚廣吉。予。門人五方舎都合四人連にて弥山へのぼり。かなたこなたに遊行しておもしろかりし　偖太九郎兵へ鉄七ハ。暫し此景色に詠めいりて　太九「此島ハ。いづくも花が沢山だから。中〳〵いゝながめだ　鉄「よし野初瀬も。はだしあだ浪。よせてハかへるといふもんだ　林「春の景色ハ。土地の者でも目がさめますに　太九「いかさまそふでごぜへせう

美しひ女神居ませバ咲花も
ことに麗し小町楊貴妃

鉄七もとりあへず

千金の春にハ吝き花見かな
たゞ一りんもちるを厭ひて

太九「鉄公見や。鹿といふものハ。艶しひものじやアねへか　鉄「そふさ。犬と違ツて。どふも風流なもんだ　林「鼻紙を一枚。喰して御ろふじませ　太九「ほんに紙を好といふことだコゝゝゝゝソレ紙だ　鹿「ミイゝゝゝ引ト　ほそきこへヲ出して。のさり〳〵とあゆミ来り。そのかミを。匂ふやうにして。メジヤリ〳〵とくつてし　太九「ハゝゝゝゝ中〳〵妙だサア往まふ　爰の石だんを下りて　両側にハ魚屋軒を並ふト　魚のたなへいたるべて店さきにハ。とり〳〵の魚ども。はね廻りて。いさぎよし。又名物惣太郎漬こぬかにの。魚貝どもをつけたるなり。雪花漬とふのからいろ〳〵はなハだ雅味なるものなりに魚類をまぶしたるなり　と記したるもあり。三人ハあるさかなやに入て。一

ンカラ〳〵　太九「ねつから。おかしくもねへ　林「ハヽア地蔵尊を。損といふ落しじやの。成程ハヽヽヽ　太九「コリヤア一人講釈がいらア智恵のねへ　林「ワハヽヽヽヽ時に爰でございますトいふをミれバ。さゝやかなるあんじつにて。正めんにしきの戸帳をかけ。供もつかづ〳〵そなへ。香のけいはんかたなふりくんじて。しゆしやうなること　「おたのん申ませし。林十じう上り口より　林十九のうつくしき尻さん「コレハふ ト内より。どふれといふて出たるハと「コレハよふ御参詣なさいました　林「ヘイヘヽヽヽ今日ハ結構な御天気で。ヱヽ是ハ江戸の御客でございますが。御霊像を御開帳がいたしたいとの。ことでございますヘヽヽヽ　尼「夫ハよふトかほをあかめてにつこり　「おらア御地蔵さまより。今の尼さんの御開帳がしてへ　太九「おしのつヱヽト此内かの尼さんハ。さよふ申ませう。マアこちらへといヽすてヽかつてへはい　「これハどなたも。よふこそ御参詣なさいました。御戸を御開き申ませふトてふづをつかひ。香を手にぬりて御づしの戸をギイヽヽ引と戸帳をかヽげて　比久「サアどなたも。近ふよつて御拝なさいませ　林「ヘイ〳〵これハ。サア太九郎兵衛さん。鉄七さん。是へ御上りなさいませト三人居なび。鉄七小声にて　「おれを拝し見る石像の地蔵。

ミぐしより胸のあたり迄鉄にて。御手の宝殊ハ。金色と変じさせ玉ふ。実に奇異の霊像なるに。おの〳〵肝を消。合掌三拝なして　太九「松浦佐世姫ハ石と変じ。おらが親父は土になつたが。御地蔵が金になつたハ。見はじめだ　鉄「イヤ太九さん。おらが長家の。呑太郎が娘ハ。十五両のかねに成たじやアねへか　太九「それ〳〵。あの時ア可愛そふであつたが。あの娘も仕合がよくツて。今ぢやア田町の。法印さんの隣に囲れて。意気なくらしをするめいかだとサ　鉄「それよりやア。かつたい松めがおふくろハ。神田のづく入坊主と。一ツにくツ付て。かねより堅へ中となつたといふ咄しだ　林「マアそのはなしハ。あとになさつて。御拝が済ましたら。御初穂を上て御立となさいませ　尼「マア御ゆるりと被成ませト此内太九郎兵へ銭百も紙にくるミて出し　太鉄「是ハ軽少ながらヘヽヽヽ　尼「ハイ御町噂にヲホヽヽヽヽ　鉄「御町噂なら。五十ばかしに。まけておくんなせへやし　林「何をおつしやる。御地蔵さまに。御掛直ハございませんトいふ所へ。いぜんのうつくしひ尼さん。茶を三ツほん「御茶をにのせてもち出。茶だいにのせて差出シ御あがり被成ませ　太九「ハイ〳〵おかまいくださりやすなハイ〳〵　鉄「ハイ〳〵これハトちやをとりながら。尼さんの顔にミとれて。にちやの中へゆびをつツこみ　鉄「アツヽヽヽヽヽ　尼「ヲホヽヽヽおあぶなふございます　太九「アハヽヽヽそヽツかしひ男だ　鉄「此お尼さんの。うつくしひ兒に。通をぬかしやした。それだからあつくても腹ハたヽねへ。なんと心中ものでごぜへやせう　尼「ヲホヽヽヽト顔をまつかにしてそう　太九〳〵かつてへはいると「外聞わるひ。林さんの手めへもあるもんだ。女のねへ國へでも生れたよふに。だぼさへ見りやア。かぶりつかふとすらア。業さらしな。サアおひらきとせう　鉄「是ハ大きに。御造作でござりやした　尼「さよふなら御機嫌よふト皆〳〵爰を出てしバらく行と。あとよりモシ〳〵。たばこ入がおちてをりますと。六十ばかりの。黒ミつちやの比久尼が。呼かけるに　太九かのたばこ入を高くあげて「ホイ是ハ御世話トあとかへりして。たいめへましひ。実ハ此たばこ入を。態と忘れて置て。今の美しひ。おびくにさんおれを呼かへさせ。是ハありがたふござりやすと。此腰さけを取ふりで。ちよつとひねつて。文句をつけよふと思ツたに。屎ばゞアめが。邪广アしやアがつた　鉄「ハヽヽヽこいつハ一番あたり〳〵

石佛かねに化たる堅比久尼

きつても血さへ出ずに隠れた

太九「ヱヽ折角巧にたくんだ。反逆露顕し。

おめへ勝手がよくハ出かけやせうか　林「へイちよツと御待なさつてトかつてへ行やがて羽をりを引かけ出きたりサア御供いたしませふ。マア新町からまいりませふト　三人づれにて。東をさして。ぞん光寺のまへを。右へとりてあゆミ行。左のかたに長濱への道。石だんあり。上に二王門あり。近きころ此二王門の傍に。一軒の酒楼をいとなミ。力茶屋とよべり。二王門のそばなるをもて。名づけしとぞ。本名ハ松本屋とよべるよし。廣しま門人五方舎半丸がもとにて。此あるじニめん會せしことあり。へ入て却説かの三人ハ。やがて遊廓新町なる門内見るに。一町許の一条町にして。四軒の青楼。三軒の女肆。軒を並べ。甍をつらね。いづれも家居立派にして。弦哥の声かまびすしく。娼妓共ハ花面を粧ひて。街に客を送るあり迎るあり。嫖客の醉つぶれたるハ。才婢が肩に萬涎を垂し。小戸ハ合娼に性根魂を奪れて。居つゞけに尻をくされ縁ハ。達广より。太き眼玉を貰ふもあるにやと。余所の疝気を頭痛に病。遉に江戸ツ子なれバ。かゝることハ河童の屁とも思ハねども。色と酒にハ目のなき者どもなれバ。忽こゝろ嫖々然として。太九郎兵衛寝てゐる鹿ニ蹴爪づきてまつ逆さまにどつさり。鹿もびつくりして起上り。一もくさんに逃だしてゆく　太九「アイタゝゝゝゝ

鉄「ハゝゝゝどふした〳〵　林「おあぶないワハゝゝゝ　太九「ハゝゝゝゝ所じやアねへ。全体林公もつまらねへ鹿が居りやア。居るといつてくれゝバいゝ事を　鉄「ハゝゝゝ盲人の手引じやアあるめへし　林「ハゝゝゝけしからぬトきものゝ砂をはらツてやるを。そこらのおんなども。目ひきそでひきて。ヲホゝゝゝトわらひたつるに。太九郎兵へハ顔を赤くして。早〳〵こゝの門を出ぬけ　太九「いめへましひ　鉄「猫の手うらミとやらだ。いゝ年をして。女といふと足もとをおぼへぬ人だから　林「イヤそこが。おもしろふございますワハゝゝゝ　太九「よくおかしがる。ハゝゝてもあるめへ。ヱゝ思へバ鹿のべらぼうめが恨しひ。いゝ恥をかゝしやアがつたハゝゝゝ

膝がしらうつゝぬかして恥しや
わが足もとをしかと見ずして

鉄「ハゝゝゝよく出来た。ドレ拙者も一首つらねよふ。ヱヘン〳〵

うつかりと気ハうかれ女に踏かぶる
鹿も一さんに飛んだめにあふ

林「ハゝゝゝおもしろふ出来ました。時に朱にまじハれバ赤なるとやら。わたしも一首うかみました。斯でハどうございませう

つまづきし鹿も縁なれ白粉ハ
鹿の子まだらの女に見とれて

太九「イヤきめう〳〵　林「ハゝゝゝイヤおはづかしひ。時に此向ふの庵に。ふしぎな御地蔵さまが。ござつしやいます　太「ナアニ節木じやアあるめへ。石金の地蔵さまだろふ

鉄「無だハマアよしなせへし。あなたの御手引で。塞の河原へやつてくださるげな　太九「ハゝゝゝゝいゝ加減に馬鹿アいへ。塞の河原に髭親父のおつたこたア。むかしからねへこつたハ　鉄「イヤ〳〵そふでねへ。昔ハ十よりしたの。稚子ばつかりであつたツけが。幾億万人ともしれない。子供の数だから。中〳〵御地蔵さまも手が廻りかねる。そこで子供等に。支配人が二三千人もいるといふもので。近頃ハ気のよさそふな男や。おんなの亡者を。さいのかハらへ。仰山呼よせて。守をおさせなさるげな　太九「おもくろい。それからどふした　鉄「そこで。今迄子供ばかりで。百味の供物で間にあつたのが。だん〳〵足が入ツてならない。極らくへ往て。ねだりたくツても。往古亡者のすくねへ時ぶんも。今も同じ扶持だから。昔の余けいが。ありそふなもんだと。ねつから増がこない　林「ハテな　太九「それからどふした　鉄「そこで地蔵さまが。天窓をかいて　太九「どふだ〳〵　鉄「まことに是ハ。地蔵そんだトおつしやつた　太九「それからどふした　鉄「まづ今日ハ是ぎり。テ

んをさらけ出して。引付合たところハ。豊國か国芳が。繪の様だつたろふ。畜類め　おさる「ヲホヽヽヽヤレ〳〵。それがいなことじやア。ありませんにヲホヽヽヽト早〳〵たつてかつてへゆく　太九「中〳〵気めへのいヽ女だ。おらが一ツぶつちめてやろふか　鉄「ハヽヽヽマアおしづかにといふだろふ　太九「ナゼ〳〵おいらア江戸ツ子の上手があらア　鉄「手がなけりやア化もんだろふ。手が沢山で。色が出来るもんなら。鮹や百足や。千手観音ハ腎虚ばつかりするだろふ　太九「手がある抔といふせりふハ。吉原で二筥も三箱も。山吹色をぶちまけにやア。わからねへこつた。おらが丁でもてた事を。為永春水にでも。書せたくれへなら。まづおらハ。國直が書た。当世男の大通人。おいらんがコレ斯いふ身で。もしへわつちやア。ぬしをおけへしもふしんスと。いつそじれツたくてなりんせん。ほんにこれほど迷ツたこたアおざんせん。どふしんせう。ちつとの別れもかなしふざンすと。おらが膝の上へ。ひしともたれて。玉のやうな涙を。パラ〳〵とこぼしたときやア。可愛そふで嬉しくて。おらも涙をながしながら。うるんだ声を出して。エヽ何もそんなに。あんじることたアねへ。どふか積りをして。此里を根曳となし。世間はれて。女房にするから。爰を十日あまり。辛抱しろといつたら。につこりと笑ツて。ヲヤ〳〵ほんざいますか。そふしておくんなんすなら。身にしミ〴〵と嬉しふおつす。ぬしに一日でも。女房だと。いはれて死ンしやア。極楽往生しんしやうと。夫から互の肌とはだ。合せかゞみのとこの内。しばらく無言の其間ハ。雨となり。雲と成か。作者もしらずたア妙だろふ　鉄「ハヽヽヽヽヽヽヽそんな夢も随分見るもんだ　太九「ナニ夢なもんか　鉄「ゆめでなけりやア。今流行。粋書の切ぬきだア。気の毒なから。おめへの頬じやア。よく〳〵松茸の生ねへ。女護の島へでも。ぶんながされにやア。マア色ごたアむつかしひから。安心しなせへ。男が悪くて金がなくて。有ものハ瘡と借金。といふものだから。ハヽヽヽヽヽ　太九「ヘヽン手めへらア金と頬でなくツちやア。猟がきかねへだろふおいらなざア。女人愛教の御守りといふうまれつきだから。妙に女が。かハへがつてくれるにやアこまりはてる　鉄「マアそふおもつて。気をすませるがいヽト　からかひながら。やうく〳〵とおき出。せつちんへゆきてうづをつかひ。ぜんもすミて。「御客たばこ二三ぷくのんでゐると林十きたりて。「御客さまハ。照〳〵法師とやらでございませふ。今日もまことに能御天気でございます。けふハ此上の方に。金石地蔵さまと申て。石地蔵の御首から。だん〴〵かねに御成なさつて。御手の宝珠と。錫杖などハ。金いろに御変じなさいます。寔に目前の。ふしぎといふハ。

其御地蔵さまでございます。あれを拝見なさつて。夫から御酒でもあがれバ。棚で魚の棚のりやく也ぴん〴〵はね廻る魚を。料理ウさひて。あがつて御ろうじませ。安上りで旨ふて。ほん能ございます。あなたがたア。よろしひ御料理ハ。御江戸で沢山にあがつて御出るケニ　太九「そふさ。旨ひものぢやア松江の鱸を。蘭陵の美酒で焚つめたやつを。蜀の紅生姜にとり合せて。鳳凰の吸ものに。麒麟の蒲ぼこ。虎のころ煎。獅子のきん玉を。すましで喰た男だから。今ぢやア手がるくしたことが吉原ぼうしサ　林「ヱヽアノよし原ぼうしを。どウしてあがります。　太九「あたまからかぶるのサハヽヽヽヽ　林「何をおツしやるハヽヽヽヽ。時に御風呂へめしますか　太九「ナニ今朝アよしやせふ。

宮島土産初編拾遺之序

総てものゝ満たるハ欠。十分なるハこぼるゝと。花ハ未開紅を愛。酒ハ醉のすこしきをたのしむ。十方舎先生。彼過て及ばざらんことの謗を怖れて。宮じまミやげもそこ〳〵に話のこし。御島まハりに。洲屋の餅も喰さして。岩國へ。一足飛とせられし横着を。或人難じて曰。遥々の海路を経て。たま〳〵参詣せし人の。見遺し名所最多し。閲者の遺憾ならずや。先生の等閑甚しと。時に親玉。天窓を揺。コイツハ一番。あやまりこの。とろゝ汁。さら〳〵とかきこんで。責をふさぎの餐腹も。一時の間に一冊もの。疾によきハ泣ふより。わらべすかしの御手遊。鹿と猿との愛教もの。土でひねツた趣向ハなくとも。本の御まけの品なれば。あしき所ハ御辛抱とチョツト爰等へ罷出て

壬子如月　　門人　五方舎半丸述

附言

宮島ミやげ嗣編目に。御島廻りも中途にして。岩國へ飛だ咄しとなり。宮島ハ見のこしたる事のミなれバ。初編の附録をものしてよと。書肆のもとめに呑こみ山。高のしれたる一冊なれバ。是にも中〳〵つくされねど。目前にのこる所ほど。ちよいとつまんで一ぷくの。多葉粉の代ほど。ぶつちめんと。厂首かたむけスッパ〳〵。すつぱり書た急作なれバ。其気で皆様御一覧下さいましと

御馴染の　一丸自ら謹でしるす

滑稽道中　宮島土産初編之拾遺

浪花　十方舎一丸著

歌人ハ居ながら。名所を尻のいたさ堪て。秋風ぞ吹。白川の関とこじつけたる。能因法師ハ不風流ものだと。真実に日にやけたる上。汐風に迄揉れて。顔も手足も赤黒く。鼻毛とゝもに。長旅にやつれたるを。自ら色男ぶりて。旅籠屋の婢女や合宿の後家に這かけて。追ちらされ。あての槌を外し。いつでも。すこたんをやらかしながら。旅の恥とふんどしハ。かくが男の役まへなりと。はづかしひことハ生得。しらミ絞りの手拭に。直なる道もよこ鉢巻。坊主にあらねど。ねつからしまりなき。彼東都の騒客。太九郎兵衛鉄七の両士ハ。宿主林十が。山の神の離別に。腹の皮をよぢり。又おさると。わりなき中を羨ミながら。是非なくてん〳〵に。膝ツ小僧を抱寝に。夜を明して。寝所からぐつとのびをしながら太九郎兵へ「鉄公おきねへか。モウ昼だが　鉄「アツアゝゝゝゝ引もふ明たか。なん妙法蓮陀仏。太九さん火がありやすか　太九「イヤまだ火はなしの切口だトてを火を一ツかしてくんなせへおさる「お早ふございます。御火を上ませふ太九「是ハ御馳走〳〵。どふだおさる坊。ゆふべハモウ世間はれてたのしんだろふ　おさる「ヲホゝゝゝ何をいゝなさいます。めづらしふもない　鉄「イヤそふでもあるめへ。かミさ

太九「ヘン馬鹿をいつてくれな。おいらアこれでも。江戸の吉原で小紫といふ。一番のおいらんに。可愛がられたおとこだ　林「ハヽアそんなら。平井権八といふハ。あなたの事でございますか　太九「わつちとも〳〵　林「それハ〳〵。小むらさき殿ハ。お達者でございますか　太九「随分たつしやで居やす　林「幡随長兵衛さんハ　太九「これも息災でさ　林「唐犬の十さんハ　太九「たつしや〳〵　林「寺西氏ハ　太九「相かハらずサ　林「そふしてアノ何ハ　太九「何も息災　鉄「ハヽヽヽヽ　林十「イヤはや平井権八も世がすへになると。それがいにも。不男になるものか。ハヽヽヽ気のどくや。ワハヽヽヽ　太九「イヤ是でも。廿年も前ハ。女の惚るにハこまつた　鉄「こつちから惚て。こまつたのだろふ。アノ顔じやアちつと商ひがむつかしいからハヽヽヽヽ　林「ハヽヽヽアハヽヽヽヽ　太九「なんとでもいやアがれハヽヽヽト打興じ行と。程なく大元のやしろにいたる祭神ハ國常立尊　大山祇神　合殿にハ　佐伯鞍職ハ此佐伯くらもとゝいへる当島の地主なるよし　此所の桜花ハ。八景の一ツにして。数百本のさくら。梢をまじへて。盛りをあらそひ。咲ミだれたるありさまハ。言葉にものべがたく。雪か雲かと。うたがふばかりなるに。太九郎兵衛

此神の社も遺うづむほど
名におふもとの花の白雲

鉄七もおなじく

かしこくも春に富ぬる神垣の
道も梢もはなのしろかね

それより。すこしの山越して。網の浦といへるにいたる。爰に浅黄桜一株ありて名高し。両個ハ是を仰ぎ見て太九郎兵へ

むらさきの霞の絹を引わけて
ざつと浅黄のさくらひともと

鉄「奇妙〳〵。時にうかんだ

水色の桜の咲もことハりや
かすミの曳る網のうらとて

偖今宵ハ。新町へしけこまんと。本町さして急ぎかへりぬ

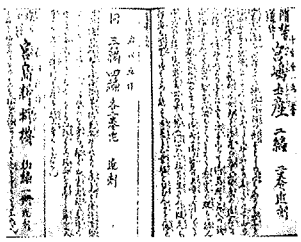
滑稽道中宮島土産初編下之巻大尾

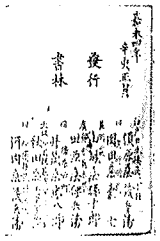
跋

我師一丸先生ハ。故人一九大先生の遺弟にして。能其骨肉を得。滑稽稗史ハ今海内。此先生の。右に出るもの更になし。されど遺に才の。満れば欠陶に。小半酒の貯もなく。原り下戸にあなれど。建られたる蔵ハ猶更なし。唯戯作と。書画の才。乏しからざるを。些の心やりにして。朝夕筆を嘗。机の俎に憂身を扮して。さし身にあらぬ。此書を作り設けられたり。予そつと手をだして味をきくに。口あたり頗柔和にして。辛子酢の利目に。涙をこぼし。腹を抱へて。忽ち其所へ絶倒せり。そこでもつて。コイツハ先生。世界の看官に。一番鼻を。つまらせてやんなせへと。褒言たてゝ。予も此本の臺所に手傳て。堅魚にあらぬ出たらめをかく事しかり

門人

五方舎半丸識





打わらひ。御初穂の箱をかたへにおきてまつと向ふから。斯いふあんばいに。トン〳〵〳〵と走ツて上りなされ。そふするといけるわいなトあがつて見せる　鉄「よし〳〵斯か〳〵

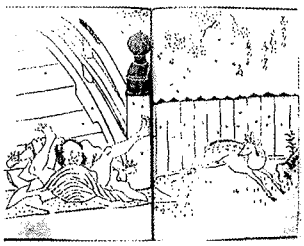
トはるか向ふよりとん〳〵〳〵とはしりてあがりかけた所が。やハりすべりて。思ふやうにあがれず。太九郎兵へまけぬ気になり。おもふさまはしりて上りたるが。上にてとまることかなハず。向ふのかたへすべりおちて。したゝか尻をうち。アイタゝゝゝト。立もあがらず。顔をしかめて。こしをなでゝ居る所へ。林十きたりて。これを　「ハゝゝゝあんまりひどいろ〳〵かいほうなし　ふに。駈りなさつたで。向ふへあまりなさつたハゝゝゝ　太九「ヱゝ何がおかしい。アゝイタイ〳〵トやう〳〵に立ちあがりたるが。とかくこしいたくて。もとのはしへハ上りがたく。御花ばたけを西へハりて。く　「ハゝゝゝどふしたのだ　太九「どふした所か。向ふへあつて腰をぬかしたに。手めへハ不実なもんだ見舞にもこねへ。アゝいまに足も腰も。めり〳〵いふよふだ　鉄「ハゝゝゝいゝ年をして。我慢をやるからよハゝゝゝ〳〵

反橋のそれより鼻を高くして
自慢をすべり落てへこんだ

太九「ヱゝなんとでもいやアがれ

太鼓なりに丸く反橋打辷り

どんとおちたることのはづかしトはてハ打わらひて。是より御厩にいたり。神馬を拝見し。土器に白豆のもりたるを。一文ヅゝにて神馬に飼ふを。十銭ばかりはづミて。是を見物し　此神馬毛色はじめ何にても。白く変じることきめうふしぎなりとぞ　林「此御馬様ハ宮じまの人ハかならはじめ真黒でございましたが。ごろうじませ。アノとふり。だん〳〵白ふなつてまいります。明神様ハ。白馬がお好でございます　鉄「わつちらも。馬ハ白くて。肥たやつが乗ごゝろがいゝハゝゝゝゝ



お備への豆を神馬ハ嬉しとや

どん〳〵太鼓うつてよろこふ
爰に見る御馬ばかりか我〳〵も

とにかく豆をねがふ長旅

偖夫より。大元社へ参詣せんと。あとへもどり。松原より。大願寺といへるをぬけて。濱辺をにしへさして行。道すがらハ都て桜多く。かたへハ山。かたへハ海にて。沖ゆく船ハ手にとるごとく。見へわたり。殊にけふハ。空晴長閑にて。自ら心もうきたちてゆく。先のかたに。廣島の金持らしき男。妓女娼婦など大勢引連。ざゞめきゆくを。此三人ハあとにつきて。羨しくこれをきけバ。かの旦那らしきおとこ「アゝ酔ふた〳〵。コリヤけふハ強義に暑ひ。久七その手拭かしてくれひトさしつおさへつのミながらほたへまハり。お〳〵トつかけるやらこけるやら。大さハぎをやりながらだんな「イヤ斯しやう。此中。此石風呂へ。京橋の茂五右が。逗留しておるげなケニ。ちよつくり見舞にいこう。そしてあすこで。一杯大さハぎをやらかそふかい　ミな〳〵「そふなされ〳〵。サアおもしろなつてお出たな。イヤおもしろ狸のはら鼓。セツコノ〳〵〳〵〳〵ちやウ〳〵〳〵ちよツ〳〵〳〵トどるやら。しりをまくるやら。ほたへ〳〵　鉄「ハゝミな〳〵。石風呂へどや〳〵はいるゝゝゝがうせへに。うかれきつて居やアがるハゝゝゝ　太九「でへぶ金を引たくられるだろふ。おしひことを　林「そふいゝなさるが。爰じやア。金を遣ふ人でなけりやア。賢ひ人たアいゝません。其はづ爰ハ皆。客衆のかげでたつ所じやもの。あなたがたも。財布ふるふて。チツトかしこになりなされ。それがいなおかしひ顔でも。忽ち色男になれますに

といふ所をのぼり。右へとりて又のぼりゆくと。塔の岡とて見はらしよき所にいたる。此所より。千畳じき。五重の塔まへに見ゆるなり。偖まへに海上を見ワたし。百千船のゆきこふさまおもしろし。両人もらんかんにもたれてし　太九郎兵衛
バらく打ながめ

愛もまた数の瞻望の一ツにて
十の岡てふ名にや呼けん

鉄七も五層の塔を詠めて

弥高く聳て見ゆる直打ものを
五十の塔となど安くいふ

林「イヤおきやくハ御歌がゑらひ〳〵　鉄「ちよつとか。こんなものサ　林「そんなら。念入ハまた違ひませふ　鉄「ムゝ違ふだんか。此前歳旦の狂歌で。江戸じやア。ひんぬきの高点をとりやした　林「ヘヱそれハなんと申のでございい舛　鉄「マア斯さ

門松ハとしのはじめの青二才
げんぶくあたまはるは来にけり

トやらかしました。コリヤア蜀山風で。何万といふ狂歌の中で。纔ぬけた内の二番目とハゑらかろふ　林「ソリヤアたしか大坂の。十方舎一丸先生の詠うたと聞きましたが　鉄「ナニわつちがやらかしやした。それたから。鼻辺の赤人と書てござりやす　林「ソリヤア彼一丸の別号じやアございませんか　鉄「ちがひ〳〵　林「それハ妙じや。イヤかんしんでございます　トうそとハしりながら。あハしてゐると鉄七ハはなしにうかれて。ねてゐる鹿につきあたりびつくりしてとびのくひやうしに。往来の人にばつたりつきあたるとかの往来もまたびつくりして。何やらん竹の皮につゝたるものをとりおとしたるものを見れバ。あんころもちなり。かの人大きにはらをたておこりけるを林十いろ〳〵とあいさつをなしてかのあんころもちをひろひて。皮へつゝミたれども。うけとらぬゆへ代にてすませ。わかれてゆくを。やうじ店からこれを見て。めひき袖ひきてわらふにぞそふ〳〵爰を過て。くわいろうのこなたなる。家ばなれにて。「ハゝ業さらさらしをしたことだ。マアいまのあんころを出してやらかそふじやアねへか　トまりて。三人立とおの〳〵これをつまミてくひたるが。あんころにハあらで。さいぜんひらひていれたるハ鹿のふんとととりちがへたるなり。ミな〳〵コリヤアもちじやアねへ。ペツ〳〵ペウ〳〵〳〵〳〵〳〵。アゝむねがわるいと。竹のかハをうつちやりて見れバ。鹿のふんゆへ。なを〳〵胸をわるしく。ゲエゝゝゝゝゲロ〳〵〳〵〳〵トそこへけんゑつをやらかし。あらゑひすの手水鉢ペにて。口をそゝぎ。手なとあらひて。やう〳〵ツ〳〵〳〵トつばきをはきながら　太九「イゝめにあハしやアがつた。いめへましい

あんころハあんの外なる鹿の糞
くつたで悪ひこゝろもちなり

鉄「ほんに。とんだめにあハしやアがつた

こハ鹿のふんべつなしと人やミん
くひてかへらぬ餅の間違ひ

トロずさミたるに。やう〳〵笑ひを催し。程なく廻廊の際にいたるまた。爰の手水鉢にて手あらひ漱きて。偖廻廊の片脇に。竹にてしかくのこときものこしらへていくつも箱にいれてあるをとりてこれに履ものを引かけもちて。参ることなり。まつはじめに客人社へ額づき奉る祭神ハ　正哉吾勝々速日天忍穂耳命　天穂日命　天津彦根命　活津彦根命　熊野櫲樟日命　これより本社へ参る都て百八間の廻廊の上より社々の内まで尺地もなく。大小の繪馬掛烈ねて。其数幾千万といふことをしらず。実にかゝる奉額の巨多なる所海内にまたあるべくも思ハれず。大ひなるものハ。二三間のものあり。筆者ハ古代より名ある人々ハ。金岡。古法眼。雪舟探幽常信其外古今に聞たる。書画工の諸家。筆を揮ひて年々歳々に増倍し。中々筆にも紙にも尽しがたし。太九郎兵へ鉄七ハあきれをさまし首を空になして。ながめゆくと頓て御本社にいたる。本殿　市杵島姫尊　湍津姫命　田心姫命　三女の神を奉レ鎮。社頭廣大にして。もの珍勝なることいはんかたなし宿主爰にかの携へたる。御初穂を備へて。神楽を奏し。家内安全。且道中恙きことを祈りて事済舌先にいたり。末社を順拝なし。銅燈籠からかねの高麗狗。高舞臺抔。悉く見巡りそれより反橋にいたる　太九「ヒヤア反橋だな。高ひ〳〵　林「マアひとつ上ツて見なされ　鉄「ホンニこいつハきうだ。ドレ〳〵トあがりかけた所がすべ〳〵と。あがりかけて一ト足もあがれず。太九郎兵へまてあがりかねるを。林十

なる風呂屋にいたる。おもてにハぞうりわらじなど。うる家にて。おくハふろやなり。おもてに。社さん御きよめふろといふ。あんどうかけてあり。此内へはいりてミれハせハき戸たなふろにて。三人ほどヅヽかハり〳〵。はいるなり太九郎兵へ鉄七もかハり〳〵入しまひて。さて此きんじよに。かミゆひ床のあるにはいりて。かミをゆひ銭をはらひて立いで。あたまの曲をなぶりながら　太九「アヽさつぱりといヽ男ぶりになつた　鉄「悪ひ男になつたがあきれらア　ト かへる道にて。向ふより　あたまの上に。平たき桶をいたゞき小つまをからけて。若き女の。大きな尻をふりながら　「蛸ヲ買ツしやらんかア。赤貝ハいりませんか　太九「ハヽヽヽおんなが蛸や。赤貝をうるから大笑ひだおさる「おさかな。買なさいませんか。安ふござんすが　鉄「ほんに美しものが。さかなを售たアめづらしい。太九さん何ぞ。買て往ふじやアねへか　太九「なぐさミに。一ツ見よふか　女あきんど「だんなさん買ておくれ。負てをくに。赤貝も肖魚も生ており舛　鉄「いつそのことおめへの。鮹か赤貝をうつてくれヽバいヽ　商人「ヲホヽヽヽわたしの鮹ハ。腐ておりますにヲホヽヽヽ　太九「イヤ此あねへハ。とんだ手のことをいふから。手のある鮹魚を買て遣ろふトいふうちおんなハ。あたまからおけをおろしてミせると。あれこれなぶりまハして　「これでいくらだ　おんな「かけにやアいヽません。三百くんなアれ　鉄「たけへ〳〵おんな「高ふハありませんに　太九「マアよしにせふ　おんな「御客さんまけりやア安ふ成に。何ぼふに買なはる　鉄「まけて高くならねへで仕合だ。太九さんどふする　太九「せつかく。姉へがミせたから。ぐつと安く。まけて三ツの三之助としたら。マア甲斐の信玄とせふが。どふしてくれる　おんな「ヱヽそんなら直ぎらツしやんな。百八十にまけて置ませふ　太九「高へ〳〵。雀なら買て遣ろふ　おんな「雀たアしりませんに　鉄「すゞめ百までといふ晒落だ。まけさつせへ　あきんど「ヲホヽヽむごひ事ヲいはつしやるそれじやア元へきれるに。百五十くれなはれ　太九「モウそれよりやア屁もでねへ〳〵　おんな「ヱヽハ損がいくがまけて上やう　太九「イヤ〳〵商人が損をしてなんでくへるもんだ。それじやア気のどくだ。マアやめあミだぶつ〳〵　おんな「ハテゑヽわいの。買てくんなはれ。損をするも商ひ。儲る商ひの道じやに。わしやアおまいがたに惚たケニ。損をしても腹アたちませんヲホヽヽヽ　鉄「へヽおつにはぐらかすのハヽヽヽ　太九「それ百ころり　おんな「ヨウ買ふてくれなはつた　太九「コリヤアしかし縄でもほしいもんだトあたりにて。縄のきれをひらひきたりてくんねへ。ヒヤア生て這回るハハヽヽヽ。此あねへに。こんなに吸ついてほしいもんだ

女「いつそ。わしが此歯で。喰ついて上ふかヲホヽヽヽ　鉄「ハヽヽヽよくしやれらア　女「サア斯して持て遊なされ。よふ買てくんなはつたト 尻をふつてさつ〳〵とかへる　太九「アノ尻をふるざまハワハヽヽヽ　鉄「あんなに尻をふつて。夜ハ亭主を。うれしがらせるだろふ。畜生め。　太九「ハヽヽヽヽいろ〳〵な。焼餅をやかア。ハヽヽヽヽト かのたこをさげて宿へかへり。すり鉢をかりて。その中へいれ。合利をふたにして片わきへ直し置「サア斯しておきやアヽ大丈夫だ。時に御宮へめへろうかト 手をたヽよりていしゆくと勝手いできたりて　「およびなさいましたか　太九「明神さまへ。参詣してへが。案内者でもたのミやす　亭主「ヘイかしこまりました。ヱヽ御初穂でもお上ケなさいますか　鉄「ナニ明神さまハ。精進じやアなしかね　亭主「なひて。そふおつしやいます　鉄「鰹をあげろと。いヽなさるから　亭主「ハヽヽヽ御初穂と申ました　鉄「ハヽア尾上さんのめしつけへの亭「ワハヽヽ左様なら。支度いたして出かけませふトしまのきものヽ上へ。継裃を着し。ふたのあるひらたき箱へおはつほのつヽミをいれ亭主先にたちてサア御出なさいませト打つれて本町をすぐにかな鳥居

て。腎をチト補ひましやう。そふしてきさまをよろこばす　おさる「はやふたのミなされ　林「イヤまだある。中嶋本町の世並屋で右の本もとりよせたい　おさる「ヲホヽヽヽヽ　林「マアそれでゑゝか　おさる「マアそれがいなもんでございませふ　林「そんなら帖を〆ルぞ　トさし向ひに。ひそ〳〵とはなしてゐるおかしさ。太九郎兵へ鉄七ハさいぜんより。ふすまのあいたから。のぞきてきゝいたりしが。あまりのおかしさに。クツ〳〵〳〵トふきだして笑ふひやうしに。とりはづして。屁をブウ〳〵〳〵〳〵トひりだしいよ〳〵これにこたへかねて。ワハヽヽヽヽハヽヽヽアハヽヽヽトわらひたしたるに。林十もおさるもひつくりして。おさるハそう〳〵かつてへ。にげてはいると。林十まつかになりて。これもかつて　腹を抱へてへにげてしもふと二人ハいよ〳〵　太九「ヤレ〳〵おかしや。ワハヽヽヽヽハヽヽヽヽ何國でも色の道ばかりハ。すたらぬものだ。アヽ腹が突張て来たハヽヽヽ〳〵〳〵〳〵　鉄「きめう〳〵ハヽヽヽヽ〳〵〳〵。ホンニ小便をするにも。屁が出ると幕切だが。ちハ咄しも。屁で段ぎりとハ大わらひ〳〵

おのが身をくさしとしりの穴おかし
屁にちらされて逃た二人ハ

太九郎兵へも笑ひながら

げに是も縁のものとて屁の音に
皆いもにげにせしもおかしや

ト打わらひて。これもミやげのたねと。旅日誌へかきつけてゐると。やがておさる顔まつかいにして。ひるめしの膳もちきたり。はづかしそふに袖をおほひて　「御膳をおあがりなさいませ　太九「イヤ膳より。飯と菜を喰やせふ。時にさつきハ。強勢いりくんだな　おさる「ヲホヽヽヽ何ウいりくミませふヲヽヽヽ　鉄「とふ〳〵爰の山の神をさらけ出して。直にあとへおかミさんといふ。反逆を企たから。チツト狂言の筋が大芝居だ。アヽおいらもチツト。あやかりたいの味噌酢としてへハヽヽヽ。ノウ太九さん　太九「ムヽそふよ。全体マアおめへハ。今花なら中開きぐれへだに。アノ爰の宿六の薬鑵あたまの上に。たんこぶの蓋が有て。歯くそだらけな親父。チツト不釣合だぜ。いつそおいらと相談をきめちやア。どふだ秀郷〳〵　おさる「ヲホヽヽヽよふ悪サアいゝなさんす。それよりあなたがたア。新町へ往つて。女郎を買なされ。爰ハ雑用ぐるめ拾七匁でござんサア。ほん安いに　鉄「そいつハ安井の天神だ。しかし田舎女郎だから。這出のよふで色気があるめへ　おさる「何ウいゝなさんす。そねへなことじやアありません。天人の様なばつかしじやに。なんなら爰の内へでもよバれます　太九「それハめうだの一ト踊り。鉄公久しふりで。奢判官車街道といふ場ハどふだス　鉄「夫こそヨイ〳〵よいやアサア。ツンシヤン　トおどるまねをする

おさる「ヲホヽヽヽ〳〵〳〵〳〵ヤレ〳〵ごふいふマア。おかしいお人かいのふヲヽホヽヽヽ　鉄「イヤよく笑ふのハヽヽヽヽよく笑ひハ節分に来ねへ。一丸子が大坂でこしれへた俄の中に。よく笑ひましたよとやつたハ。手軽くてよかつた　太九「ソリヤアいゝが。マア女郎買ハあとの狂言にして。御宮巡りといふ点にしやうじやアねへか　鉄「そふだ〳〵。しのぶの惣太　太九「マア風呂も結たし。髪もいりてへが。何所ぞ爰らに。床と風呂と兼帯といふ所ハねへか　おさる「此中濱のふろやと床の兵太さんと。喧嘩がありましたに　太九「ハヽヽヽ間違〳〵　鉄「こいつアよく出来だアハヽヽヽ。此間違ひわからずつかりしてゐる　おさる「ばんにやア爰にも焚ますが。なんならツイ。その濱に風呂屋がございんす。おしへて上ませふか　太九「御苦労ながら。たのミやせふ。そふしてから。明神さまへ。御礼申て来るとせふ。ノウ鉄七　鉄「それが肝じん要之助だ　トやがてめしもくひしまひて。たばこのんでゐると。おさるきたりて。おふろへおともいたしませふといふに。二人ハ下駄をかりて。ついてゆくと。やがて濱邊

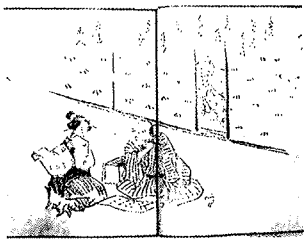
滑稽道中

宮島ミやげ初編下巻

浪花　十方舎一丸　著

林十ハ女房のあとを見送り。内へ這入て「あいつめも。古ひ馴染じやが。額のたんこぶが。チツト家風に向んで。手ばなした。是からおさるめと。たのしミませふ。ヱヽトまづ此壱貫目で。槌屋の化の戸めが。能々出たいケニどふぞ出してくれいと。せがミよつた。そふするとマア金もふるの褞と。帯を一ツ。質屋から出すと　毎年三月に神事能ありて新町の娼婦。よき客あるものハ。衣しやうきらをかざりうちかけに美をつくして。　そふして。米屋の見ぶつに出るを全盛とせり　俵七がかたへ。拾六匁五分。棚の肴代が二十目あまりと。それから紺の紋つきの布子が。流るちうて来た。あいつ利上を彼是拾匁あまり出スト。そして時借の百目を。あゝして斯して。よし〳〵。ハヽヽヽ百の銭おとしたやうに思ふたが。アノ疵ものを手放して。大ぶん儲ツた。嬉しや〳〵ト胸ざん用しながら。ひとりよろこんでゐる所へ。おさる出きたり　「旦那さん。是から私ウ女房にしてくれなイますか　林「ムゝしれた事そのつもりじやに　おさる「そんならアノ。どふぞわたしにびいどろ鏡ウ一ツ買ふてくれなされ　林「ムゝよし〳〵。廣嶋へ便にいふて遣ろふ

おさる「そふしてアノ。生おしろい一箱　林「なんなりとも　おさる「そんなら紙の曲くゝり一かけ　林「ヲイ〳〵　おさる「焼杉の木履一そく　林「よし〳〵　おさる「びんろうじの襟一かけ　林「ヲツト待たり〳〵。そふ数がゐつとじやア。わしわすれるずらア。書付にせふ。其硯ばこかしてくれトすゞり引よせひとつ〴〵かきたてゝよんで見せ



ソリヤ是でゐゝか　おさる「それから　林「イヤまだか　おさる「富が出たら札をくれなさるか　林「やらいで〳〵。十貫目ヲとつたら。一チ割やる　おさる「ヤレ〳〵嬉しやそんなら旦那さん。どふぞアノ手紙ウ一ツ。かいて呉なされ。晩の船びんにいふて遣つて。花染のいもじと。紺の紋附の布子とを。受て囉ひとふござんす。　林「よし〳〵書てやろふ。しかしまて〳〵。まだかんじんの富がわからぬ　おさる「それでも。手廻しでゐゝに　林「イヤ〳〵。馬鹿アいふな。あんまり手廻し過る。マア富がすんでからにせい。今度ハ能気あたりがある。大かた親か加札かゞ出るに違いない嬉しひか

おさる「うれしふござんす　林「扨マアきさまとわしハ。不斗したことから。深ひ中となつて。その腹へどふやら借銭の玉子を。やどしたといふもの。それに嬶アめが。歯くそだらけな兀天窓にあき果。どふぞ何所ぞへ。ほくり出して仕まいたいと思ふても。あいつにハチツトわし恩があつて。どふも無理なことも仕にくひと思ふたに。丁度道楽院の和尚がアノしミたれ嬶アに涎れを流して。おらが留主にやアうせて。おかしなことヲすると。こんたの咄し。いか様気をつけて見りやア。まんまと間夫しおつたを幸にこんたと女夫に。なりたいばつかりで。金を借徳にして追出して仕もふた。晩からハ貴様が爰のおがうさんじや。嬉しひか〳〵廣しまことバに。人の妻をさしておがうさんといふ字義未考　おさる「嬉しふございます　林「きさまとわしと。ヱヽかうツト。丁度わしが四十三程多ひ譬にも年増可愛がるといふ事がある。是から私が子のやうに。可愛がるぞ　おさる「ソリヤア何より嬉しうございんす　林「大坂へ次手があつたら新町橋の四目屋ぐすりを注文せふ　おさる「うれしふございます　林「玉子ハ此中買ておいた　おさる「精出してあがりませ　林「廣島へ茂蔵往とき。井筒屋てねり薬を買ふ

わい　女房「わし深切はじめに吸つけて上ふ。スツパ〳〵　和尚「コリヤ嬉しひ。わし。今年六十八になるが。はじめての嬶じや。可愛がるぞ。　林十「よろしふねがひます。和尚さまと嬶アとハ。四十二三もちがひますケニ。たつた今腎虚しなさる。そしたらまた戻て来い　和尚「ほんに其時ハたのミます。さらバおいとま申そふ　林十「コリヤ何もお愛想がない　女房「そんなら林十さん。もふ往ます　林十「随ぶんとも。まめなやうにせい。コリヤアどふやら。百の銭おとしたよふなト名ごりおしげに見おくるを　太九郎兵へ鉄七ハ。のぞき見していたりしが。吹いだし　太九「ワハヽヽヽハヽヽヽ旅をすりやア。いろ〳〵な頓ちきに。出逢ふもんだ。しかし。爰の宿六も。如才もなくつて。アノ化ものを。壱貫目に賣つけるとハ。いヽ千恵を出したハヽヽヽヽ　鉄「大かた今宵ハアノ。おさるめと。うるさく。ねばりつくだろふ。ちくしやうめ。こてへられねへハヽヽヽ。時に太九さん斯もあろふか

たとへとハあちらこちから女房を
里から寺へ棒にふりうり

太九「ハヽヽヽヽおもしろ狸〳〵
乗かへる牛を馬にハあらずして

おさるハめでたふあとへのこつた
ト例のこじつけをやらかし。猶ものぞきて。
聞居たりける

滑稽道中宮島美也毛上巻終

がつた。今出ていけ。イヤまた此お坊さんも。お坊さんしや。ゑゝもの好な。あいつめが。薬鑵あたまの上に。團栗眼で。歯ハ向ふの。赤崎まで。とゞくくらひか。夫にいつでも。炭の上へ雪のふつたよふに。かねよウ兀して。そして目くそだらけで。もふ〳〵見るのもけたいが悪ひ。和尚さんイヤ和尚めサアのしウつけて遣る。きり〳〵つれて遊ちやア　和尚「ソリヤありがたひ。つれても遊ふが。マア短気をおこしてくれまいテヤ。おら貴公に咄しがあるに　林「イヤ〳〵咄しも。すりこ木もあるものか。トたもら文を出して見せこれ此文ウ拾ふて置た。よんで聞そふトいふに。和尚これを見れバ。此間こゝの女房へおこしたる。おぼへの文ゆへ。大におどろき「イヤそれ讀れてハ面目ない　女房「こつちへおこさつしやい　林「馬鹿アぬかせこれが證拠じやトもつてにげ。ひろけてよミかける所へのさり〳〵と大きな鹿一疋。はいりたるにきがつかず。ありたけひ「ヱゝ何じやろけてよミかける

一筆申入候。せんもじハよふぞや又。そのふしハ。御しんもじにかけられ。ぼた餅一重。惣太郎漬一ト桶おくりくたされ忝く候　いまに〳〵味わすれがたく歓入候　右御礼として白木綿六尺湯もじにともとめ置候をしんしまいらせ候　扨また小遣ひ入候よし御申こしに付銀札卅匁つかひへわたししんしまいらせ候　慥に御入手下されたく候

一、せんたくもの候ハゞ。さしこし候へとの御事忝く御せもじながら此越中ふんどし一筋急〳〵たのミ入候　此節いんきんにてことの外あしきかざいたし御気毒にぞんじ候　よろしく頼入候

「ヱゝこれきたない。特鼻褌の。せんたく迄しやアがるとハ。イヤハヤ腹のたつ　和尚「コリヤ悪ひ所へ来合した。消たひよふな。マア又参ろふ　林十「イヤ〳〵遊すことハならぬぞ。此あとが性根場じや　女房「情ないもふ〳〵よまずと。了簡さつしやい　和尚「ホンニ愚僧がたのミじや。おがむ〳〵　林十「わしまだ。生きておるに坊さまにおがまれる法がない。ソリヤよむぞ　女房「もふゑゝといふに　林「イヤ〳〵おらがわるひトくりかへし〳〵よんでゐるを。さいぜん鹿これをミるより。引くハへてメジヤリ〳〵とくつてしまふ亭びつくりして　林「バアチヤア此鹿めやア。大事の文句を喰アがつた

和尚「ハゝゝゝこりや嬉しひハゝゝゝゝ〳〵女房「ほんにゑゝ鹿じや。うれしやヲホゝゝゝ林十「コリヤもふ。いよ〳〵了簡が出来ん。御役所へ願ふて。腹へいれる　和しやう「ハテマアおこるこたアない。貴公此中手紙ウおこしたが。あのことを聞て遣ろふ　林十「あの事を聞てくれなさるか　和尚「了簡するか　林「右のことさへ叶ヤア。嬶アハのしをつけて。イヤ昆布をつけて。和尚へ奇進します　和尚「そりやほんかい　林「弥山の狗ひんさまへかけて。偽りハござらぬ　和尚「ソリヤ近頃かたじけない。わし年がよつて気かミじかい。今から貰ふて遊たい　林「ソリヤ侭になされ。そして御無心申たものハ　和尚「ヲゝそれも持て来たてやト小僧にもたせたるふろしきづゝミをほどきて。銀札壱貫目とりいだし「ソリヤ壱貫目無證文で。貸て進る　林「かたじけのふございます。内の者ハ。勝手に連て御帰りませ。コリヤ〳〵お蔦ヤイ。けふから道楽院の和尚さまを。ねんごろにせい。ヱゝソリヤ笄がいがんでおる。髪も撫つけて。イヤまだ前歯が兀ておる。繕ふておかつしやい。コリヤア和尚さま。丁度わしが娘を。嫁入をさすよふで世話がやけて成ませんハゝゝゝ　和尚「そふで〳〵。時に祝ふて一ぷくせふ

て。うつかりしておる所ヲ。イヤ此放蕩おやぢめ。イヤ猫親父め。よふも〳〵西連の。ふるつく女に。鼻と涎だれと。一緒にたれやアがつた。是みやアがれと。ほところから。がらりいまの剃刀ウ出て。曲のねから髪ウきつてしまひました　鉄「アハヽヽヽおもしろへ〳〵　太九「ハヽヽヽヽ爰の宿六どのハ。中〳〵色事師だ。おいらアあやかりてへ。ハヽアそれであたまへ。手拭をまいてゐるのだなおさる「そふでございますヲホヽヽヽ　太九「そふすると。さし向かミさんが。四人あろふといふものだな　おさる「わたしとも。四人ちうもんでござんサア。それにまだ〳〵。どこやかしこで。つまミ喰ハ。なんぼうちう。数かぎりハ有ませんにヲホヽヽヽ　鉄「まだ外でも。そんなことがありやすか　おさる「ござんすだんか。いつぞやらハ。瀧小路の。ばく蓮さんちう。七十ばかしの尼さんともありました。其びくにさんが陽気もんで。皺だらけな顔へ。おしろいを。白壁のやうにつけて。あたまへハ。かんざしを女郎衆ほどさいて。マア端手なといふたら〳〵　太九「ハヽヽヽおめへたつた今比久尼だといつたじやアねへか。夫に笄をどこへ指ものだ　おさる「ヤレ〳〵指だんか　鉄「どうして〳〵　おさる「あたまへ。びんろうじの。木綿頭巾を被て　鉄「ワハヽヽヽヽハヽヽヽ　太九「ハヽヽヽヽ奇妙きんちやく毛銅乱だ。アハヽヽヽ〳〵〳〵トてうしにのつて。はなしてゐる所へ。かつてより。亭主出きたりて　「ヱヽおさるハ。何ウごてくさと。咄しウするのじや。早ふこつちへ来て。いんまいふた事ウせんかいトにらミつけて。勝手へゆくと。林十が女房。火吹竹にて。横づらをしたヽかはりたをすとびつくりして「アイタヽヽヽ。こりやどふするのじや　女房「ヱヽどふするも。味噌もあつたもんか。わしもとふから。それがいな事であろふと思ふた。女郎から藝子から。お比丘尼じやの。なんのかのと。そこら中撫まハして。今もいまと。おさるがお客の所で。チツト咄しうすると。直にもふ焼もち。腹がたつて〳〵。搔むしりたい。そして此中から。風を引たと。あたまへ。手ぬぐひを巻て。ござつしやるが。どふも風声でないと思ふたが。案の定。いま立ぎヽをしたら。新まちの惣嫁めに髪ウきられたちうことじや。ドレ天窓ア見せさつしやいトてぬぐひをとりにかヽると　林「ヤレまア。そふいふてくれな。これにやアだん〳〵訳の有ことじや　女房「ヱヽ訳も杓子もあるものか。女房の持来た。着もん迄質に置て。よふマア女なげきウしやがつたトいヽかけると林十。女房の口をおさへて。もふい　「ヱヽふてくれなと。仕かたをして見せるに。女房ハはらのたつまヽいさいかまハずなんじや。いふて呉な。いふて悪かア。なひて悪ひことをしやアがつた。おどれがよふな。放蕩者が。廣ひ廣しまにも。唐にも天竺にも林十「わしが悪ひ。モウいふてくれな。どれがいにも誤る。堪へてくれい　女房「イヤ〳〵挾ひ廣島にも。廣ひ　林十「ハテもふ。いふてくれなといふに　女房「そして。日本國にもあるもんか。此唐人めが　トつかミかヽる所へ。宗の住持とミへて。真言七十ばかりなる。もつたいらしきぼんさま。小僧一人つれて。此内へいりきたると。此女房にハかに。けしきを直し。にこ〳〵　「道楽院さまよふ御出ましたとして出むかひ　和向「イヤどふか。とりこミらしい　女房「ヲホヽヽヽイヱなんにも。ヲホヽヽヽヽ。マア裏ざしきへ参りませふトこの時林十ハ。あいさつもせず。ふくれかへつて居たりしが。やがて女房を。庭へとつてほふりつけ　林十「おどれ。今迄ハマア馬鹿になつて。しらん顔を仕ておつたが。もふ了簡がならんぞ。此坊主おとしめが　女房「いつわしが。坊主を。どこからおとした　林十「へヽしるまいとおもやアがるか。どふもおらが。合点がいかんと。思ふておつたが。きんにやう。おどれが袂から。此文ウおとしやアがつたを。うらが拾ふて置たア。よふも〳〵わしが顔へ泥ヲぬれア

時をねらつて来たのだ。どふだ心いきが嬉しかろふハヽヽヽ　おさる「ヤレ〳〵そふでございますか。深切なヲホヽヽヽ。ほんまに。市に御出ちやア。ものもろく〳〵いはれませんぱり爰の産れか。余所から来て居なさるか　太九「そふだろふ〳〵。そしておめへハ。やつ　おさる「わたしやア。此向ふの地の御前ちう所から。来ております。去年の六月市に。是の内へ。ほうえんごきに来てから。いまにおります　てつ「なんだ。宝永祭りハ見ごとなものよ。誰ヱも来て見よといふ。祭りに来たのか　おさる「ヲホヽヽヽ〳〵。よふ漂戯なさる　太九「イヤそれでもおめへ。たつた今。宝永まつりとか。いつたじやアねへか　おさる「ヲホヽホヽヽ宝永まつりじやアございません。ほうえんごきじやにヲホヽヽヽ此ほうえんごきといへるハ。宮じまにて。六月市にやとひたる人をさしていへること也。法廷うごきといへるにや未考　てつ「なんだかさつぱり。わから子丑寅卯辰巳イ午だ　太九「ほうえんごきでも。唐変朴でもかまふこたアねへ。晩にちつと咄しが有馬筆だ。此男が寝たらちよつと。ナ。よしか。間違めへぞ　おさる「ありがたふございますヲホヽヽヽ。げにいろ〳〵なことヲ。いふて遣アさんな。爰のこれがトおやゆびをだしてミせ悠気深ひ人でおこりますに　鉄「爰の内にやア。かミさんハなしか　おさる「ありますが。一人じやアたりませんげな　鉄「そいつア。とんだくれへぬけだ　おさる「それに。爰の西連の。藝子さんと馴染で。死るの生るのと。此間おふもめがございました　太九「きめうだ　おさる「それにまだ。

新町の化の戸殿ちう。女郎衆と色ごとヲして。女房になれなろふといふ。深ひ中でございんずに。また外の藝子に。金弥さんちう。能女房と。大佛の原で。おかしなことをされたを。がらり化の戸さんがきゝつけて。腹アたてゝ。わしが男を。よふとりやアがつた憎ひ奴じやと。強ぎにおこつてから。剃刀ウほ懐ところへかくひて。何が尻ウ引かゝげて。駈つて往て。アノ金弥さんに逢たいと。よびだしましたげな　鉄「ハテナそいつハ面黒ひ。それからどふした　おさる「そふするときん弥さんハ。寄衆どもが。あひに来てじやと思ふて何気のふ出る所ヲ引つかまへて。ヱゝ此金弥の惣嫁めやアおどれ。よふも〳〵わしが大事の男ウ。とりやアがつたちうて。がらりほところから。剃刀ウ出ひて。髪ウきるやら。鼻あ落すやら大騒動。それから金弥さんが。泣〳〵いふにやア。どふもわしが悪ひケニ。仕かたハないか。鼻をおとされちやア。はなハだ迷惑じや。あとからはへもすまいし。と泣〳〵そこらぢう尋て。よふ〳〵鼻の先ウ拾ふて。継でから。あたまへハ手拭を巻て。遊で寝たら。其晩にその鼻を鼠がかぢるケニ。ふしぎなことじやと。金弥さんがいろふて見たら。大根のきれでありましたけな。ヲホヽホヽヽヽヽ　二人「ワハヽヽハヽヽヽ奇妙〳〵ハヽヽヽハヽヽヽ。それからどふした　おさる「それから化の戸さんが。まだ〳〵次手に楊枝屋の林十めも。仕やうがあると。爰の内へ禿をおこひていふにやア。あの林十さんちよいと来てくれなさい。急用があるちうもんじやケニ。なんの事であろふ。ハヽア此中柳井の客衆が。あいめに強義に。のぼしておるちうことじや。それについて。チツトわし無心をいふてくれいと。頼で置たが。大かたその金ヲ。もろふて呉たのであろふ。嬉しやちうて。草履もろく〳〵履ずに。飛で往て。どふじや能はなしたア。どふいふことじや。例の下の客衆に。金でももろふてくれたか。ヤレ〳〵無心配であつたろふと。調子にのつ

の。誰じやいな。めつそふなト立どまりてつぶやくをミれバ。はたちばかりのおんなミへてとんだ美しものなり　鉄「ホイ堪忍しなせへこれハ〳〵げいしや。上がたものと　太九「ハゝゝゝいゝ業さらしだハゝゝゝ　鉄「業さらしでもいゝ。あんな美しひだぼに突あたりやア本望だア　太九「ハゝゝゝそれでもこんな目つきで。白眼つかつたから大わらひたハゝゝゝ

たまげたる鹿よりハまた上こして
角めだちたるおんなをそろし

宿「コリヤよふ出けましたハゝゝゝ今の藝子ハ上がたもので。西連じやア一二の流行ものでございます　西れんといへる所にたびけいしや店出してゐる也　鉄「ナニはやりものといやア。病ひ神が聞てあきれらア　太九「悪くいふのハゝゝゝ　鉄「江戸しやア。あんな藝者なら百に五枚といふしろものだア。べらぼうめへ。　宿「ヱゝアノ江戸じやア。あのくらいな藝子を。銭百に五人もくれますか　鉄「くれるだんか　宿「ソリヤめうじや。わしやアちつと銭ウ持て江戸へ往て。藝子買ふて儲けたいもんじや　鉄「それがいゝ。そして徳なことにやア。おまんまもくハず。着ものも破れるまで。着たまゝといふもんだ　宿「ソリヤ猶ゑゝあんばいじや

鉄「そふして。道中ハくる〳〵巻にして。柳合利のはしへでも。入てもどれるから御調法　宿「ハゝゝゝそりや江戸繪のことでございませふ　鉄「にしき繪〳〵フハゝゝゝ　宿「大かた。それがいなことであろふと思ひました。アハゝゝゝ〳〵　太九「悪くしやれらアハゝゝゝトゆき〳〵て。やがて本町なる我内の門口にいたると。さきにたちて　林「ヨイ〳〵おさるヤア〳〵。御客さまじや。おすゝぎもてこい　両人「イヤ〳〵足ハ奇麗だからあとで風呂と晒落やしやう　林「爰にやア。生た風呂アございませんが　太九「ナせ〳〵　林「それでもあなた。風呂としやれふとおつしやつたケニ。わたしやアまたアノふろと漂戯なさるかとぞんじました　太九「ハゝゝゝいろ〳〵な。言葉とがめヲすらアハゝゝゝ下女お「どなたもお早ふございますトいふを見さるれバ。しハ十八九にて中〳〵のうつくしもの二人ハにこ〳〵ものにてが。はやく見てへと思つて。けふも帆ばしらア立づめで。走りやした　おさる「ヲホゝゝゝ御深切な　太九「それだから。魚こゝろあれバ水心ありだ。女衆。後程逢ふト鉄がだけの身ぶりにて奥へと　おさる「ヲホゝゝヤレおかしや。おもしろひ御客さんじや。ヲホゝゝゝ。もし〳〵その座敷へ御通りなさいませ　太九「ヲツト爰か。よし〳〵　鉄「ソレ太九さん草鞋もとらねへで居らア。ハゝゝゝ　太九「ホイ是ハしたりトそふ〳〵わらじをときて。うらのゑんバたへほふりだしきやはんかうがけを。ふるつて一緒にくゝり頓てかの。おさる茶をふたつ汲でもておくとち来たり　「おちやあがりませ　鉄「ナニとんだことをいふ。何所からおつこちるのだおさる「ヲホゝゝゝ何所からも。落なされちやアしませんに　鉄「たつた今。おちやアかれといつたじやアねへか　おさる「ヲホゝゝゝ何かとおもやア。じやけらアいゝなさいます。ヤアレおかしやホゝゝゝゝ　太九「おめへハ中〳〵愛敬ものだ。コウ晩にちつと咄しがある。かならず。ナよしか〳〵　鉄「イヤ〳〵此人にやア。いゝかミさんも。子もあるから。わつちが所へ。きなこもち〳〵　おさる「ヲホゝゝゝわしらがやうなものを。嬉しやマア。どつちへ往ませうか。気が迷ひますにヲホゝゝゝト此内かつてより亭主の声にて　「おさるヤア〳〵おさる「ヘイ〳〵いまいきますせハしなひ。モシあなたがたア。六月市に参りなさると。ほん賑にこざいますに　鉄「わつちらも。兼てそふハおもつたが。そんな閙しひ時じやア。おめへがろくそつぽふに。ものもいつちやアくれめへと思つて。わざとに。こんな淋しひ

殊に漂客の娼妓どもを誘ひ連て。芝原に氈しきならべ。酒宴をものして諷ふあり舞ふあり。弾たつる三弦の音ハ。客を調子にのせて。桜より金銀の花紅を。願ふならんと。乗合の若きものどもハ。おもハず涎れを流し。鼻垂してながめ行に。山際に一ツの祠あり。蛭児の尊を祀れりとぞ。爰に漁りの船ども四五艘ばかり。網を曳て魚とれるを見て。太九郎兵へ

此神の恵ミに徳やすなどりの
得ものハおふくありてめでたい

トこじつけたるに。鉄七もまた筆とりて「アゝいゝ気晴だ成程作者の一丸子が。宮島ハいゝ所だ〳〵といつたを。國自慢だと思つたが。此景色ハどふもいへぬ〳〵

開きぬる盛の花の唇に
いはんことばも長濱の景

権七 かの上方もの「コリヤどれもゑろふおもしろい。わたしもまた一つやろかいな。ヱゝと斯しよ。アノ妓女にのろけくさる所。うかんだわいな。モシ江戸のおかた。ちよつとその矢立かしなされ トまた例の。はなかミのはしにかきて。出すを見れば

さくらいろの娼妓に漂て春日より
長ふミゆるハはなのしたかな

ト詠いでたる歌どもに。打興じぬるうち。船ハ小浦を過て。存光寺の濱といへるにぞ着たりける 爰らをすべてありのうちとて当しま八景のひとつなりときゝて 太九郎兵へ

虫けらも洩ぬ誓や爰の名ハ
かミの恵ミのありの浦とて

乗合ミな〳〵爰より上ると。宿引ども出迎て「これハどなたさまも。おはやふさまでございい 太九「ナニおはやうさまたア誰が名だ 宿「ハゝゝゝとふぞ私方へ。御宿おねかい申舛 太九「ちつと待てくんなせへ。小便が口へ出そふだ 宿引「へイあなたがたア。御口へも小便が出ますか 太九「出るだんか 宿「ソリヤ御調法じや。そんなら糞も出ますかいな 太九「イヤ唾が出やすハゝゝゝト石がきはうへ「シヤア〳〵〳〵〳〵 屁「ブゞブウ 引ブツ

宿「屁ハ尻からワハゝゝゝ。時に私方へ。御泊りくださりませ 鉄「おめへの内ハ何所で。名ハなんといふ。サゝ有体にもふしあげろヱゝト成田屋のものまね 宿引「私内ハ藝州宮じま。唾ハ申さぬ。本町にて。隠れも名代の色男。染楊枝屋の林十とハ。ヤ我等がことでごんすわい。ハゝゝゝサア。私方へ御出くださりませ 太九「ハゝゝゝイヤ如才のねへ。そりやアいゝが。おめへの内ハ奇麗で。そしてかミさんハ美しひかネ 宿「家ハ近頃ふしんをいたして。妻も随分。十人並でございます 鉄「そしておめへを。可愛がりやすか 宿「いたつて深切にしてくれます 鉄「イヤ得手あるやつだか。その深切ハ表向ばかりで内證じやア余所の男を。可愛がりやアしやせんか 宿「中〳〵もつて左様な事ハ 鉄「なけりやアいゝが。どふも油断がならねへ 宿「ソリヤ吃度御請合申ます 鉄「それも他人ばかりで。わつちにやア。相談がてきやすか。 宿「いかやうとも 太九「イヤいろ〳〵なことをいふハゝゝゝ。そんならおめへ所へきめが鼓としやうし 宿「それハありがたふぞんじ舛 鉄「きつとありがてへか 宿「きつとでございます 鉄「ありがたけりやア。はたごをぐつとまけの。御馳走ハ七五三だがよしか 宿「いつそまけて百味の御食ハゝゝゝサア御出くださりませ トさきにたちてゆくに二人もあとにつきてゆく道に。大きなる鹿どもむれゐて。何やらんくらひゐたるがやかてがミあひ。大げんくハをやらかし。ちうに立飛退ひやてたゝきあふに。二人ハびつくりして。ヲゝいたやうしに。往来の人にばつたり 「ヲゝいたや

ヤ窮屈でなりよりませぬト いふにミな〳〵とつづもゝともに打わらひて

「イヤそんだいにやア。田畑のことならハア跡へハよらぬて。まづ一反の畑にやア。肥しがハア何荷いる。また綿のさし肥にやア。干鰯がこんだき入ちうこたア。憚ながら。村でも先生でごいすト うぬをいふに。ミな〳〵ふきだして打わら太九郎兵衛とりあへず

ひ。興にいりて

これもまたかミの縁とて宝蔵と
間違てきく楮の生

ト こじつけたるに。鉄七もおなじく

是もまた打て作れるものとてや
それぞと人にとふきびのたち

ト 口ずさミたるに。船中ます〳〵大笑ひとなり。興を催す内。船ハすらり〳〵と走りて。つくねが嶋といへる所になんいたる。此所を。廣島と。宮島との。中央なりといへり 太九郎兵へて

つしちハ。つくねが島ときゝて。うしろなるまどをあけて。のぞき見れば、海中にさゝやかなるひとつの島あり。これをつくねがしまといふ。此島山に一ツの石塔あり。いかなるゆへそと問ふに。むかし此地かたなる五日市といへる所に。はなハだ親に不孝なるものありて。常にふた親にそむく事ひとかたならず。扨ある時恒にかれが。親のことバに違ふをしれバ。たハむれにいへるやう。我等死たらバ。かならずつくねがしまへほうむりくれよ。と。いゝたりける。扨それにしたがふべき。ものにあらねバ。よもそこへハおくらじとおもひて。わざといゝたることなるに。日を経て両親死ける時。かの不孝なる子思ひけるやう。我日頃不孝をなしたれバせめて遺言ハまもるべしとてついに此島へおくりて。しるしの塚をのこしけるよしきゝて。太九郎兵へ

握りめしほどに見へたる島山に

おやかう〳〵のはしをのこせり

斯て船ハ順風を真帆にうけて。走りける程にいつしか廿日市もあとになして。地の御前といへる所へいたる。爰ハ厳島の御旅所として。濱辺に一箇の宮造あり鳥居海中にたてり。六月にハ。神幸を爰に迎へ奉り還御の神事厳重なり両個も遥に。これをふしおがミて

あな尊と尻の出ものゝそれならで
地の御前てふ神の宮居ハ

ト 詠じたるに鉄七もおなしく

爰もとハ神のおたび名にをひて
はき清めけん塵も見へぬハ

ト 此二人の狂歌をきゝて。乗合の中に。五十ばかりなる上方ものと見へたる男 「コリヤおまさんがた。狂歌ハゑらひ〳〵わしもまた大好で。素壁の艸樹といふて。古ひ下手じやが。今ハもふ世事に迫れて。とつともふ。歌も出んわいな。しかし神さまのこと。あまり穢のいふてハ勿体ない。わしやまた奇麗にひとつやろわいな ト 矢立のふでとりいだし。ふところのちりがミへ。かきつけていだすを見れバ

おのづから宮居光りて見ゆるなり
是金箔の地の御前かも

のり合「ほんにコリヤめうじや。いかさま神さまことハ斯でなけりやいかんわいな。奇麗によめたハゝゝゝハゝゝゝト ふたりの顔見て。こなたのうたをほめそやすにいめへましいと。つらをふくらしてゐるもおかしく。扨とか船ハ疾もくする内に厳島なる聖崎てふ所にいたる。実神島ハおのつから。松のミどりも深くして山のすがた。殊勝なることいはんかたなし。此山の端を纔にはなれて一ツの小山あり世に是を蓬莱といへるよしきゝて太九郎兵衛

鶴亀ハまづおらねども余所ならぬ
ほうらい山を爰にミやじま

鉄七もまた

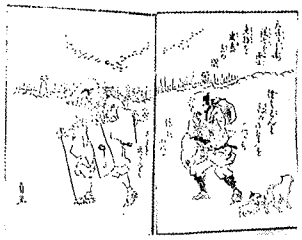
名にしをふ爰ハ灸のひじり崎
めをすへて見ん山のすがたに

偖船ハ漕ゆくほどに。頓て長濱といへる所にいたる。都て當島ハ。山野ともに桜多く。此海濱にも数株ありて今を盛に。爛熳たる花の梢ハ雲か雪かとうたがふ計。はた木の下にハ雌雄の鹿ども。耳打ふりつゝ。のたり〳〵とゆきかふさま。左ながら繪がけるがごとく。

頭楫つかをとりて。うた「船ハ追風にヨウ引。帆かけて走るヨウ引。何所の湊へかゝるやら。ヨイ〳〵ヨウ引。ヲイ長松その帆あしウ直せやい。コリヤアゑゝあんばいに。あらしてをるわい。そしてコリヤ茶でも焚てくれ ト そらをあちこちな 沖はまだマア。よふ吹ておるわい 外のせん頭 「よふそろじや ト いふと親父かじ カヂを少しまハす 「ギイゝ 引ト ひとりのとしわかなるせんとう。ちやがまのしたをたきつける。此内向ふよりきたる船とゆきちがひに「ヲゝイ太十ヤイ。早なるこなたの船頭声をかけかつたのふ。さつま芋ハどふじや芋ハ。アノウうらが方へも。五百目ばかし。わけてくれいよウ。アノウ能見の弥五右に。此中いふておいたが。いまにおこさんちうてノウ。嬶アめが屁の種がないと。くじふくつてならんてや 広しまことばに。おこることを。くじを くるといふ。さきの船のせんどう「ワハゝゝゝゝあいつに屁をひらしちやア。色気がさめらア。しかし迚も色気のない。おたふくじやケニ。次手に屁を放たら。ゑゝ見せものじや。ワハゝゝゝゝアハゝゝゝ「ハゝゝゝ何ウ馬 ト 行すぎるこなたの船頭 鹿アこきやアがるアハゝゝゝゝワハゝゝゝトこしの革たばこ入をとりて。きたないきせる。横「ヱゝチヨちつと屁だよふな。今ぐハへとなし ひといき吹てくれい トうた「安藝の宮島ヨウヲイ。廻れバ七里ヨウ引。七里七浦アゝ。七蛭子ヨウ。よい〳〵ヨウ引。ト船の程よくはしるにぞ。船頭ハ得手に帆を詠めながら。鼻のさきの頬かぶり風にひらつかせ。時〳〵船うたうなり出して。船頭の楽で。ほうらくじやと晒落ながら。四方を詠めて居る。偖また屋かたの内にハ。乗合皆〳〵。思ひ〳〵の咄シものして打興じける中に。六十ばかりの親父。傍に両掛一荷置てあり。木札のぶらさがりたるを見れバ。出雲大社祢宜。途俵茂内太夫とあり。また其向ふに居る人ハ。これも六十ぢかき親父にて。おなじく両掛一荷傍にあり。名札を見れば。厳島社家。鹿野糞太夫とあり。彼茂内太夫言葉をかけ

「コリヤおまいがたア。宮じまの御社家でごいすか 宮じま「さよふ〳〵。斯見うけた所が。おまへがたハ。大社の社家衆でありませふいづも「わし出雲の社家でごいす。例年の御札配りに出よりましたが。まだ宮じま様へ。参詣した事がないで。ふとつ参て来ふと思ふて宮じま「これハ不思議な縁で同船いたした。そして宮島ハ。どれへござる いづも「イヤわし初てゞ。何所という正的もごいせんて ト 此いづものかんぬしといふハ。実ハ百しやうなるが。神ぬしの代にやとハれて来たる。出来合の社家にて。かの宮じま社家をも。おなじく百しやうのばけたのと思ひ。てまへできざミたる。あらきたばこすつぱ〳〵くすべながら。宮じまの社家にむかひて 「ヱゝナニ宮じまの御社家さま。アノ今年ハ。蜀黍の生ハどふでこいす ト いふに。こなたハもとより。百しやうならね ば。心つかず宝物の太刀のことゝ思ひとりて 「イヤ宮島に。とうきびの太刀ちうハ。ねつから聞ませぬが いづも「ヘヱそんだら楮の生ハ 宮嶋「ハゝゝゝゝ幸蔵ハ。太刀じやアない。杓子の名人で。幸蔵杓子〳〵といふて。アリヤア宮島のめいぶつじやに 出雲「イヤはや此人ハ。ワハゝゝゝゝわし杓子のこたアいはんにハゝゝアノ楮の生のことでごいすテ トいふを宮じますこしミゝとふてまたきゝちがへてすこたんをいふ 「ハゝア成程宝蔵の太刀か。ソリヤア昔から。名将がたの奉納ものが。たんとあつて沢山なことよ。マア開帳でもして拝見さつしやい トとつてもつかぬへさつぱりわからずのミかけたきせるをはたきながら。 「イヤはや近年ハハア。兎角生の悪ひので。年貢もむつかしふごいす。 トいふにこゝろつきて 「ハゝゝゝコリヤアおまひ百姓と見へる 出雲「イヤおまへハ見通しじや。よふめきかしやつた。わし百姓でごいすが。大社の祢宜どのがたらぬ迚。雇れて廻りよりますてや。それにハア遂に着たこともない。腰ぶくろウ引かけて。ヤレコリ

て見物す。是を六月市といへり。爰に東都神田の八丁堀。彼彌次郎兵へ北八なるもの。先年幸に杖を曳て。いつくしまへさん詣なし。



其霊地絶景なることを。常に茶呑咄しにものしけるを。弥次郎兵へが甥の太九郎兵へ。北八が同腹異父の弟に鉄七といへるなまけもの。甚だ是を羨ミ。いまだ箱根もしらぬ化ものなれバ。ことし頓に旅行を思ひ立。伊勢参宮より上方見物。猶刷毛次手に。金毘羅。宮島へも参詣なし。粘次手に防州へ渡り。たまのことに算盤橋も見物して。縁もあらバ。鼻の下の長尋までぶらつき。丸山へしけこんで。よかばってんの女郎をつまミ。家猪羊のころ煎を喰て見。唐人の寝言も聞て咄しの種にせばやと。鳥が啼吾妻男の二人連。東海道を晒落ちらし。伊勢ハ古市の岩戸に籠りて。猿田彦の鼻を突ぱらせ。花洛の美服装に。おんなの艶しきをうらやミ。浪花の喰満に涎れを流しつゝ。見物もあらましになして。残りハ帰路とかたづけ。一六の便船に飛乗して。順風に帆をふくらし。百里の海上も。無難に日あらず廣島へぞ着たりける。偖爰よりのり合思ひ〳〵に上りけるにぞ。太九郎兵衛鉄七もおなじくあがりて。かねて作者一丸。去冬より当所へ下りて猿楽町なる。有田屋といへる。旅宿に逗留なし居けるよし聞て。其所へ尋ねいたりて。面會をなし。一丸も珍客なりと大によろこび。いろ〳〵馳走をなして。夜とゝも語りあひて。打ふしけるが。春の夜の明やすく。早くも軒端におとづるゝ。烏雀の声〴〵に目さまし。手水をつかひ膳もすミて。扨けふハすぐに宮じまへわたらんといふにぞ。さらバ廣しまけんぶつハ帰路のことゝ。船びんをきゝあハせ。一丸も二人を船「随分とも船中御用心。御機嫌よく」トあいさつなし。せんどうへもよくたのミてかへるト二人ハおくのかたへはいこミ。すハるひやうしに。となりの親父のねぶとへさハるとおやぢ びっくりして「アタゝゝゝゝ。コリヤわしの癤へさハつてじやアゝイタ〳〵 太九「御免なせへ。観音さまとハ露しらずチン〳〵 親父「ヱゝ観のんさんじやないねぶとじやわいな 太九「ハゝゝゝゝわっちやアまた。ねふどの観音だとおもひやした。堪忍しなせへ 親父「怪我じやしよことがない。アゝゑらひめにあふた 鉄「おゝらアまた。唐人でも乗て居るのだと思ツた太九「ナぜ〳〵 「唐人のねぶと 太九「おきやがれアハゝゝゝ ミな〳〵「ワハゝゝゝハゝゝコリヤほんにゑゝ口合じやアハゝゝゝワハゝゝゝ〳〵〳〵〳〵ト 大わらひとなる此内船ハだん〴〵下へさげると。やがて川口の御ばん所ほど「皆行義にさつしやいまさ。御番所でございます トいふにのり合ミなちかくなりたるに。船どう〳〵。ひざを直しかぶりものをとりて。行義にならびゐると。やが「乗て御ばん所のきハへいたると船頭ふねをとめて衆船でございます トとゞけすミておしいだしこ所へいたる。爰に丸子山とて。さゝやかなる山の上に。小堂あり不どう尊を安ず。れいげんあらたにて。けいじん常にたへず。はやらせ玉ふとなんきゝて。両人もふしおがミツゝ太九郎兵衛

祈りなば悪事ハなふまくさまくだと
よの人ハミな参るべいるしや

鉄七もふしおがミて

不動奇端とおがむ賽銭ハ
つむほどこゝにおさまる子山

ト法施して爰を過ると。右の方に。江波の湊見ゆる。家居つき〴〵しく。船ども数艘帆ばしらをならべて鞆づなを繋り

百千船しげき出入の商ひに
利潤を江波の湊賑ふ

頓て船ハ川口を放れて。数里の海上にいたる遠近の詠めよし爰にヒゞトいゝて。海中に数千の竹を立つらね。蠣。海苔などをとる設となせり。偖北風吹出たれバ。よきあらしなりとて。爰より帆を十ぶんに捲あげ。親父の船

滑稽道中

宮嶋美屋毛初編序

眼に視へぬ鬼神を笑はせ。猛き武士の石部金吉殿をも。吹出させるものハ何ぞや。予が故師十返舎翁が。筆の鞭もて乗廻されし。彼駿足の膝栗毛なりけり。佐禮や太鼓をうち。屁を放て世の人の笑嚢の底をはたき。遂に先生とゝもに。跡を隠して。看官の腮の鐍をかため。且臍の宿替の騒動を鎮たりしが。兎に角無もの喰ふの世の中。予頃日廣島に杖を曳て心の猿楽町なる。旅篭屋の看楼に。にじり込たるを幸なり迚。予にその。垂捨たる馬糞を拾ひて。せめてハ咲ひ艸の。肥しとせよと勧る事急なり。素り暁慾の道にあなれば。其賃銭を着腹と。筆の箸にかきよせて。初編二くわんの料とハなしぬ。閲者ほてつ腹をよりて。問屋の門を賑さば。頗幸甚ならむと。例の慾の皮財布ひねくり。三文計の智恵を揮ツて。鬼殺しの酒手をちよろまかさんと為ものハ。隠も

浪花のうら屋住。滑稽戯作に名を得たる

嘉永辛亥陸月上澣　十方舎一丸自識

まひとつ附言

嚮に予談合膝くり毛。一編を著し。幸に行れたりとて。書肆その嗣編を乞ふこと頻也。されど予が貧生も。筆業繁多にして。いまだそれを果さず。さるに去年神無月。不図故郷廣島なる。書房某より招るゝに依て。頓に一六の便船に。飛のりしてくだり着ぬ。幸成とて。彼膝栗毛に倣ひて。宮島ミやけてふものを編てよと。乞るゝに任せ。急迫に筆を採て。こじつけんとせしが。思へば先生の。名作もあなるにと。黙止つるをゆるさずとハ嘘の皮。例の慾心の爪を研たてゝ。ひつかく事左のごとし

滑稽道中

宮島土産初編上巻

浪花　十方舎一丸著

抑〳〵厳島大明神は。推古天皇端正五年の御鎮座にして旧遠の霊社たるにより。代々の帝王かしこくも龍頭鷁首をすゝめて行幸なり。神徳の光りを添玉ふ就中平相国清盛公此御神の威霊を。信仰厚く爰に参籠なして夢想の神詫を得。且蛭巻なしたる。白柄の長刀を授り。驕奢なくハ平家益〻栄んとの御告に。感涙を流し。彌〻偈仰の思ひ深く。遂に社頭を悉再営あり宝殿廻廊の荘厳。魏々堂〻として百八の燈籠の光りハ浪に映して海底に星の影を顕し宜祢が鼓の音すミて山岳を動せ内侍ハ舞の袖を飜して神のこゝろを慰む。彌山にハ守護神。鼻を高くして賞罰をあきらかになし玉ふ。されや尊信の詣人常に間断なく。御島廻り浦回りの船。ひきもきらず。殊更にこの島ハ扶桑佳景の冠として月雪花の詠め。一ツとして欠たることなく。風騒の士絶ることなしとかや。将六月の神祭ハ世に名高くして。其賑ひハ都鄙の耳目を驚す。壮麗たる神船。供奉船の綺羅。海川につゞく万燈ハ。左ながら浪を焦し。漕たつる櫓拍子には竜の都も騒ぎつべし。その瞻望ハ。よし野龍田の花紅葉を。廿ばかりよせたとんやうにて。筆にも言にも尽すべからず。遠近より群参し

資料紹介―「滑稽道中宮島みやげ」

宮島歴史民俗資料館学芸員
高橋修三

ここに紹介する「滑稽道中宮島みやげ」は、縦一七八mm、横一二二mmの版本で、初編上巻・下巻・拾遺、二編上巻・下巻、三編上巻・下巻の七冊よりなる滑稽本である。宮島町瀧町福田道憲氏蔵（初編上巻・下巻は資料館においても所蔵）。茶色表紙にそれぞれ赤地の題簽が貼られており、内題と同じく「滑稽道中宮島みやげ」と手書きで記されている。なお、広島諸見物、出雲大社参詣の滑稽を趣向とした四編・五編の近刊予告がみられるが、実際に刊行されたかどうかは不明である。

著者は、広島出身で浪速住の十方舎一丸。初編の自序に「予が故師十返舎翁」と記し、初編下巻の「門人五方舎半丸」による跋文に「一丸先生ハ。故人一九大先生の遺弟にして。能其骨肉を得。滑稽稗史ハ今海内。此先生の右に出るもの更になし」とあるように、十返舎一九の系統に属すると考えられるが、その事蹟等については未詳である。一丸は雅号を橘園といい、狂歌を得意としたほか、画才にもたけ、見返しや本文の挿絵を自らが描いている。著作としては他に、雑俳集「宮島名所新膝栗毛」（厳しま参詣新柳樽）、「秋宵奇談晦の王兎」がある（『広島県史近世2』）。

一丸は、嘉永三年（一八五〇）より広島に滞在してこの作品を著しており、刊行年月は、それぞれ初編上巻・下巻が嘉永四年一月、同拾遺が五年二月、二編上巻が四年六月、同下巻が四年十月、三編上巻が四年六月、同下巻が五年一月。版元は、江戸須原屋茂兵衛、同岡田屋嘉七、長州萩山城屋孫七郎、広島世並屋伊兵衛、同井筒屋忠八郎、大坂秋田屋太右衛門、同河内屋茂兵衛（初編下巻奥付）となっている。

内容は、全編が「十返舎うつし」（作者口上）によって構成されており、東都の弥次郎兵衛の甥太九郎兵衛、北八と同腹異父の弟鉄七を主人公とした宮島参詣（初編、二編）、岩国見物（三編）の失敗滑稽譚である。そのため、特に創意は認められないものの、名所・旧跡・風俗やそれらにまつわる由来・伝説、名物・方言などを取合せ、より旅行案内記的な性格をもたせたところに一つの特色を見出すことができる。初編拾遺は、「見遺し名所最多し。閲者の遺憾ならずや」（序文）として補われたものである。これらの描写がどこまで実際の見聞に基いているのか、またその写実性は、など検討を要する点はあるものの、「爰じやア。金を遺ふ人でなけりやア。賢ひ人たアいゝません。其はづ爰ハ皆。客衆のかげでたつ所じやもの」（初編下巻）などの会話とも相俟って、当時の宮島の生活文化の一端を窺うことのできる資料と考えられる。なお、紹介は初編、二編のみとした。

翻刻にあたっては、異字・略字を通行の字体に改め、割注の振り仮名を省略した他は、ほぼ原文の通りとし、誤字や濁点の誤脱などもそのままとした。また、見返し・奥付・広告類などは、適宜割愛した。

宮島の歴史と民俗 No. 7

平成２年３月15日　印刷
平成２年３月20日　発行

編　集　宮島町立宮島歴史民俗資料館
　　宮島町史編さん室
発　行　宮島町立宮島歴史民俗資料館
印　刷　日本写真印刷株式会社